

太宰府・佐野地区遺跡群 V

—— 宮ノ本遺跡第7-2次調査 ——

1995

太宰府市教育委員会

太宰府・佐野地区遺跡群V

宮ノ本遺跡第7-2次調査

正誤表

1995

太宰府市教育委員会

【佐野地区遺跡群V】正誤表(1)

P	行	誤	正
目次	12	58	59
7	13	(7SK380)	(7ST380)
8	2	(7ST290・355)	(7SB290・355)
11	22	約10mm	約10cm
11	24	約70から	約70cmから
11	24	50mm	50cm
11	28	約10の	約10cmの
13、14	Fig.11	58.00m	58.00m
15、16	Fig.12	2.淡灰黄色砂質土(槽内填土)	2.淡灰黄色砂質土(槽内埋土)
17	1	側平を受けている、	側平を受けている。
17	7	その後掘り方	その後掘り方
22	14	第一主体部より検出した。	第二主体部より検出した。
23、24	Fig.21	25.淡黄色砂土	26.淡黄色砂土
28	10	S-W	S-E
33	28	胴部最大径49.8mm	胴部最大径49.8cm
34	2	3.5mm	3.5cm
34	5	30° -W	30° -E
34	12	約30mm	約30cm
35	16	口径33.2mm	口径33.2cm
35	17	7mm	7cm
35	22	3以内	3cm以内
35	23	口径33.2mm	口径36.5cm
35	23	器高50.7mm	器高56.1cm
36	1	G.N.83° 40' -E	G.N.96° 20' -E
39	22	口径54.3mm	口径54.3cm
39	22	器高66.1mm	器高66.1cm
39	22	胴部最大径53.1mm	胴部最大径53.1cm
41	7	残存器高64.7mm	残存器高64.7cm
41	7	胴部最大径66.1mm	胴部最大径66.1cm
42	12	検出できなかった。	検出できなかった。槽外埋土中から、土師師の鉢片が出土している。
44	1	長さ、1.8m	長さ1.8m
49	Fig.48	7SK210実測図(1/30)	7ST210実測図(1/30)
50	3	西朝	東朝
50	6	約10mm	約10cm
53	10	ふくらみのない	ふくらみのない
55	Fig.52	3.黄茶色土	3.黄茶色土
56	10	径1.0~1.2cm	径0.4~0.6cm
56	10	高さ0.4~1.1cm	高さ0.2~0.6cm

『佐野地区遺跡群V』正誤表(2)

P	行	誤	正
56	10	穿孔径0.3~0.5cm	穿孔径0.15~0.25cm
62	13	であることが考えられる。	であることが考えられる。
74	Fig.78	40° 10'	43° 10'
75	8	木柙器	木柙蓋 (歴史時代)
78	19	鉢 (1)	碗 (1)
84	11	直径約0.8mm、高さ約0.6mmである。	幅0.5×0.4cm、高さ0.2cmである。
87	10	西側に集中することから西側と判断した	南側に集中することから南側と判断した
88	7	G.N-8° 10' -E	G.N-8° 10' -W
93	Fig.108	(a) 暗黄茶褐色土	(a) 1.暗黄茶褐色土
96	11	何れか時代	何れか時代
96	12	手によってか選り分けられた	手によって選り分けられた
96	29	長軸15mm	長軸15cm
100	6	また、主体部の掘り方を	また、主体部の掘り方を
101	26	主体部	掘り方
102	3	時期は遺物が出土していないため確定できないが	時期は14号墳との新旧関係と出土した遺物より
102	10	考えがたい。畿内	考えがたい。7、8世紀代の畿内
102	12	略文の施し方も正放射ではなく、	正面から見て左斜め上がりの、
106	24	7期	8期
109	11	『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』	『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
109	13	『乙益重隆先生古稀記』	『乙益重隆先生古稀記』
112	7ST300	Fig.98-16 0.65+	Fig.98-16 1.65+
Pla.8		14号墳主体部完掘状況	14号墳主体部完掘状況
pla.8		14号墳第2主体部完掘状況	14号墳第2主体部完掘状況
pla.13		7ST365完掘状況 (南から)	7ST365完掘状況 (南から)
Pla.14		7ST370完掘状況 (北東から)	7ST370完掘状況 (北東から)
Pla.17		7ST163内埋土除去状況7ST02遺物検出状況 (東から)	7ST163内埋土除去状況 (東から)
Pla.17		7ST165下層施設及び石段状況7ST02遺物検出状況 (南から)	7ST165下層施設及び石段状況 (南から)
pla.21		7ST185完掘状況 (北西から)	7ST185完掘状況 (北西から)
pla.24		7ST245完掘状況 (北から)	7ST245完掘状況 (北から)
pla.31		7ST135完掘状況 (南西から)	7ST135完掘状況 (南西から)
pla.33		7ST275完掘状況 (南東から)	7ST275完掘状況 (南東から)
pla.36		7SK155完掘状況 (北から)	7SK155完掘状況 (北から)
pla.39		7ST305完掘状況 (南東から)	7ST305完掘状況 (南東から)
pla.40		7ST340(091)完掘状況 (北西から)	7ST340(091)完掘状況 (北西から)
pla.41		7ST120完掘状況 (北西から)	7ST120完掘状況 (北西から)
pla.44		7ST295完掘状況 (北西から)	7ST295完掘状況 (北西から)
pla.48		7ST310完掘状況 (南西から)	7ST310完掘状況 (南西から)
pla.50		7ST330完掘状況 (西から)	7ST330完掘状況 (西から)
pla.51		7ST345完掘状況 (西から)	7ST345完掘状況 (西から)

(P6)

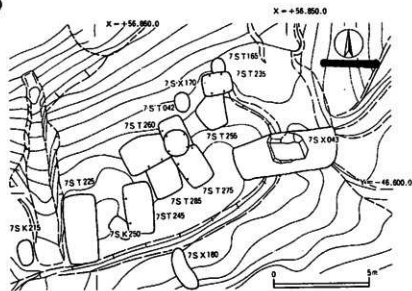


Fig. 3 南東尾根略図 (1/200)

(P6)

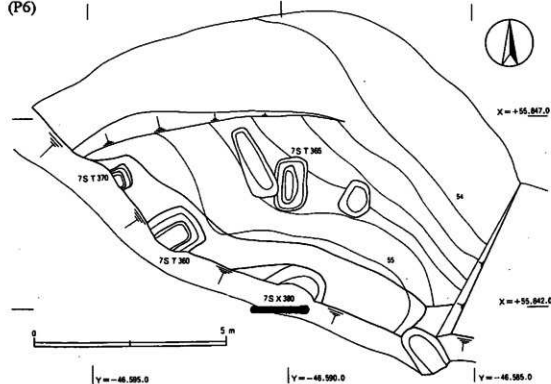


Fig. 4 15-16号墳下層遺構分布状況 (1/100)

(P6)

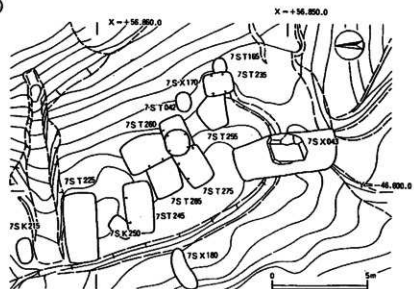


Fig.3 南家尾横略图 (1/200)

正

(P7)

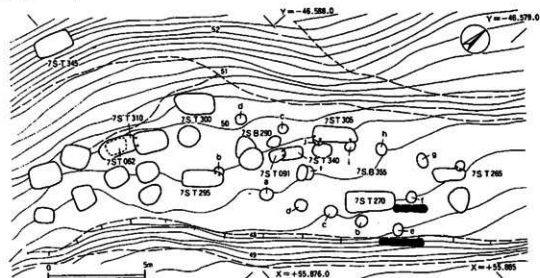


Fig. 5 丘陵南斜面略图 (1/200)

(P6)

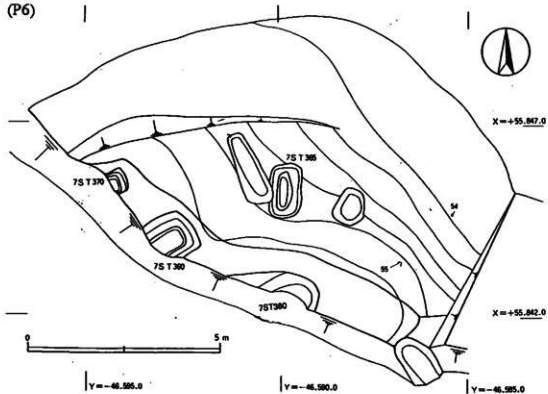


Fig. 4 35-16号坑下层透棚分布状况 (1/100)

碑

(P28)

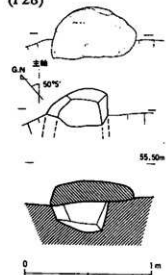


Fig.25 75T370 实测图 (1/30)

(P7)

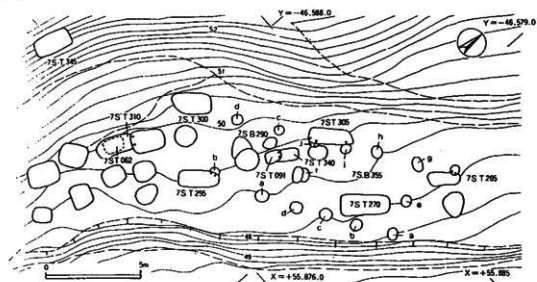


Fig. 5 丘陵南斜面略图 (1/200)

(P28)

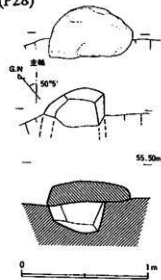


Fig. 25 75ST370 尖刃图 (1/30)

正

(P85)

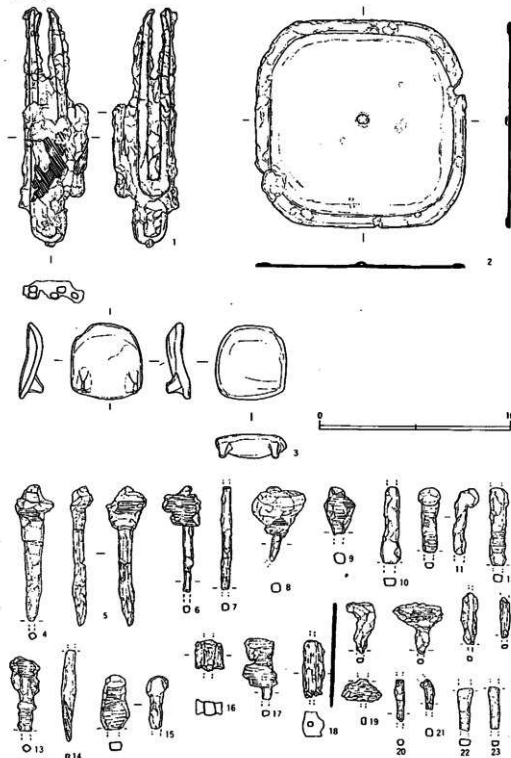


Fig. 98 75ST300出土遗物实测图 (1/2)

誤

(P85)

正

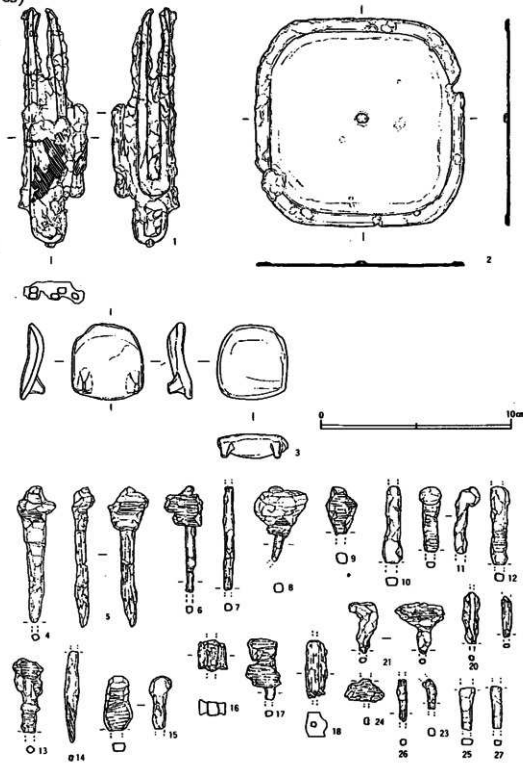


Fig. 98 7ST300出土遺物実測図(1/2)

(P23.24)

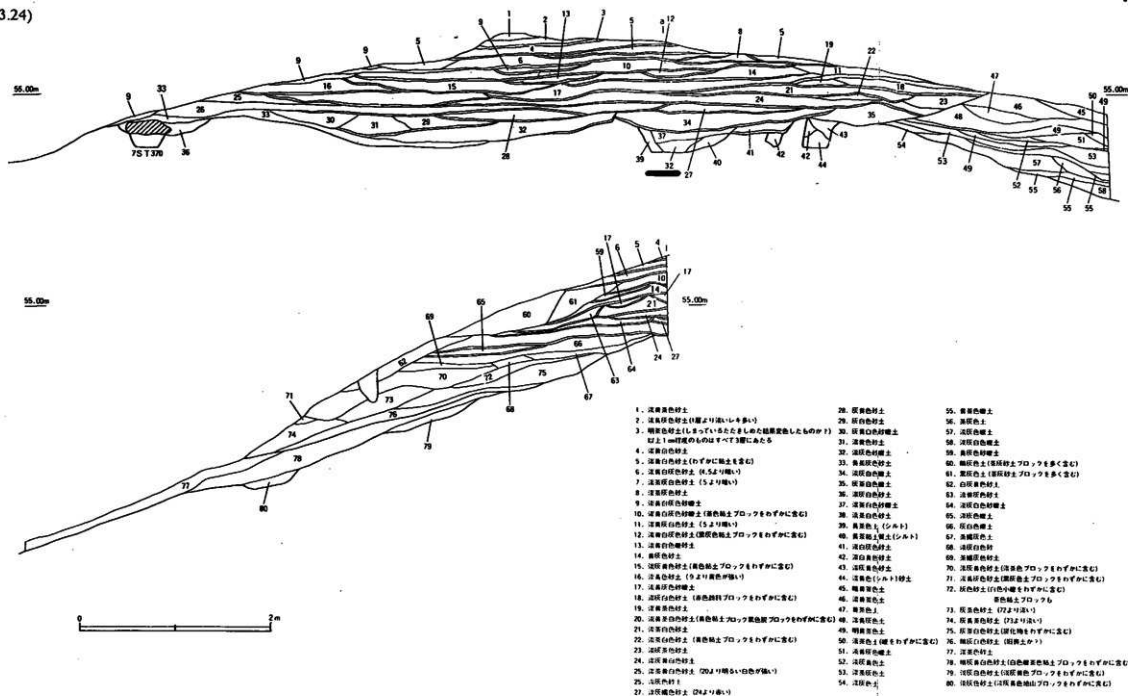


Fig.21 15-16号墳土層観察図(1/40)

(P23.24)

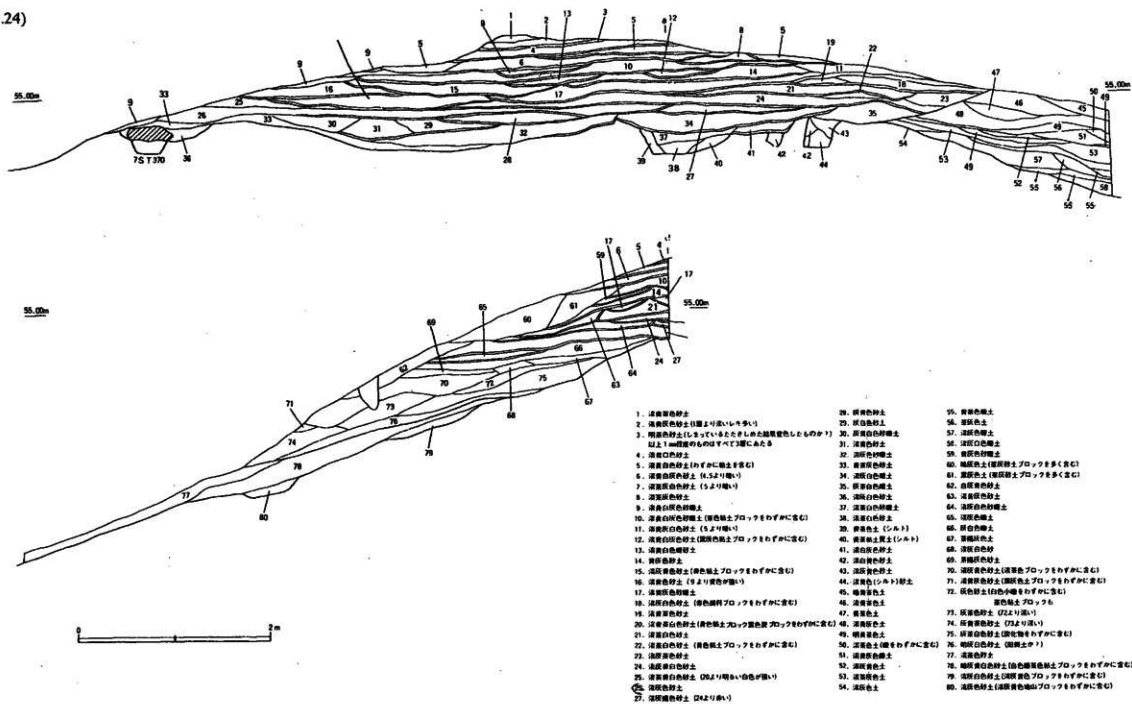


Fig.21 15・16号土層観察図 (1/40)

(P37)

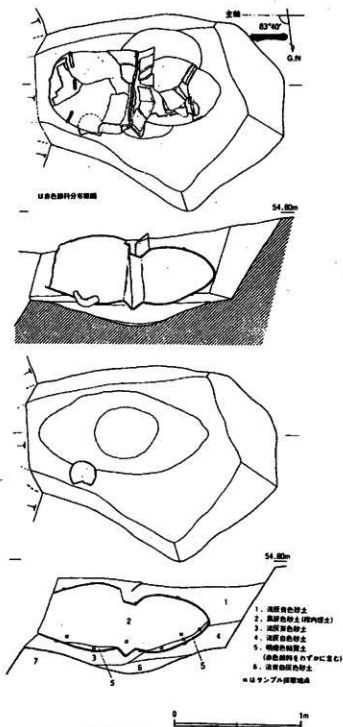


Fig.37 7ST255実測図(1/30)

(P55)

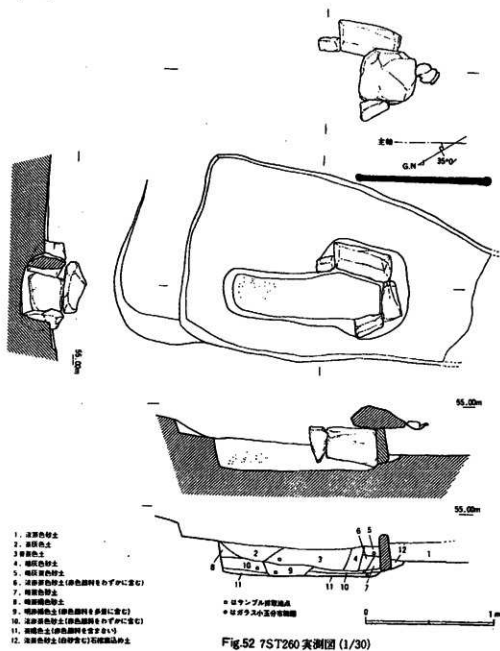


Fig.52 7ST260実測図(1/30)

(P67)

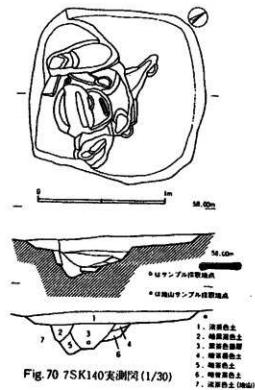


Fig.70 7SK140実測図(1/30)

(P37)

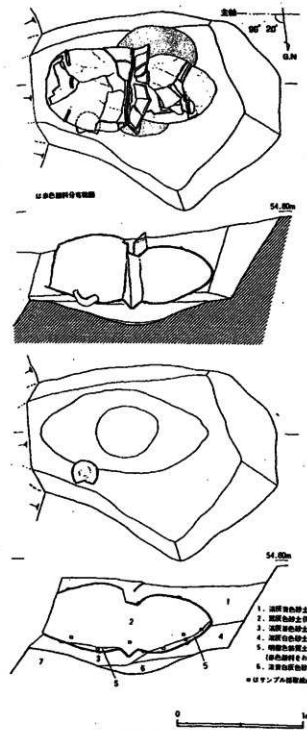


Fig.37 75T255実測図 (1/30)

(P55)

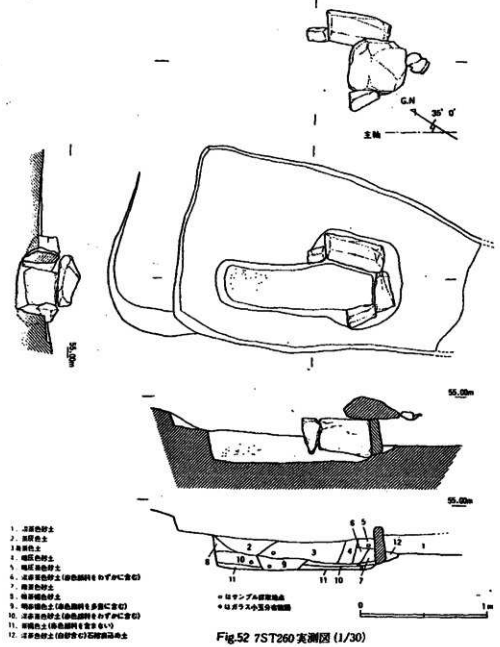


Fig.52 75T260実測図 (1/30)

(P67)

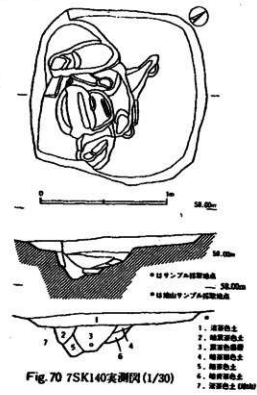


Fig.70 75K140実測図 (1/30)

1. 遺構跡地
2. 埋戻土
3. 敷土
4. 礎石跡地
5. 礎石跡地
6. 遺構跡地(礎石跡地をわすかに含む)
7. 埋戻土
8. 埋戻土
9. 埋戻土(礎石跡地を多数に含む)
10. 遺構跡地(礎石跡地をわすかに含む)
11. 埋戻土(礎石跡地を多数含む)
12. 遺構跡地(礎石跡地を多数含む)

1. 遺構跡地
2. 埋戻土
3. 敷土
4. 礎石跡地
5. 埋戻土
6. 埋戻土
7. 埋戻土(礎石跡地を多数含む)

【佐野地区遺跡群V】正誤表 (3)

P	行	誤	正
48	23	14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交する形で構築された	14号墳の南東に位置し、北東尾根の等高線に並行する形で構築された
48	29	棺の掘方の周囲に	棺の掘り方の周囲に
65	24	7ST150を切る	7SK150を切る
66	8	7ST145の下層から検出された	7SK145の下層から検出された
102	19	鉄製刀子を供献するが、	鉄鏝を供献するが、
103	17	7ST150は切り合い関係上	7SK150は切り合い関係上

太宰府・佐野地区遺跡群 V

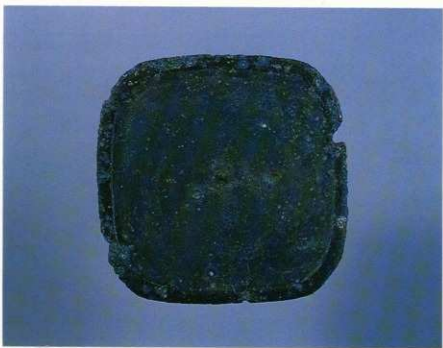
太宰府都市計画事業佐野土地区画整理
に伴う埋蔵文化財調査報告書（5）

1995

太宰府市教育委員会



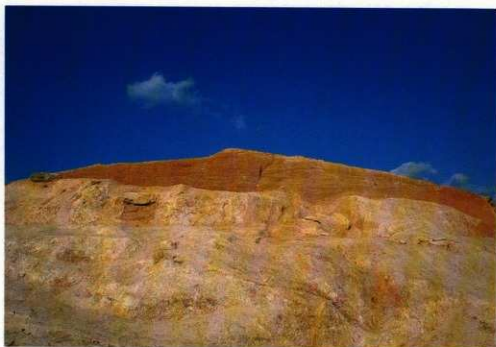
7ST295出土八稜鏡



7ST300出土方形鏡



13号墳主体部(南から)



15号墳墳丘土層断面(南から)

序

本書は、太宰府市が市の西郊にある、佐野地区で行っております佐野土地区画整理事業に伴う一連の発掘調査のうち、平成4年度に実施いたしました宮ノ本遺跡第7-2次調査についてまとめたものです。宮ノ本遺跡は、昭和54年度の太宰府市立太宰府西小学校建設に伴う調査で、平安時代の墳墓からわが国で初めて買地券が出土し、全国的に話題を呼びました。またその後の調査でも、大宰府に関係する官人等の中でも最も高位の人物達が埋葬されたとみられる墳墓群が見つかり、官人等の奥津城としての全容を明らかにしつつあります。

今回の調査でも副葬品や供献品には目を見はるものがあり、都以外では西日本随一と言っても過言ではない内容であります。これらの遺物は太宰府が奈良、平安の都から遠隔地であるにもかかわらず、中国大陸や朝鮮半島との中継点としての役割を彷彿とさせるものであり、当時の太宰府の繁栄ぶりと重要性を窺わせます。

本書が学術研究はもとより文化財の保護と理解、認識を深めるためにお役立ていただけることを願います。

発掘調査は冬の寒い時期に行われましたが、調査に参加されました作業員の皆様の御努力により無事調査を終えることができました。この場をお借りして、感謝申し上げる次第であります。

太宰府市教育委員会

教育長 長野 治 己

例 言

- 1、本書は、平成4年度に太宰府市教育委員会が、太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴って、一部国（建設省）及び県の補助を受け調査した、宮ノ本遺跡第7次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、宮ノ本第7次調査は、開発事業の関係から当初予定の約半分の区域を平成3年度に調査しており、今回報告分については第7-2次として扱うこととした。したがって遺構に付した番号は前回と連続するものとした。
- 3、現地での発掘調査は、平成4年11月2日から平成5年3月31日まで実施し、整理については平成6年度を主たる事業期間として行った。
- 4、開発対象面積は、約20,000㎡（平成3年度分を含む）、発掘調査面積は10,500㎡である。
- 5、調査及び整理に伴う関係者は、第1章に記した。
- 6、調査地の全体図作成は、アジア航測株式会社福岡支店に委託し、個別の遺構実測図は調査担当者の塩地潤一のほか、狭川真一、井上信正、藤尾 薫、柴田 剛、立田 理、古賀里恵子、秋吉由紀子、永田佳子、河田 聡が行った。また、出土遺物の実測は、境 一美、鶴味加代子、西村晴香、塩地、井上、藤尾、河田が行い、繪絵は境、鶴味、河田が行った。
- 7、遺構の写真撮影は、空中写真を御空中写真企画、航空写真はアジア航測株式会社福岡支店、個別の遺構写真は塩地、柴田、藤尾、井上、河田が行い、遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）の他、狭川、井上、下川可容子、河田が行った。
- 8、本書で用いる方位は、座標北（G. N.）であり、測量及び実測基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系によっている。
- 9、出土遺物のうち鏡等金属器の応急的な保存処置については、山中幸子、下川可容子が行った。
- 10、本書の執筆はI章を狭川、Ⅲ章（2）遺構部分とⅣ章の頭位の検討を除いた部分を塩地が行い、他は河田が行った。
- 11、編集は狭川の指導のもと河田が担当した。

目 次

I、はじめに	1
II、歴史的環境	4
III、調査の概要	5
(1) 遺構の分布状況	5
(2) 古墳	8
(3) 墳丘下層施設	25
(4) 土器棺墓	28
(5) 木棺墓	42
(6) 木蓋土壙墓	48
(7) 箱式石棺墓	50
(8) 石蓋土壙墓	58
(9) 土壙	64
(10) 土壙墓〔歴史時代〕	71
(11) 木棺墓〔歴史時代〕	75
(12) 掘立柱建物	92
(13) 近世墓	92
(14) その他の遺構と遺物	94
(15) その他の遺物	96
IV、小結	100

I.はじめに

昭和62年度から実施された大宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴う発掘調査は、これまでに約40地点（13遺跡）におよび、遺跡残存推定範囲の約半分近くを終了している。発見された遺跡は、弥生時代前期から中世にかけての住居、墳墓などその性格は様々であるが、なかでも前田遺跡で発見された古代官道は、複数の遺跡を線で結び、遺跡を面的に捉えることの必要性を訴え、脚光をあげた。また、ここに報告する宮ノ本遺跡は、昭和54年度の学校建設に際して発見され、平安時代の買地券の出土で一躍有名になったもので、古墳時代から平安時代にかけての墳墓を中心とした遺跡である。

さて、今回報告する第7-2次調査は、区画整理事業に伴う土取り用の丘陵のひとつに位置しており、土取り後は区画が整備され宅地として利用される予定になっている地点である。また、平成3年度に実施した同第7-1次調査の西に続く丘陵部分でもある。当初はこれらを一度に調査する予定であったが、別の調査地点を先行して実施する計画に急遽変更されたため、やむを得ず2年度にまたがって調査を実施した。

調査の進行に合わせて、遺跡の重要性が確認されるとともに、市民への普及活動の一つとして2月24日にはマスコミへの発表を実施し、テレビ、新聞などで広く紹介された。また、2月27日には現地説明会を実施し、約200名の参加者があった。参加者の中には関係する小学校からまともして学習に訪れてくれるなど、主催した我々にとっても意義のあるものとなった。また、平成5年度秋には、(財)古都大宰府を守る会主催で「大宰府の奥津城」と題した宮ノ本遺跡を中心とした特別展が開催され、宮ノ本遺跡を大宰府の中に位置づけた形で知ってもらう絶好の機会を得ることができた。調査及び説明会など様々な部分で関係された方々に対して感謝申し上げる次第である。

なお、調査地は大宰府市大字向佐野388-2、390、393-1、398、400-1、400-3、401ほかで、現地での調査は平成4年11月2日から平成5年3月31日まで実施した。出土遺物の整理作業及び報告に伴う作業は一部先述した特別展の関係で平成5年度に行ったが、作業の中心は平成6年度に実施した。

調査及び整理に伴う関係者は次のとおりである。

平成4年度（1992年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二

	主任主事	岡部大治	川谷 豊		
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利	緒方俊輔
	技 師	山村信榮(7月から主任技師)		中島恒次郎	塩地潤一
	技師(嘱託)	田中克子			

平成6年度(1994年度)

	総括	教育長	長野治己		
	庶務	教育部長	白木三男		
		文化課長	花田勝彦		
		文化財保護係長	高田克二		
	主任主事	岡部大治	川谷 豊		
	主 事	今村江利子			
調査	技術主査	山本信夫			
	主任技師	狭川真一	城戸康利	山村信榮	
		中島恒次郎	重松麻里子		
	技 師	井上信正			
	技師(嘱託)	田中克子(～7月31日)	下川可容子		

(発掘調査参加者)

大田敬子	大田八重子	大田ヤス子	境 美佐子	柴田ツキエ	隅田久子	高木宗代
高鍋キミヨ	中溝洋子	萩尾泰佑	古川民子	古川トミ子	古川ヨシ子	宮原圭子
宮原ハナエ	山本洋子	秋山千津子	岩男澄子	宇田川操子	金子タケ子	川原田美千代
岸邦子	小柏澄子	早田ミツル	中嶋幸子	中嶋さなみ	宮田恵子	村山龍子
巽原寿美江	吉岡農子	江島スミエ	大迫フミ子	古賀 昭	近藤秋枝	田部澄博
原 康之	藤 榮	松隈真理	松本茂吉	松本信行	梅津登美子	陶山小春
松田路子	山内アサノ	和田ハマ子	上原祥美	木村静子	木村末子	田中幸子
主税松子	永川満香	和田京子	深川加寿子	増野芳枝	内野絹子	手島久子
花牟礼恵子	森由美子	古賀里恵子	秋吉由紀子	永田佳子	立田 理	柴田 剛
藤尾 薫	河田 聡					(以上発掘調査作業員)

井上信正

(以上調査補助員)

(整理参加者)

林 美知子	中村房子	菊武淑子	小西晴代	武堂年子	鶴味加代子	境 一美
西村晴香	黒木美幸	白水文恵				(以上整理作業員)
河田 聡	山中幸子					(以上調査補助員)



- | | | | | | |
|-----------|-------------|----------------|-----------|-----------|--------------|
| 1. 大野城跡 | 7. 深谷分屯所跡 | 13. 湯賀軍団印出土地 | 19. 原口遺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 31. 軍遺跡 |
| 2. 森原城跡 | 8. 千足遺跡 | 14. 大野村魚池跡(堀内) | 20. 藤原遺跡 | 26. 藤原遺跡 | 32. 磯田山遺跡 |
| 3. 神の尾遺跡 | 9. 柳屋軍団印出土地 | 15. 吉成遺跡 | 21. 前田遺跡 | 27. 野城戸遺跡 | 33. 通場山遺跡 |
| 4. 藤原園分屯所 | 10. 水堀跡 | 16. 前橋寺跡 | 22. 家ノ本遺跡 | 28. 野口遺跡 | * 427-2次調査地点 |
| 5. 辻遺跡 | 11. 大野村診療跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 23. 龍川遺跡 | 29. 新野遺跡 | |
| 6. 根本遺跡 | 12. 船匠寺跡 | 18. 神ノ前遺跡 | 24. フタ遺跡 | 30. 高人塚遺跡 | |

Fig.1 大宰府とその周辺の遺跡 (1/30,000)

II. 歴史的環境

遺跡はただ漠然と意味なくその場所に存在しているものでなく、その場所に存在することが様々な意味を持つものである。宮ノ本遺跡もまた、この地の重要性から、その役目を背負い続けた場所であったといえよう。その宮ノ本遺跡を有する太宰府市は、北郊に大城山城を西郊には背振山城を有し、福岡平野から筑紫野へと続く平野が二つの山城により最も狭まった場所に位置する。そしてこの地域を流れる御笠川はいくつかの支流を交えながら博多湾へと流れ込むのである。この地狭部を挟む福岡平野、筑紫野ともに太古より栄えた場所であり、この二つの地を結ぶ太宰府市は交通の要衝として重要であったことは現在の交通事情からも察するところであろう。

宮ノ本遺跡は太宰府市の西郊佐野地区に位置する。佐野地区は御笠川にそそぎ込む大佐野川周辺の緩丘地と、標高70m程度の舌状に張り出す小丘陵域を背にするように展開し、弥生時代前期には前田遺跡に集落が、弥生時代後期になると尾崎、脇道、前田遺跡で大規模集落が営まれる。古墳時代初め、これらの遺跡では集落は確認されているが、いずれの場所でも弥生時代後期のような大規模集落は未だ確認されていない。そしてこの時期より宮ノ本丘陵は首長層の水脈の地として造墓活動を開始するのである。

7世紀の終わりになると、太宰府市北域の大城山南麓に律令制度の象徴たる役所、大宰府が建設され「天下の一都会」とよばれる時代がおとずれる。その大宰府に関わる役人等の奥津城として宮ノ本丘陵は再び造墓活動の場となるのである。宮ノ本丘陵に葬られた人々は、その墳墓から出土する副葬品や供献品の豊富さから、おそらく役人の中でも階層の高い人々の眠る場所であったのであろう。

宮ノ本丘陵はその後、近世代となっても墓域としての役目を果たし、さらに昭和まで墓域としての役目を負い続けることとなる。しかし、太古より墓域としての役目を背負い続けた宮ノ本丘陵も、近年の急激な土地開発などの事情により姿を変えはじめ、今日その役目を終えつつある。

Ⅲ. 調査の概要

(1) 遺構の分布状況

調査区には尾根がL字状に存在する。北東方向に延びる尾根は宮ノ本遺跡7-1次調査では南尾根として報告したものと同一の尾根であるが、今回は北東方向に延びることから北東尾根とした。北東尾根線上には宮ノ本遺跡7-1次調査の12号墳が存在する、またもう一方14号墳から南東に延びるものを南東尾根とした。また、尾根の間の丘陵南斜面部分には平安時代の墳墓が多数存在する。

北東尾根 (Fig. 2)

調査区を北東方向に延びるこの尾根は7-1次調査で確認された12号墳が存在する尾根と同一のものであり、今回の調査では2基の古墳が確認された。それらは尾根の北側に位置する13号墳と、南東尾根との分岐点にあたる場所に構築された14号墳である。またこの2基の古墳の付帯施設とみられる遺構は、13号墳の主体部を切って構築された土器棺墓 (7ST115)、14号墳周溝に切られて構築された木棺墓 (7ST205) と周溝を切って構築された木棺墓 (7ST185) と石蓋土壊墓

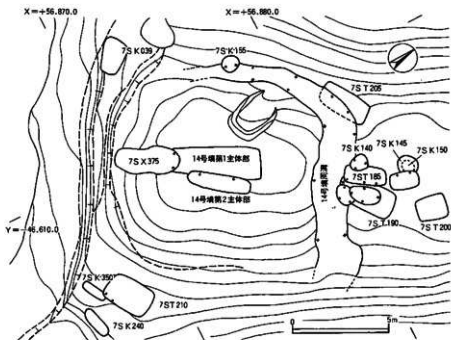


Fig. 2 14号墳及び周辺略図 (1/200)

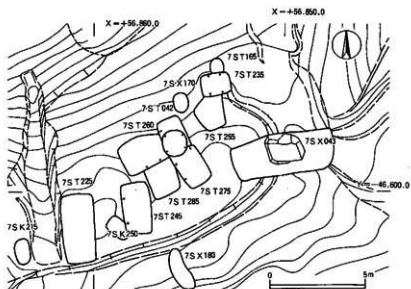


Fig. 3 南東尾根略図 (1/200)

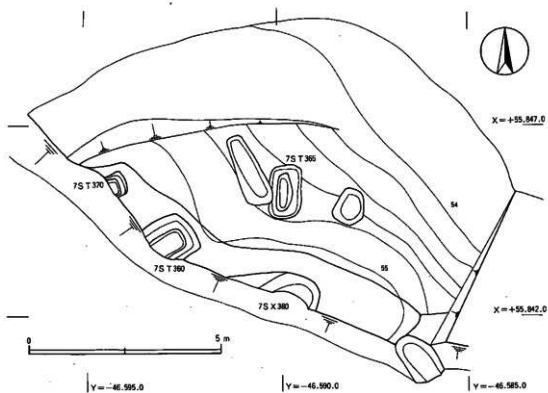


Fig. 4 15・16号墳下層遺構分布状況 (1/100)

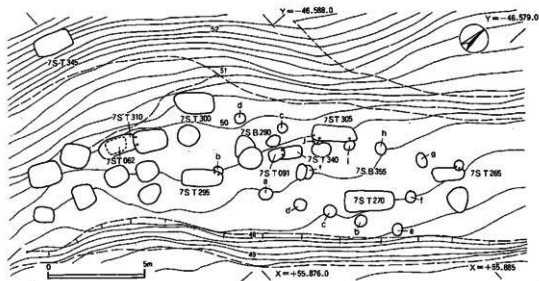


Fig. 5 丘陵南斜面略図 (1/200)

(7ST190)、また13号墳と14号墳の間の尾根上に構築された石蓋土墳墓 (7ST135)、赤色顔料埋納遺構 (7SK145) 等が存在する。その他にこれらの遺構と重複するように近世墓が数基確認されている。

南東尾根 (Fig. 3)

14号墳を起点に南東方面に延びるこの尾根は先端部を造成により失っているが、2基の古墳が確認された。15号墳は尾根の先端部に構築され、やはり大半を造成により失っている。16号墳は15号墳の土層観察時に盛土の一部のみが確認された古墳で、15号墳を切る形で構築されている。また14号墳と15号墳との間の尾根線上の付帯施設は、土器棺墓3基 (7ST042・165・255)、木棺墓 (7ST245)、木蓋土墳墓 (7ST210)、箱式石棺墓3基 (7ST225・260・285)、石蓋土墳墓 (7ST275) 等が存在する。

墳丘下層施設 (Fig. 4)

15号墳の墳丘を除去した後、検出した遺構群である。箱式石棺墓 (7ST360)、石蓋土墳墓2基 (7ST365・370) その他に造成により破壊された墳墓の痕跡 (7SK380) 等を検出した。

丘陵南斜面 (Fig. 5)

北東尾根と南東尾根の間に広がるなだらかな南側斜面を平安時代に墓域として段造成しており、平安時代の遺構は主に北東尾根直下の段造成地に集中する。それら (7ST265・270・295・

300・305・310・340) は主軸をほぼ同方向に向けて展開する。また、この造成地には墳墓域と重複するように同時期の掘立柱建物(7ST290・355)も存在する。その他、この造成地よりさらに低い位置に展開する墳墓(7ST315・330)、また北東尾根の斜面に展開する墳墓(7ST150・345)と大きく三個所に分けられる。古墳時代の遺構は存在しない。

近世墓、その他について

北東尾根と南東尾根の間に広がる南側斜面の中位で谷の最奥部分に構築されたものが大半を占めるが、各尾根線上にも若干ながら分布する。これら近世墓は合計24基検出した。プランはほとんどが円形か方形である。その中で4基を完掘した。段造成のうち最上段は平安時代に遡るものと判断されるが2段目以下については掘立柱建物の柱穴の一部を切ることで、段の落ち際に平安期遺構が存在しないことなどから、近世墓造営段階に近い頃、あるいはそれ以降に造成された可能性が強い、また最上段についても第7-1次の所見をみると東側では古い遺物が出土せず、2段目以下を造成する折りに拡張されたものであることを考えておく必要がある。

(2) 古墳

13号墳

①遺構 (Fig. 6 Pla. 6)

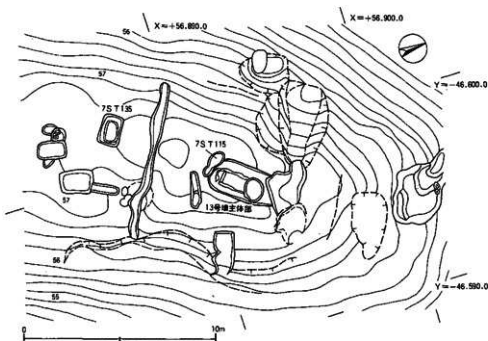


Fig. 6 13号墳及び周辺地形測量図 (1/200)

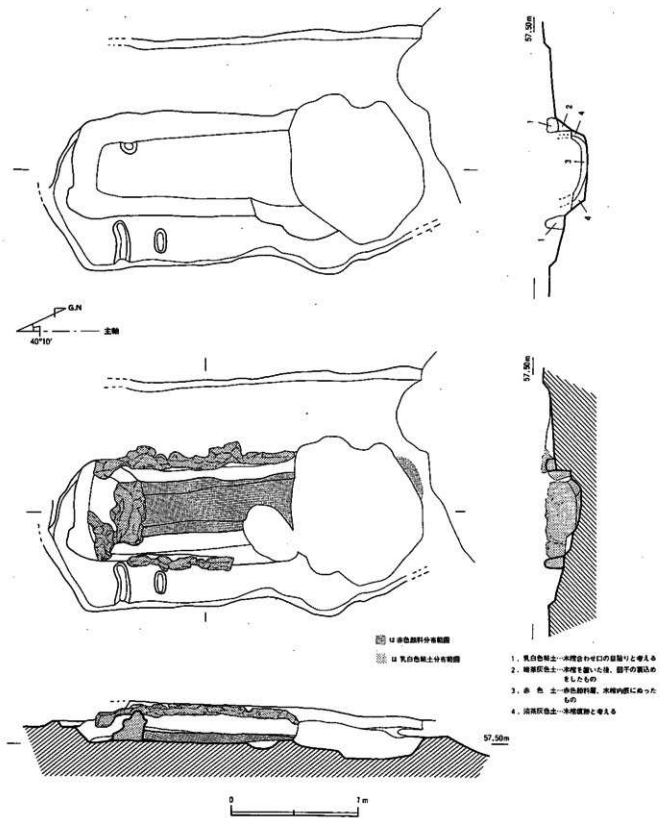


Fig. 7 13号墳主体部実測図 (1/30)

墳丘を地山成形によって削り出し、周溝も確認できていないため墳形および規模に不明な点が多いが、主体部中心から地山成形時の段までを軸として復原するとおおよそ東西14m、墳丘高2.3mの方墳と考えられる。土層観察から墳丘には盛土が確認できず、地山検出面で主体部掘り方を確認している。主体部は上面がかなり削平を受けた状態で検出された。そのため、本来墳丘に盛土が存在しており、墳丘の盛土を切り込んで主体部が構築されていたものなのか、もともと墳丘に盛土が存在していなかったものなのかは不明である。なお、墳丘上の堆積土は上から表土、淡茶色土、明黄茶色土（裾部のみの堆積）である。

遺物は明黄茶色土中より砥石を2点検出した。また13号墳と14号墳の間の尾根部分の表土中から石製打具と打具と共通の石材の製品の剥片が2点出土している。これらの遺物は古墳築造に伴いこの場所で使用された後に廃棄された可能性が考えられる。

内部主体 (Fig. 7~8 Pla. 6)

埋葬主体は割竹形木棺の直葬で小口部分と棺の合わせ目を粘土で目張りしている。粘土は小口部分では非常に厚く使用されており、また、棺の蓋と棺本体を目張りする粘土（棺の側面の粘土）は、小口部分より10cm程度外側に張り出していることから木棺自体の形状が「H」形を呈



Fig. 8 13号墳主体部埋土状況

していたことが推測できる⁹⁾。さらに、小口部分の粘土と側面の粘土との間には約10mmの隙間があり、これが木棺の棺材の厚さを示すものと考えられる。側面の粘土の内側は平坦で、棺の外面形状の一部を残すとみられ、両側面の粘土の内法約70から棺材の厚さを引いた50mmが木棺の内面幅にあたる。

墓壇は主軸をG.N-40°10'-Eにとり、2段掘りされる。墓壇の北側を過去の造成で、また南側を土器棺墓7ST115により削平を受けているが、上段墓壇は現存長3.1m、幅約1.8m、深さは現状で0.15mを測る。墓壇の南西側のテラス部分には幅約10の溝状の掘込みが小口に並行して2条確認できる⁹⁾。下段墓壇は東側大半を風倒木による攪乱で削平を受けているが、残存する長さは約1.7m、幅約0.7mを測り、上段墓壇の中軸よりやや南側に寄せて掘削されている。

棺内にはほぼ全面に赤色顔料が塗布されている。主体部内から遺物は出土していない。

②出土遺物 (Fig. 9 Pla. 55)

淡茶色土出土遺物

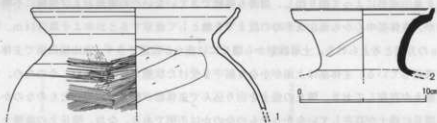


Fig.9 13号墳及び周辺出土土器実測図(1/3)

土師器

壺(1) 口径16.6cm。「く」字状の頸部から口縁端部でわずかに内湾する。口縁部内外面はヨコナデを施す。また頸部内外面には屈曲部形成のためのヨコナデを施し、内面の頸部屈曲は外面に比べ緩やかに外反する。体部は肩部で横方向のハケ目を、その下方からは不定方向のハケ目を施す。また肩部の横方向のハケ目の上から一条の沈線を有する。体部内面は右上がり方向のヘラケズリを行う。色調は外面が口縁端部の一部に淡橙色の部分があるが、全体に淡黄色である。また内面は茶褐色である。胎土は径0.1mm程度の黒色粒子及び径0.5mm程度の小石をわずかに含む。焼成は良好である。

明黄茶色土出土遺物

須恵器

壺(2) 口径11.2cm。頸部から緩やかに外反し端部で上方へ折り返す。口縁部内外面はヨコナデ調整で、端部には屈曲部形成のヨコナデを施す。

色調は内外面とも淡灰色である。胎土は径0.1mm程度の白色粒子及び金雲母を極わずかに含む、精製された胎土である。焼成は良好で還元度も良好である。古墳には直接関係しない遺物である。

14号墳

①遺構 (Fig.13 Pla.7・8)

墳丘、周溝

墳丘を地山成形によって削り出し、主体部中心と周溝の心が南北約6m、東西約5mであることから、長軸約12m、短軸約10mとみられ、周溝底からの墳丘高約1.5mの長方形墳と考えられる。周溝は東側と北側で確認され、幅は約1.5m、深さは現状で約0.5mを測る。土層観察から墳丘

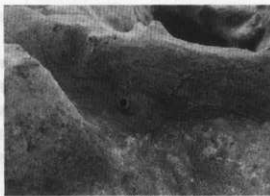


Fig.10 14号墳遺物出土状況

には盛土が確認できず、地山検出面で主体部掘り方を確認している。そのため墳丘の盛土の有無

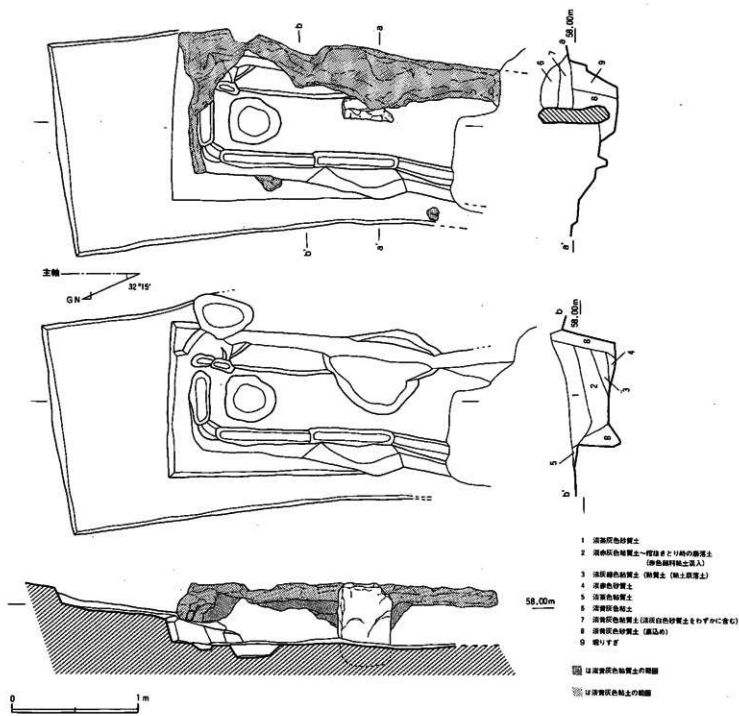


Fig. 11 14号墳第1主体部表面図(1/30)

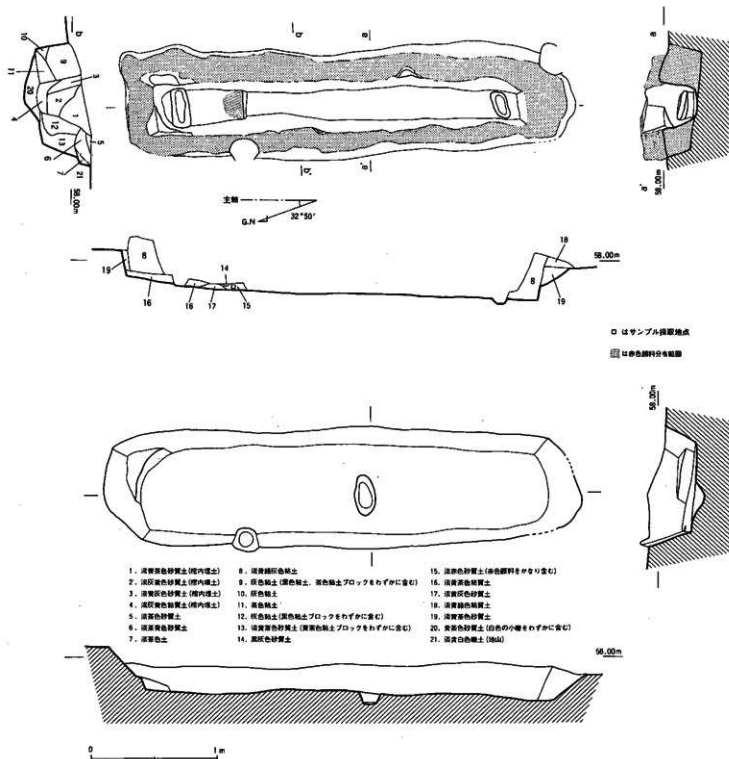


Fig. 12 14号墳第2主体部実測図(1/30)

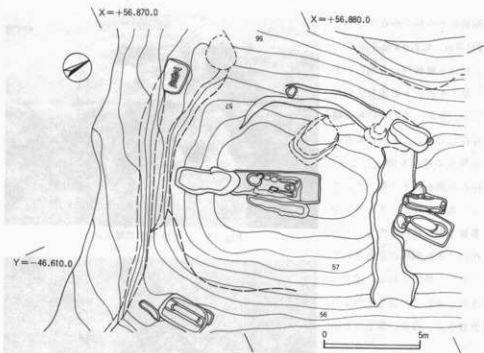


Fig. 13 14号墳及び周辺地形測量図 (1/200)

については不明である。主体部は上面が削平を受けている、なお、墳丘上の堆積土は上から表土、淡茶色土、淡黄色土（墳丘の西側裾部にのみ存在する堆積）である。

遺物は墳丘西側裾部堆積土中より土師器壺、高坏、器台が転落した状況で出土した。これらは一ヶ所にかたまってお土してあり、古墳に伴う供献土器と考えられる。

内部主体 (Fig.11・12)

埋葬主体は箱式石棺と組み合わせ式木棺で、まず、墳丘中央に箱式石棺（第1主体）が構築され、その後廻り方を一部重複するような形で第1主体に平行して組み合わせ式木棺（第2主体）が構築される。第1主体は後世の抜き取り（7SK375）が確認でき、石棺材は側石が1点残存するのみである。墓壇は2段掘りされ、上段墓壇の残存する長さ約4.2m、幅約1.6m、深さ0.2m、下段墓壇は主軸をG.N.-32°15'-Eにとり、残存する長さ約2.5m、幅約1.2m、深さ約0.5mを測る。



Fig. 14 14号墳第2主体断ち割り状況

石棺痕跡から棺の残存する長さは約1.9m、幅約0.4mを測る。

石棺は土層観察から側石の下半に粘土が混入する淡黄灰色砂質土が、さらにその上に粘土層が存在している。これは淡黄灰色砂質土で棺材を固定した後、石棺の全面を粘土で覆っていたものと考えられる。また埋土中に多量の赤色顔料を含むことから棺内に赤色顔料が塗布されていたものと推定される。遺物は抜き取り部および崩落土中より須恵器壺片、複合口縁壺片が出土した。

第2主体は墓墳の主軸をN-32° 50'-Eにとり、長さ約2.8m、幅約4.5m、深さは現状で0.4mを測る。また棺底の兩小口部分に溝状遺構を検出した。その規模は長さ約0.2m、幅約0.1m、深さ約0.1mである。木棺は埋置後、粘土と粘土混入土により固定されたものと考えられる。棺の東側にはテラス状に粘土が張り付けられた部分を確認され、この上部より鉄製刀子が1点出土した。遺物の出土状況から頭位は東向きと推測される。また木棺断ち割り後、墓墳中央に溝状遺構を1条検出した。

7SK375 (Fig. 17)

①遺構

14号墳主体部の抜き取り遺構で、主軸をG.N.-52° 30'-Eにとる。平面形状は隅



Fig. 15 14号墳主体部埋土状況



Fig. 16 14号墳遺物出土状況

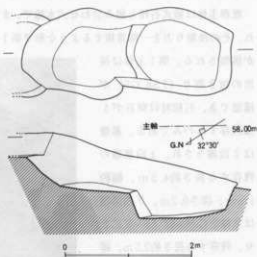


Fig. 17 7SK375実測図 (1/60)

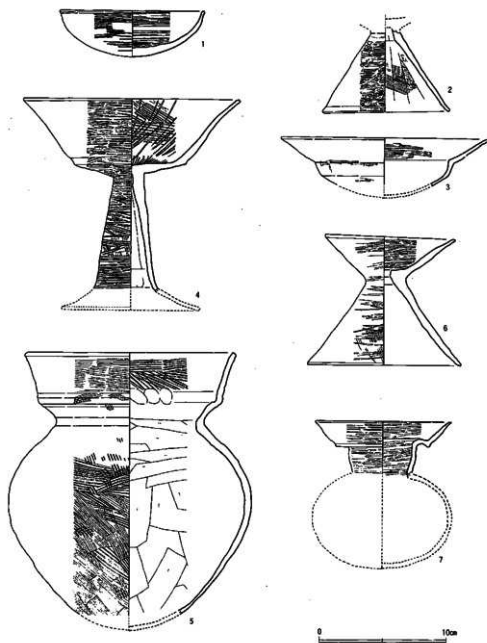


Fig.18 14号墳及び周辺出土土器実測図 (1/3)

丸長方形を呈す。遺構の規模は長軸約3.3m、最大幅約0.9m、検出面からの深さ0.9mである。抜き取りの時期については不明であるが、埋土中より須恵器坏の小片を検出している。

②出土遺物 (Fig. 18 Pla. 55・56)

表土出土遺物

土師器

碗(1) 口径11.5cm、器高3.65cm。丸めの底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部でわずかに反する。調整は内外面とも全面に手持ちによる横方向のヘラミガキを丁寧に施す。色調は赤褐色で所々に赤色顔料の塗布が認められる。胎土は2mm以下の砂粒を微量含み、きめ細かい精製土を使用している。焼成は硬質に仕上げられている。

淡茶色土出土遺物

土師器

器台(2) 底径10.2cm残存器高6.7cm。坏部は欠損する。外方に直線的に大きく開く脚部をもつ器台で脚部先端は外方にわずかに屈曲する。また脚部内面から坏部に径0.8cmの穿孔が存在する。脚部先端は外方にわずかに屈曲する。調整は外面は下方に工具によるケズリ痕が残るが、全体に横方向のヘラミガキを非常に密に施す。脚部内面はシボリ痕跡の上からハケ目調整を行う。

色調は内外面とも赤褐色を呈すが、両面ともに一部赤色顔料の塗布痕跡が残存する。胎土は径2mm以下の砂粒を極少量含み、精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上がる。

鉢(3) 口径16.4cm、残存器高3.8cm。浅く広い半楕円形の体部から大きく外方に屈曲し直線的にのびる口縁部を有す。また体部と口縁部の境は内外面とも明確である。調整は口縁部の外面は風化のため明瞭ではないが、内面は横方向の粗いヘラミガキを行う。また体部外面はハケ目調整後横方向の粗いヘラミガキを行い、体部内面はヨコナデを施す。色調は内外面とも明褐色を呈す。胎土は径2mm以下の砂粒を少量含み、精製された土を使用している。焼成は良好で若干硬質に仕上がる。

淡黄色土出土遺物

土師器

高坏(4) 口径17.2cm、坏部器高6.2cm、脚部現存器高8.9cm。坏の底部は小さく、若干外反しながら大きく開く体部を有す。坏部は深くつくられ、内底部はほぼ水平であり、底部から体部への移行は外面は屈曲が明確であるが、内面は坏部と坏底部の接合部はヨコナデを行い屈曲部は若干鈍い。脚部は円柱状を呈し、内面に絞り痕が残るが内底部のみナデ消している。調整は坏部外面には横方向のヘラミガキをかなり密に行い、坏部の内面は右下がり方向のハケ目調整後、暗文風のヘラミガキを見込み部分に放射状に行った後、坏内面には斜方向に大きく5分割に暗文風ヘラミガキを施す。また脚部は縦方向のハケ目調整後、横方向のヘラミガキを坏部に比べ若干粗めに行う。外面のヘラミガキは有軸回転台を使用したと考えられる。色調は内外面とも赤褐色を呈す。胎土は径1mm程度の小石と透明粒子をわずかに含む、きめ細かい精製土を使用している。焼成は良好である。

壺(5) 口径16.6cm、現存器高20.8cm、胴部最大径19.0cm。複合口縁を有する壺で、頸部の

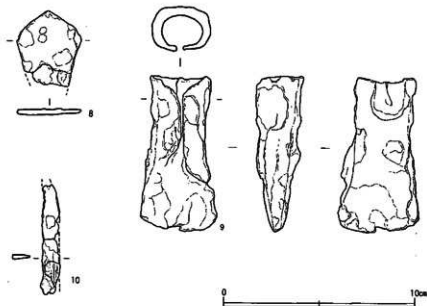


Fig.19 14号墳及び周辺出土鉄器実測図(1/2)

屈曲は外傾し、口縁部は受部から直立気味に緩やか外反する。胴部は最大径を有する部分が胴部中位より若干上方にくる。調整は口縁部外面は横方向のハケ目調整で、口縁部内面は右下がり方向のハケ目後、横方向のハケ目を施す。また口縁部複合部内面は口縁部接合もしくは口縁部屈曲のための指圧痕を残す、その後、ヨコナデ調整によりなで消す。胴部調整は外面上位は横方向のハケ目調整後、縦方向のハケ目を施すが、頸部から肩部は調整をなで消している。胴部外面下半は右下がり方向のハケ目を施す。胴部内面は縦方向のヘラケズリを行い、内面肩部は縦方向のヘラケズリ後、横方向のヘラケズリを施す。色調は内外面とも淡黄色を呈す。胎土は径1mm程度の小石、金雲母、透明粒子をわずかに含む。焼成は良好である。

器台(6) 口径10.4cm、器高10.2cm、脚部最大径12.2cm。頸部は小さく、直線的に開く体部を有す。脚部は頸部から大きく直線的に開く。また坏部内面中央から脚部内面に径0.7cmの穿孔を有す。調整は坏部は内外面とも横方向のヘラミガキを密に行う。脚部は外面下半にハケ目調整後、ヨコナデを行い全体に密にヘラミガキを行う。脚部内面はヨコナデ調整である。また全体にヘラミガキが丁寧な施されているため器面に光沢をもつ。色調は外面は淡橙色で内面は淡黄色を呈し外面裾部に一部、赤色顔料の付着が認められる。胎土は径1mm程度の小石と透明粒子をわずかに含む、きめ細かい精製土を使用している。焼成は良好である。

鉄製品 (Fig.19)

鐵(8) 残存全長4.0cm、幅3.35cm。表土より検出した。平造りの鉄鏃で幅広のものある。

斧(9) 全長8.2cm、刃部幅4.2cm、袋部分幅3.1cm。淡茶色土より検出した。短冊形の鍛造鉄斧である。袋部分には木質等は残存していなかった。

第二主体部出土遺物 (Fig. 18 Pla. 55・56)

土師器

壺(7) 口径10.8cm、残存器高4.5cm。複合口縁を有する壺である。頸部は直線的に立ち上がり、口縁の受部で大きく外方に折れ曲がる。さらに、折れ曲がった受部の先端部の上部に口縁部を接合し、その後受部の口縁接合部の下方に三角突帯を貼り付けたと考えられる。内面は口縁受部から頸部にかけて緩やかに折れ曲がる。調整は内外面とも最終調整は横方向のヘラミガキを密に施すが、外面口縁受部は三角突帯貼り付けのためのヨコナデ調整を行った後、ヘラミガキを施す、また口縁部外面は縦方向のハケ目調整を行った後、ヘラミガキを施す。

色調は内外面とも淡橙色を呈す。胎土は径1mm程度の透明粒子をわずかに含む非常に精製された土を使用している。焼成は良好である。淡灰色砂土からの出土である。

鉄製品 (Fig. 19)

刀子(10) 残存全長5.75cm、最大幅0.9cm。第一主体部より検出した。小型の刀子で切先部分と握り部分の一部を欠く。握り部分には木質が残存する。

15号墳 (Fig. 20 Pla. 9・10)

①遺構

墳丘

墳丘の半分は過去の造成で消滅している。現存する長さは東西で約9.5m、南北で約4.5m、高さ約1.1mを測る。埋葬主体は残存していない。墳丘は盛土と地山削り出しによって構築されているが、土層観察の結果、墳丘北側部分だけ一旦墳丘頂部近くまで盛土を行い、その後中央付近を土質の異なる客土を約10mm単位で版築状に積み上げている。これらの盛土はかなり叩きしめた状況が看守でき、その中には粘土ブロックを含む客土も使用されている。また、地山削り出しは北側部分で顕著にみられる。この盛土は獣帯鏡を出土した12号墳の積み方と同じ工法を採用しているとも考えられるが、南北方向および東側部分において同様

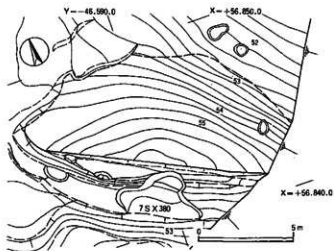


Fig. 20 15号墳及び周辺地形測量図(1/200)

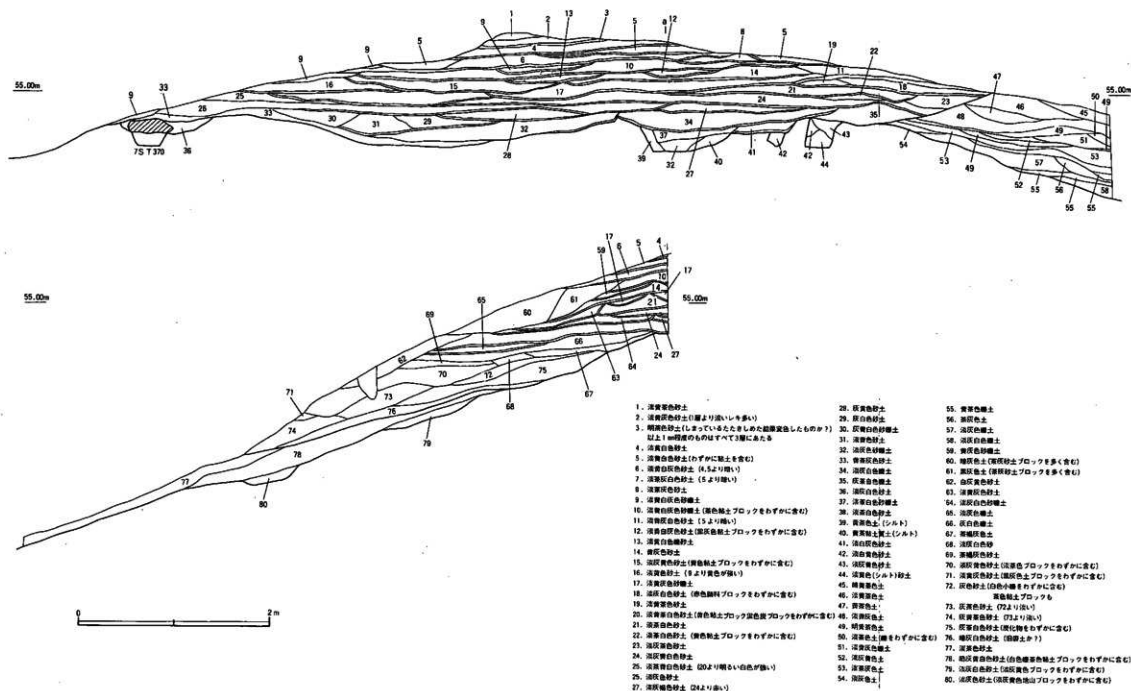


Fig. 21 15・16号墳土層観察図(1/40)

な工法が確認できなかつたことから一連の盛土とは考え難い。南北方向の土層観察の結果、盛土が地山成形時に残された段よりも外側（北側）にまで行われており、16号墳構築時の地山成形の段を15号墳構築時に盛土で一旦水平面を形成し、これを基準に客土を積み上げて墳丘を構築したと考えられる。さらに、墳丘下層において箱式石棺墓などの墳墓群が検出された。これらの墳墓群の在り方が他の古墳の裾部につくられる墳墓群に類似することと、盛土の不整合面が墳丘北側部分のみにしか確認できず、中央部とは全体的に土質の異なる客土を使用していることなどからこの15号墳は別の古墳（16号墳）の上にさらに盛土を行って構築された円墳と考えられる。遺物は出土していない。

16号墳

①遺構

墳丘

15号墳墳丘東側部分の黄茶色土層を基調とする盛土をいう。墳丘の大半を過去の造成で消滅しているため、墳形、規模とも不明な点が多く、盛土と地山削り出しによって築かれた墳丘を有していたことだけは確認できた。遺物は出土していない。

(3) 墳丘下層施設

7ST360 (Fig.22 Pla.11・12)

①遺構

棺の主軸は北東向きG.N-55° 50′-Eにとり、15号墳の墳丘を除去後に、その下層から検出された箱式石棺墓で尾根の等高線に直交する形で構築される。

墓壙は近年の造成により15号墳とともに南側の大半を切り落とされているが、15号墳がその上に構築されたため、二段掘りの上段が他の墳墓のように後世に削平（15号墳構築時に削平された可能性は有り得る）を受けた可能性がなく、断面形状は、ほぼ完全な形で検出することができた。

上段墓壙の平面形状は、残存する部分で判断すると、おそらく隅丸長方形を呈していたであろう。その規模は、長さ1.2m、幅1.1mである。墓壙内埋土は淡灰白色砂土で、この層を除去すると、明黄茶色の厚い粘土層が棺の蓋石全体を覆うように存在する。

蓋石は二枚が現存し、その蓋石を取り除くと、蓋石と側石との隙間も丁寧に粘土で目張りが施されていた。棺内の形状は長方形を呈するものと思われる。遺存する棺の大きさは、長さ0.9m、幅0.7mであり、上段墓壙検出面から棺底までの深さ0.7m、棺内の深さは、0.35mを測る側石は西側に二枚、東側に一枚が遺存しており、北側小口部分は一枚の石で作られており、これを両側石が挟む構造である。また、これらの石の隙間も粘土により目張りが施されていた。そのため棺内は現在まで空間を保っており、微量の粘土の流れ込みがあるにすぎなかった。棺

内の薄い粘土層を取り除くと北側小口部分から楕円形で粘土製の枕が、そして棺底には厚く赤色顔料が敷かれ棺床が形成されていた。枕の規模は、長さ0.3m、幅0.1m、高さ0.1mである。

墓墳、棺内堆積土を除去する過程で遺物の出土はなかった。また頭位は、北側小口に粘土で造られた枕が存在するため、北側と判断した。

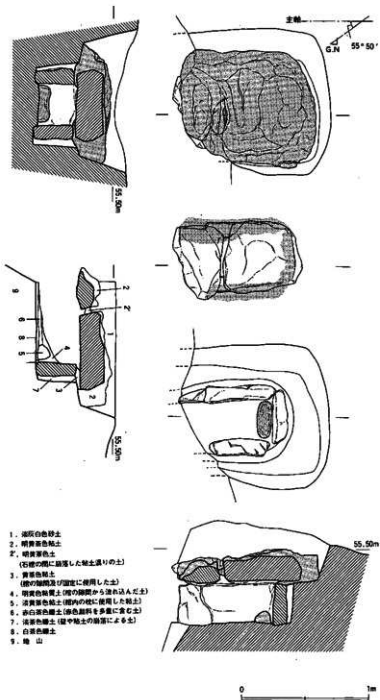
7ST365

(Fig. 23 Pla. 13)

①遺構

棺の主軸は北西向きG.N-1°40'-Eにとる。15号墳の墳丘除去後に、その下層より検出された石蓋土墳墓で尾根の等高線と並行する形で構築されている。

墓墳は二段に形成されているが、墳丘を除去した時点で蓋石はすでに露出して



1. 深灰色砂土
2. 暗褐色粘土
3. 暗褐色粘土
(石棺の側に脱落した粘土製の土)
4. 黄褐色粘土
(石棺の隙間及び頭位に使用した土)
5. 暗褐色粘質土 (棺の隙間から流れ込 A. 土)
6. 深褐色粘土 (棺内の枕に使用した粘土)
7. 赤白褐色粘土 (赤色顔料を多量に含む土)
8. 淡褐色粘土 (棺や粘土の崩壊による土)
9. 黄土

Fig.22 7ST360 実測図 (1/30)

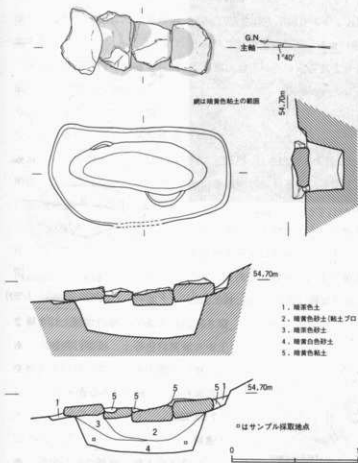


Fig.23 7ST365実測図(1/30)



Fig.24 7ST365石棺粘土目張り状況

おり、墓壇平面プランより先に蓋石を検出した。また墳墓(蓋石上)に盛土などは存在しなかった。上段墓壇の形状は隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ1.4m、幅0.75mで、墓壇内埋土は暗褐色土の薄い単一層である。

棺の蓋石は4枚の石を使用しており、北西側ほど大きい。また蓋石には、蓋石と蓋石の隙間を中心に、さらに蓋石裏側の地面との接触面へも薄く粘土が貼られていた。蓋石を除去すると蓋石裏側には

赤色顔料が塗布されていた。棺の形状は先の尖った楕円形を呈し、その規模は、長さ1.1m、幅0.4m、検出面からの深さ0.3mであった。棺内の堆積土を除去する過程で赤色顔料や遺物の出土はなかった。

また、墓壇は二段に形成されているが、上段墓壇の断面形状は浅く、墳丘除去の段階で蓋石を墓壇平面プランより先に検出した。

旧表土が15号墳下層に確認できないことから15号墳構築時の削平と考えられるが、同じ墳丘下層より検出された7ST360・370など上段墓断面形状の違いから、単に削平されただけでは一概には言い難く、当初より上段墓が浅い形状の墳墓が存在していたことを示唆する可能性がある。

7ST370 (Fig. 25 Pla. 14)

①遺構

15号墳の墳丘除去後に、その下層より検出され、尾根線に直交するように構築された石蓋土墳墓である。棺の主軸を、北東向きG.N-50° 5'-Wにとる。

棺は近年の造成により15号墳とともに南側を切り落とされており、蓋石が一つ残るのみであった。墓壙は検出段階ですでに蓋石が露出しており、墓壙も本来二段掘りであったものなのか不明である。遺存する棺の規模は長さ0.3m、幅0.5m、

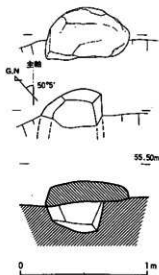


Fig.25 7ST370 実測図 (1/30)

深さ0.25mである。棺内堆積土は2層で上から淡黄白色砂土、淡茶白色砂土である。棺内の塵土を除去する過程で遺物や赤色顔料などは検出できなかった。

7SX380

①遺構

15号墳墳丘下層に構築された墳墓であるが、近年の造成により15号墳の南側とともに完全に破壊され、遺構としては残存しないが付近に棺の石材に使用したと思われる数個の石が散乱することから、この場所に石蓋土墳墓、あるいは箱式石棺墓が構築されていたことが推測できる。

(4) 土器墳墓

7ST115 (Fig. 26 Pla. 15)

①遺構

棺の主軸を北西向きG.N-2°-Eにとり、13号墳墳丘上で13号墳主体部北側を切る

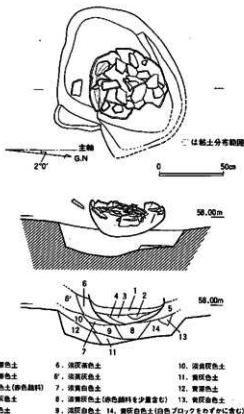


Fig. 26 7ST115実測図 (1/30)

- | | | |
|---------------|-------------------------|-----------|
| 1. 淡黄褐色土 | 6. 淡黄褐色土 | 10. 淡黄褐色土 |
| 2. 淡黄褐色土 | 7. 淡黄褐色土 | 11. 黄褐色土 |
| 3. 赤褐色土(赤色顔料) | 8. 淡黄褐色土(赤色顔料を少量含む) | 12. 黄褐色土 |
| 4. 淡黄褐色土 | 9. 淡黄褐色土 | 13. 黄褐色土 |
| 5. 淡黄褐色土 | 14. 黄褐色土(白色ブロックをわずかに含む) | |

形で検出された、複合口縁壺を棺本体として使用した土器棺墓である。

墓壇は調査段階で、すでに造成により全体的に削平されており、表土を取り除いた段階ですでに棺が露出し、棺本体も破壊されていたため形状については明確でない部分も多い。検出した墓壇の掘り方は楕円形を呈し、その規模は直



Fig.27 7ST115棺内粘土検出状況

径1.0mで、墓壇検出面からの深さ0.2mでその中心に棺を埋置する。棺の埋置角度についても棺自体の削平部分が多いため不明である。また棺内の堆積土を除去する過程で赤色顔料と少量の粘土を検出した。その他、墓壇内の埋土を除去する過程で遺物は検出できなかった。

②出土遺物 (Fig. 28 Pla. 56)

土師器

壺 (1) 口径24.

5cm、器高76.2cm、

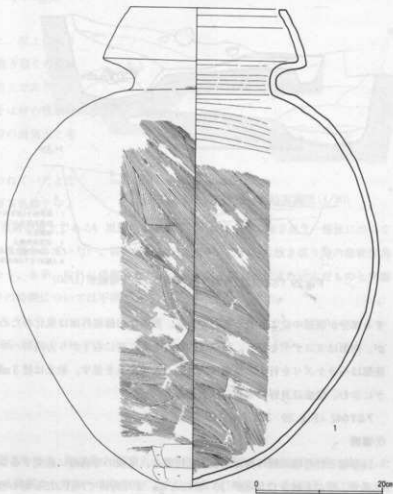


Fig.28 7ST115実測図 (1/6)

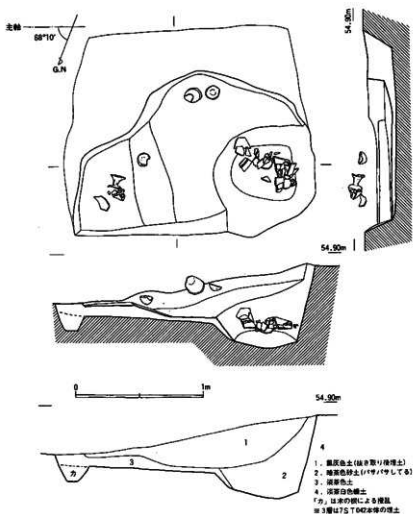


Fig.29 7ST042抜き取り部実測図及び土層観察(1/30)

胴部最大径59.5cm。複合口縁を有する壺で、短く直立気味の頸部から大きく外反する。口縁部は二重口縁受部から若干内傾しながら直線的に立ち上がる。大きく張った体部に尖り気味の底部を有す。胴部は最大径を有

する部分が胴部中位より若干上方である。調整は口縁部外面は風化のため調整が不明瞭であるが、内面はヨコナダを行う。胴部は内外面ともに密に右下がり方向のハケ目調整を行う。外面底部はヘラケズリを行う。色調は内外面とも赤褐色を呈す。胎土は径3mm程度の白色砂粒を若干に含む。焼成は良好で硬質に仕上がる。

7ST042 (Fig. 29・30 Pla.16)

①遺構

14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された土器棺墓で、棺の主軸をG.N-68°10'-Eにとる。また南側で7ST275を切る形で検出した。

墓壕の形状は二段掘りで、平面形状が上段墓壕は隅丸方形を呈す。上段墓壕の規模は長軸2.0m、幅1.6mで、深さは下段墓壕検出面までは0.3m程度であり、おそらくその大半は削平され

たことが窺える。下段墓墳の規模は、長径0.8mの楕円形を呈し、深さは、下段墓墳検出面から0.3m、最も遺存状態のよい南側で、上段墓墳検出面から0.7mを測る。

また墓墳平面プラン確認時に墓墳の中央西側寄りに抜き取りの痕跡を確認した。抜き取りは下段墓墳底部にまで達しており、棺本体は下棺に使用したと考えられる甕の一部の破片を残して抜き取られている。

土層観察によると、埋土は大きく2層に分けられ、抜き取りの痕跡を示す土層は黒灰色土であり、その下層の暗茶色砂土は棺の埋納時の土か、抜き取り時の崩落土と考えられる。

遺物は下棺に使われていたと思われる甕の破片を暗茶色砂土中より、また、抜き取り痕跡の埋土である。黒灰色土中より、小型坏2点、鉢2点（一體については内部に赤色顔料が埋納されていた）、脚付碗を検出したが、これらは抜き取り時の祭祀行為に伴う供献品ではなく、本来、棺外に供献されていた品が抜き取り後に流れ込んだものと判断した。また抜き取りの時期については不明である。

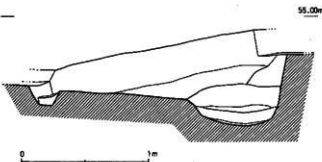
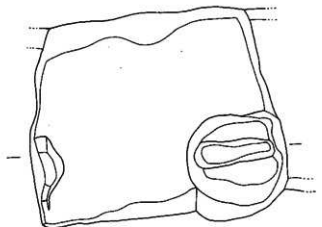


Fig.30 7ST042完掘時実測図(1/30)

②出土遺物

(Fig.33・40 Pla.56・57)

黒灰色土出土遺物

土師器

鉢

(1, 2)

1は口径12.4cm、器高9.55cm、胴部最大径10.7cm。赤色顔料を内部に埋納した状態で検出した鉢である。丸みのある体部から肩部へは直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外方に開き、端部は丸くおさめる。また体部中位に径5mmの穿孔が存在する。

調整は口縁部内外面はヨコナデを行うが、体部外面は手持ちのヘラ削りの後、粗い不定方向のヘラミガキを体部上位に施す。色調は、内外面とも淡黄橙色を呈す。胎土は径3mm程度の白砂粒と微細な金雲母を若干多く含む。焼成は若干軟質ながら良好である。

2は口径15.4cm、残存器高11.0cm、胴部最大径14.5cm。器形は1と類似する鉢であるが底部を大きく打ち割っている。また内面には赤色顔料が多量に付着する。

調整は口縁部は指押さえにより形成され、その後ヨコナデを行う。体部外面は肩部は縦方向の工具ナデを行い、中位では横方向の工具ナデ、底部は不定方向の工具ナデを施す。また内面も工具によるナデ調整を行う。

色調は内外面とも淡黄灰色である。胎土は径1mm以下の白色砂粒を多量に含む粗い土を使用している。焼成は若干軟質である。

脚付き椀(3) 口径12.3cm、器高17.65cm、底径13.35cm、胴部最大径16.05cm。胴部最大径が若干下方に位置し、そこから緩やかに内湾する全体に丸みをおびた椀部分にラッパ状に大きく開く脚部を有す。脚部は全体に整った形態を呈しているが、椀部分は左右不均等で全体に歪みがある。

調整は椀部分の外面はヘラケズリの後、不定方向の粗く幅広いヘラミガキを施す。内面は指押さえで器形を形成した後、ヘラケズリを行い、粗い工具ナデを行う。脚部調整は外面に手持ちヘラケズリの後、ハケ目調整を行い、最後に縦方向の粗く幅広いヘラミガキを施す。脚部内面は上位には絞り痕跡が残るが、底部はハケ目調整を行う。色調は内外面とも黄灰色を呈す。胎土は径3mm前後の白色砂粒と微細な金雲母を多く含む粗めの土を使用している。焼成は良好である。



Fig. 31 7ST042遺物出土状況



Fig. 32 7ST042遺物出土状況

鉢(4、5) 4は口径11.1cm、器高5.55cm。丸みをおびた半球状の体部に若干尖り気味の底部を有す。口縁部は指押さえ調整により形成され、端部は丸くおさめる。また口縁部の一部を注ぎ口風につくる箇所がある。

調整は外面は不定方向のナデを行い、底部に若干指圧痕が残る。内面は工具ナデを行い器面を調整し、それによる工具のあたりの痕跡が内面中位に残存するが、最終調整には不定方向のナデにより仕上げられる。色調は内外面ともに淡黄褐色を呈す。胎土は径1mm程度の白色砂粒を多量に含む土を使用している。焼成は若干軟質に仕上がる。

5は器形は4に類似するが、外面体部下位に指押さえ

調整を行うことで底部と体部が明瞭にわけられ、平底を意識したつくりになっている。また調整は内面はかなり風化しているがハケ目調整の痕跡が窺える。また外面は体部下位は指押さえを行うが、上部はハケ目を施す。色調は内外面ともに淡黄灰色を呈す。胎土は径1mm前後の砂粒を多く含む土を使用している。焼成は軟質に仕上がる。

甕(6) 口径46.3cm、器高72.8cm。胴部最大径49.8mm。口縁部に比べ、胴部最大径が大きい甕である。また頸部と胴部下半に突帯を有す。突帯の形状は鈍い台形状を呈し、若干下方を向く。頸部突帯には、不定間隔の粗い刻み目が施されるが、体部突帯には刻み目は施されない。口縁端部にも粗い不定方向の刻み目が施される。調整は内外面ともにハケ目調整を行い、底部外面にはヘラケズリを行う。色調は内外面ともに淡黄褐色を呈す。胎土は5mm内外の砂粒を多量に含む、やや粗めの胎土で、焼成は良好である。

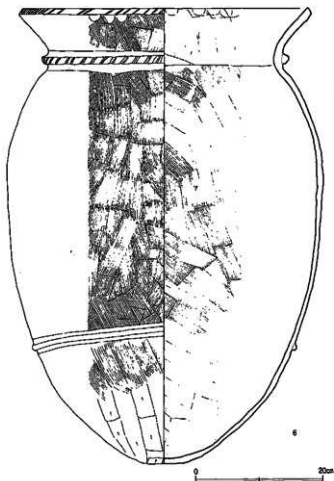


Fig.33 7ST042出土遺物実測図(1/6)

鉄製品

7は、残存する長さは3.5mm程度の鉄製品である。小破片のため用途は不明である。

7ST165

①遺構 (Fig.34 Pla.18・19)

棺の主軸をG.N-88°30'-Wにとり、14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された小型の壘を使用した合口式の土器棺墓である。また墓壘の西側と北側を近世墓により切られる。

墓壘の平面形状は楕円形を呈し、南西側が一段掘り下げられている。墓壘の規模は直径0.9m、深さ0.3mで、墓壘の中心に上棺へ下棺をかぶせる形で棺を埋置する。また棺の埋置角度は約30°である。棺は上棺の大半と、下棺の一部を削平により失っている。

墓壘内の埋土は、棺を取り除くと下棺の底部周辺に白色花崗岩風化石と小礫を棺の底部の接する部分に配置して棺の傾きを調整する為の施設を作り、墓壘底部より約30mm程度高い位置に棺を設置している。そのため掘り下げ部分(土層図11層)は棺を埋置以前に埋め戻されていることとなり、棺を設置する事のみを考えると意味をなさない掘り込みのようにも思われる。また土層観察から、この掘り込み部分に棺を固定するための層(5・6層)が確認された。この掘り

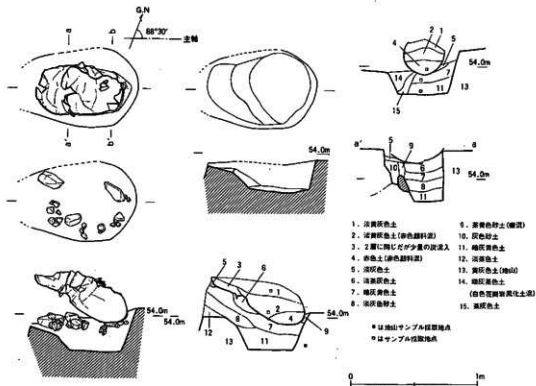


Fig.34 7ST165実測図(1/30)

込みの機能について現状では不明である。

墓壇内から遺物の出土は、一部欠損した鉢が1点あるのみで供獻土器と考えられる。また、下棺内底部には赤色顔料が薄く散布されていた。

②出土遺物

(Fig. 36・40 Pla. 57)

土器

鉢(8) 口径11.2cm、残存器

高5.6cm。丸みをおびた半球状の体部に口縁端部は丸くおさまられる鉢の小破片である。

調整は外面は右下がり方向のヘラケズリを行った後、上位のみヨコナデを行う。内面は指押さえにより形成される。色調は外面は暗茶色で内面は暗灰色である。胎土は径3mm以下の白色砂粒を多量に含む粗めの土を使用している。焼成は若干軟質に仕上がる。

甕(9、10) 棺本体に使用されたもので、9は上棺として使用された。口径33.2mm、器高50.7mm。口縁部最大径が胴部最大径を上回っている。底部は尖り底状を呈す。また頸部と体部中位より若干下方に突帯を貼付する。突帯の形状は鈍い三角形で若干下方を向く。突帯には刻み目は施されないが、口縁部に刻み目を施す。調整は内外面ともにハケ目調整を行う。また体部中位にはタタキの痕跡が残る。

色調は内外面ともに淡茶色であるが、体部内面の一部に赤色顔料の付着がみられる。胎土は3以内の白色砂粒を多量に含む粗めの胎土である。焼成は良好で硬質に仕上がる。

10は口径33.2mm、器高50.7mm。下棺に使用される。口縁端部を全て打ち欠く甕である。体部は突帯から突帯の区間が直線的であるため寸胴的である。体部から口縁部への移行は鈍く、口縁部は若干外傾しながら直線的に立ち上がる。底部は尖り底状を呈す。また頸部と胴部下半に突帯をもつ。突帯の形状は頸部は鈍い三角形で下方を向く。胴部下半の突帯は台形状を呈している。突帯の刻み目は不定間隔の右下がり方向である。調整は内外面ともにハケ目調整を行うが、体部中位には右下がり方向にタタキ目の痕跡が残る。

色調は内外面ともに淡茶色であるが、内面に赤色顔料の付着がある。胎土は3mm以内の白色砂粒を多量に含む、やや粗めの胎土で、焼成は良好で硬質に仕上がる。

7ST255

①遺構 (Fig. 37 Pla. 20)

14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された土器



Fig. 35 7ST165下層石検出状況

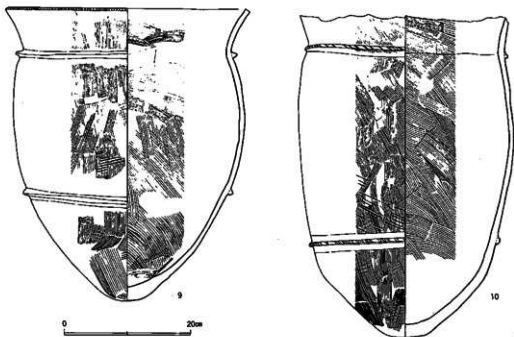


Fig.36 7ST165上棺・下棺実測図(1/6)

棺墓で、棺の主軸をG.N-83° 40'-Eにとる。また上棺の甕の底部と墓塚北側は近世墓により切られている。

墓塚の平面形状は北西側に張り出す隅九方形を呈し、長さは2.0m、幅は西側で1.5m、東側で0.9m、深さは最大で0.7mを測り、その中心に甕を使用した合口式の甕を埋置する。また下棺に比べ上棺にやや大きめの甕を使用し、下棺を上棺に挿入する形で埋置している。棺の埋置角度は、ほぼ水平である。

墓塚内の埋土を除去すると供献土器として棺の東側に長頸壺を、棺の西側で鉢を上棺の下に敷いた状態で検出した。さらに棺の周辺には赤色顔料が散布されていた。また棺内には堆積土が流入しており、赤色顔料を検出した他、遺物や人骨は検出できなかった。

棺の埋置順序を土層観察から推測すると、1.墓塚掘削後、墓塚底部に赤色顔料を散布する。2.下棺を固定し棺の角度を決定するための床を作り下棺を配置。(2.供献土器を置く)。3.上棺を下棺に合わせて、上棺の下に上棺の角度を調整、固定するための土を敷く(この時に棺内に赤色顔料を散布し、被葬者を棺に入れたのか。また上棺の下に敷かれている鉢は検出状況から供献品ではなく棺の埋置角度の調整に使われた可能性が考えられる)。4.供献土器を置く。5.棺を埋める。といった手順が考えられる。

②出土遺物

(Fig. 38~40

Pla. 57-58)

土器

鉢 (11) 口径20.5cm、器高7.65cm、底径6.9cm。平底風に形成された底部から若干内湾気味に立ち上がる体部を有し、口縁端部は丸くおさめる。

外面調整は横方向のヘラケズリの後、右下がり方向にヘラケズリを行う。体部内面調整は横方向のナデにより仕上げ上げる。色調は内外面ともに淡茶色を呈す。胎土は径3mm以下の白色砂粒を多量に含み、微細な金雲母をわずかに含む粗めの土を使用している。焼成は若干軟質に仕上げられる。

長頸壺 (12) 調査中に盗難にあったが、口縁部の小破片と土器の底部を除いた全体のスタンプが残存していたため、スタンプに石膏を流し入れ、その形状を復元した。口径約10.8cm、残存器高19.6cm、胴部最大径16.9cm。丸みをおび

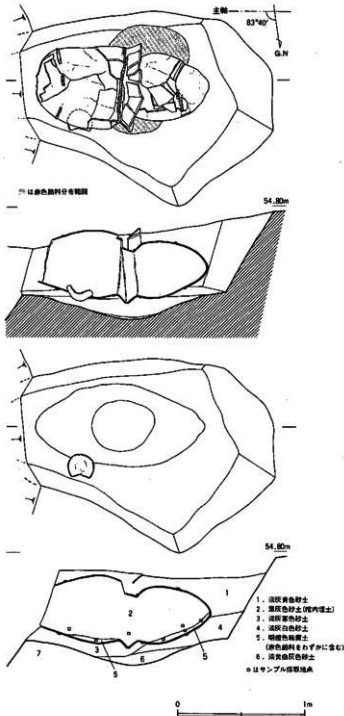


Fig.37 7ST255実測図(1/30)

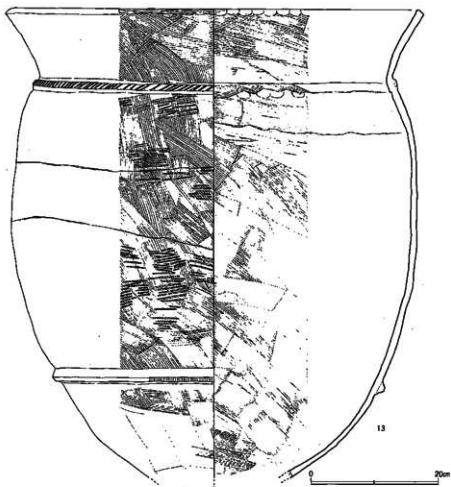


Fig.38 7ST255 上棺実測図(1/6)

た体部から若干太めの頸部が外反気味にのび、口縁端部は丸くおさめる。また体部中位より若干下方に刻み目を有する突帯が一条巡る。

調整は口縁部外面は横ナアを行った後、縦方向の暗文風ヘラミガキを施す。口縁内部調整は右下がり方向のハケ目調整の後、横方向のハケ目調整を行う。色調は内外面とも淡橙色を呈す。胎土は径1mm程度の小石と透明粒子をわずかに含む、非常に精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上げられる。

甕(13.14) 棺本体に使用されたもので、13は上棺として使用された。底部を攪乱により失っている。口径66.2cm、残存器高74.5cm、胴部最大径64.5cm。口縁部径が体部最大径を上回る甕で、底部は尖り底状を呈す。頸部と体部中位より若干下方に幅広の突帯を有する。突帯の形状

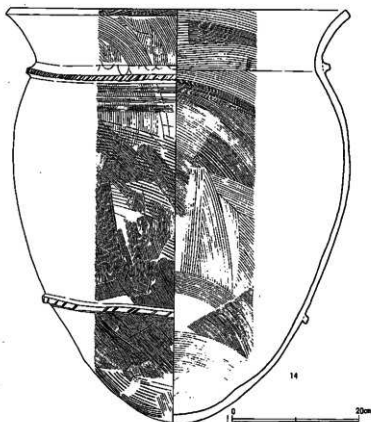


Fig.39 7ST255出土下棺実測図(1/6)

は鈍い台形状を呈し若干下方を向く。頸部の突帯の刻み目は左下がり方向に不定期間隔で粗く施され、体部突帯の刻み目は縦方向であるが場所によっては刻み目を施されない。調整は内外面ともにハケ目調整で、口縁端部外面にも意図的にハケ目調整を行い、外面底部はヘラケズリを行う。また体部にはタタキ目の痕跡が残る。色調は内外面ともに淡黄橙色を呈す。胎土は5mm以内の砂粒を多量に含む粗め

の胎土である。焼成は良好である。

14は口径54.3cm、器高66.1mm、胴部最大径53.1mm。下棺に使用される。胴部最大径に比べ若干口縁部径が上回る寛で、頸部と胴部中位より下方に刻み目突帯をもつ。突帯の形状は鈍い台形状を呈し、若干下方を向く。突帯は、全体に刻み目の間隔が粗い造りで、体部突帯の刻み目は頸部のもと比べさらに粗雑である。調整は内外面ともにハケ目調整を行うが、体部には右下がり方向にタタキ目の痕跡が残り、底部外面にもタタキが施される。

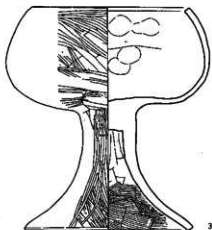
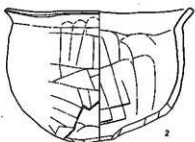
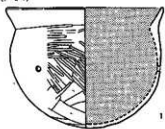
色調は内外面ともに淡茶色を呈す。胎土は4mm以内の砂粒を多量に含む、やや粗めの胎土で、焼成は良好である。

7SX170

①遺構

14号墳と15号墳の間の南東尾根線上で、表土除去時に7ST042に隣接して検出された、口縁部を打ち欠いた土器棺である。検出段階で棺としての形をとどめておらず、墓壇掘り方も確認できなかったため遺構としては扱っていない。復原された一棺体の他に小破片ではあるが、

7S T042(1-5-7)



7S T165 (8)



7S T255 (11-12)

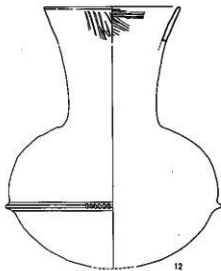
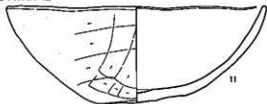


Fig.40 7ST042-165-255 出土遺物実測図 (1/3)

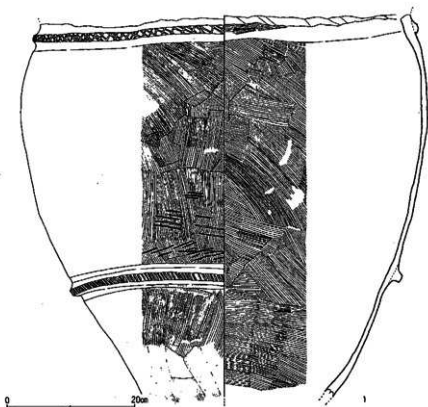


Fig.41 7SX170出土遺物実測図

別個体の口縁部、底部を検出している。

抜き取り後廃棄された、7ST042の上棺の可能性もあるが、7ST042内の遺物との破片の接合関係は見出せなかった。そのためプランを削平された土器棺墓がこの場所にあった可能性も想定している。

②出土遺物 (Fig.41 Pla.58)

土師器

甕 (1) 残存器高64.7mm、胴部最大径61.1mm。頸部下位と体部下方に幅広の突帯を貼付する甕で、頸部突帯から上部の口縁部を全て打ち欠く。底部は欠損している。突帯の形状は鈍い台形状を呈し、頸部の突帯には格子状の刻み目が、体部突帯には右下がり方向に不定間隔の粗い刻み目が施される。調整は内外面ともにハケ目調整を行い、底部はヘラケズリを行う。また体部下方にはタタキの痕跡が残る。

色調は内外面ともに淡黄橙色を呈す。胎土は3mm以内の白色砂を多量に含む、やや粗めの胎土で、焼成は良好である。

(5) 木棺墓

7ST185

①遺構 (Fig.42 Pla.21)

13号墳と14号墳との間の北東尾根上に位置し、尾根の等高線に並行する形で構築された木棺墓で、主軸をG.N-32°50'-Eにとる。墓壇は東側で7ST190を切り、棺西側を7ST140に切られる形で、また14号墳周溝を切る形で検出された。

墓壇の平面形状は不整隅丸長方形を呈し、断面形状から上部の多くを削平されたであろうことが推測できる。その規模は長さ2.5m、幅0.8mで、床面は長さ1.6m、西側小口幅0.4m、東側小口幅0.3mで、墓壇検出面からの深さ0.15mである。棺内の埋土は大きく2層に分かれ、それを取り除くと棺の床面が現われる。また棺床の周囲は一段掘り下げられていた。

棺は、棺床の形状から棺の周囲の掘り下げた部分に板を立て組み合わせる、組み合わせ式の木棺墓と考えられる。棺内堆積土を除去する過程で遺物や赤色顔料は検出できなかった。

②出土遺物 (Fig.46)

土師器

鉢(1) 口径19.9cm、残存器高7.1cm。浅めの半球状の体部から口縁部が、若干干反気味に

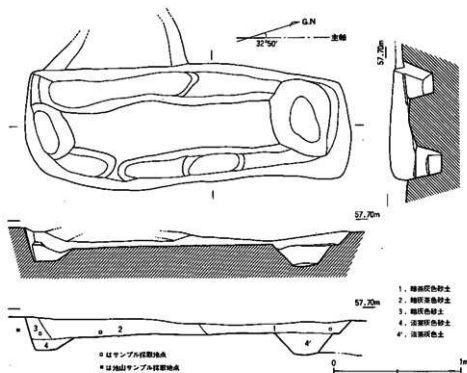


Fig.42 7ST185実測図(1/30)

大きく開き、口縁端部は丸くおさめる。

口縁部調整は外面ではヨコナデ調整を行い、内面は横方向のハケ目調整を行う。体部調整は外面は縦方向のハケ目調整を行い、内面はナデで仕上げる。色調は外面が黄茶灰色で内面は黄茶灰色を呈す。胎土は径2mm以下の白色砂粒をわずかに含む。焼成は若干軟質ながら良好である。

7ST205

①遺構 (Fig.43 Pla.22)

14号墳西側周溝下層より14号墳周溝に切られる形で尾根の等高線に並行して検出された木棺墓で、主軸をG.N-54°45'-Eにとる。

墓壙は二段に構築されているが、上段墓壙は14号墳周溝により削平を受けている。形状は全体にやや不明瞭な隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ2.3m、幅1.2mで、下段墓壙までの深さは遺存度の高い北側で、0.4mである。

墓壙埋土は、上段墓壙部が単一層でこれを取り除くと下段墓壙が現われる。下段墓壙部の埋土は木棺崩落によると思われる不整合な堆積状況を示す。また北側の埋土中(土層図4層)からは赤色顔料を検出した。

下段墓壙の形状は北側が胴張りの隅丸長方形を呈し、下段墓壙底部は小口部分を両側とも一段掘り下げている。棺の規模は検出面で長さ1.9m、北側小口幅0.7m、南側小口幅0.5m、最大幅0.8m、上段墓壙からの深さ0.8m、下段墓壙底部の幅は、長さ0.7m、北側小口幅0.4m、南側小口幅0.3m、最大幅0.5mである。棺の形状は下段墓壙底部の形から組み合わせ式の木棺と考えられる。棺内堆積土を除去する過程で遺物などの出土はなかった。

7ST245

①遺構 (Fig.45 Pla.23)

14号墳と15号墳との間の北東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交する形で構築された木棺墓で、主軸をG.N-84°35'-Eにとる。

墓壙は二段に構築されているが、上段墓壙検出面ですでに墓壙内に供献したと思われる土器を検出したことにより、上段墓壙はかなり削平を受けているものと考えられる。上段墓壙の形状は北側小口部分が乱れるものの、隅丸長方形を呈し、長さは最大で2.6m、幅は1.5m、上段墓壙検出面から下段墓壙検出面までの深さは約0.1mである。墓壙内の埋土は棺床部まで一層であるが、本来この層(土層図2層)は棺の裏込め、あるいは棺の封土にあたるものと考えられ、棺の崩落とともに棺内に崩れ落ちたものであろう。また、その層を取り除くと赤色顔料を厚く散布する棺床層(土層図3層)を検出し、棺床層を除去後に木棺裏込め(土層図4.5層)を検出した。赤色顔料は棺床部の東端には散布されてなかった。

下段墓壙の形状は隅丸長方形を呈し、また棺床面の周囲は一段掘り下げられている。その規

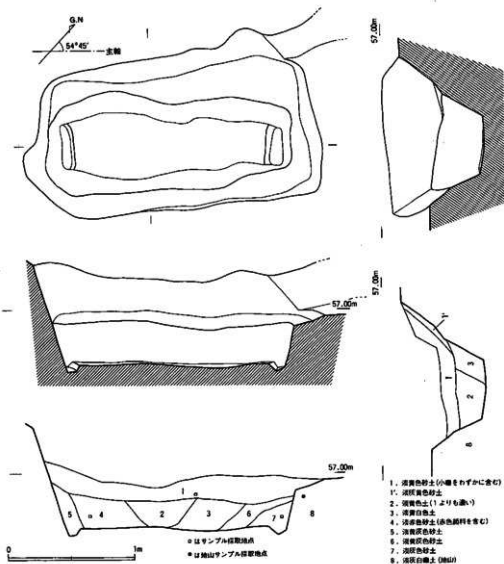


Fig.43 7ST205実測図(1/30)

横は長さ2.4m、幅0.8mで、床面は長さ、1.8m、幅0.4mで、下段墓壇検出面からの深さ0.2mである。棺本体は、棺床の形状から棺の周囲の掘り下げた部分に板を立て組み合わせる、組み合わせ式の木棺と考えられる。

遺物は上段墓壇埋土中より鉄斧を1点と下段墓壇内堆積土より小型丸底壺、長頸壺、脚付鉢、高台付椀を、いずれも墓壇の西側より検出したが、いずれも同一埋土中(土層図2層)からの出土あり、これらはもともと棺の裏込め上部に供献してあったものが棺の崩落とともに流れ込ん

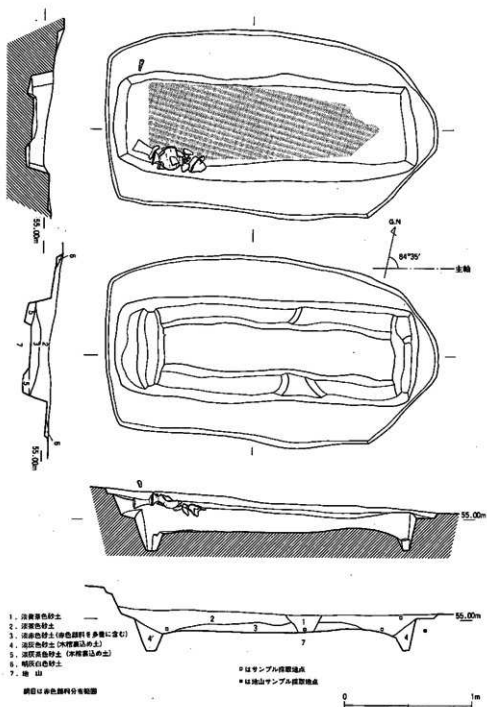


Fig.44 7ST245実測図(1/30)

だものと考えられる。また頭位は遺物の出土状況、赤色顔料の散布位置から西側と判断した。

②出土遺物 (Fig. 46 Pla. 59・60)

土師器

小型丸底壺 (2) 口径8.8cm、器高7.9cm、胴部最大径10.8cm。内底と口縁内部及び外底部に赤色顔料の付着が認められるため、赤色顔料の埋納に使用され



Fig. 45 7ST245溝検出状況

た可能性がある。器形は若干尖り気味の底部から半球状に立ち上がり、胴部中央部から肩部にかけて緩やかに内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部と胴部の境は内外面とも緩やかである。また口縁端部は丸くおさめる。

外面調整は口縁部に縦方向のヘラミガキを施し、体部中央部から肩部にかけても縦方向のヘラミガキを行い、肩部上部のみ横方向のヘラミガキを施す。体部外面下半はヘラミガキを切るようにヘラケズリを施す。内面調整は体部下半はハケ目調整を行い、口縁部から肩部にかけて指押さえ調整を行い、最終調整として口縁部から肩部にかけてヨコナデを施す。色調は内外面とも淡茶色を呈す。胎土は金雲母を微量含む非常に精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上げられる。

脚付鉢 (3) 口径12.2cm、器高22.1cm、底径13.7cm、胴部最大径17.7cm。器形は球状の体部から若干内傾気味に直立する口縁部が立ち上がる。底部には大きく外方に開き、端部が踏ん張った形状の短い脚が付く。また胴部内底部から脚部内面に径0.8mmの穿孔を行う。口縁部と体部の境は緩やかである。体部調整は内外面とも不定方向のハケ目調整を行い、内底部には指押さえの痕跡が残る。

脚部の調整は内外面とも不定方向のハケ目調整の後、ナデ消されている。色調は内外面とも淡黄白色を呈す。胎土は径3mm前後の白色砂粒を多量に含み、径1mm前後の黒色砂粒を若干含む土を使用している。焼成は若干軟質に仕上がる。

長頸壺 (4) 口径8.6cm、器高22.6cm、胴部最大径16.2cm。器形は楕円形の体部に頸部が外反気味にのび、その先端の口縁部は丸くおさめる。胴部中央に刻み目を有する突帯が一条巡る。また胴部下半の一部に赤色顔料の付着がみられる。

胴部の調整は肩部及び中央部までは横方向ヘラミガキを行った後、縦方向の暗文風ヘラミガキを施す。胴部下半の調整はヘラミガキ及びヘラケズリ調整を行う。頸部外面は縦方向の暗文

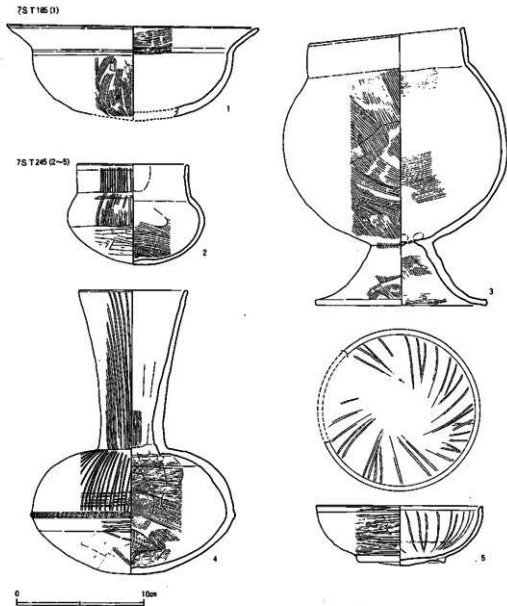


Fig.46 7ST185・245出土土器実測図 (1/3)

風へらミガキを有し、口縁部にヨコナデ調整が見られる。頸部内面の調整は中位まではヨコナデを有すが下半には絞り痕跡が残存する。また胴部内面は全面にハケ目調整を行うが上部のみナデ消され、胴部と頸部の接合痕跡が粗く残る。また粘土紐による凹凸が随所にみられる。外面は全体的に非常に丁寧なへらミガキを行っている。色調は主に淡茶色であるが胴部内面のみ



Fig.47 7ST245出土
遺物実測図(1/2)

黒灰色を呈す。胎土は径2mm以下の砂粒を微量含むが、非常に精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上げられる。

高台付き碗(5) 口径12.2cm、器高4.75cm、底径7.0cm。半楕円形の体部を呈す。口縁部は若干外反し、内部に平坦部があり、口縁形成行為による稜線が端部内外面には明確に残存している。体部は下半より高台を有す。高台は脚としての本来的な役割を果たさないような高い位置に貼り付けられる。また高台の中心と碗本来の中心とは若干のずれが生じている。

調整は体部外面には横方向のヘラミガキをかなり幅広い単位で行い、体部内面には正面からみて左斜め上がり(斜放射状)に1~3本単位で暗文風ヘラミガキを施す。この暗文風ヘラミガキは飛鳥・藤原京等にみられる土師器のように小刀等で施すのではなく、ヘラミガキの工具を使用したものと推測する。また内面底部のみ調整が明確でない。これは内部にものをに入れて使用した可能性が考えられる。

色調は内外面ともに赤褐色を呈す。胎土は径1mm程度の小石を微量と、径0.1mm程度の白色、黒色、金色の粒子を含む、非常に精製された土を使用している。焼成は良好である。

鉄製品 (Fig. 47)

斧(6) 全長7.8cm、刃部幅3.8cm、袋部幅3.2cm、を測る鍛造鉄斧で、長方形を呈す。また袋部分の内面には木質が残存している。

(6) 木蓋土墳墓

7ST210

①遺構 (Fig. 48・49 Pla.25)

14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交する形で構築された木蓋土墳墓で、主軸をG.N-52° 10'-Eにとる。

墓塚は二段に形成され、上段墓塚の平面形状は不整形丸長方形を呈するが、北側の一部を欠いている。その規模は長さ1.6m、南側幅1.1m、北側幅0.9m、墓塚検出面から棺検出面までの深さは、最も遺存状態の良い西側で約0.4mである。

墓塚内埋土は複雑な様相を示しており、おそらく木蓋の部分的な崩落にともなう堆積と考えられる。また上段墓塚の堆積土を掘り下げる過程で、棺の堀方の周囲に粘土層を検出した。粘土層の内側(棺内堆積土)を掘り下げると、両小口部分にテラス状の施設があり、その内側が棺本体であることを確認した。棺の平面形状は隅丸長方形を呈す。棺の規模は、長さ約1.5m、両小口部分の幅約0.55m、最大幅約0.6m、棺底部の長さ約1.5m、西側小口部分の幅約0.2m、東

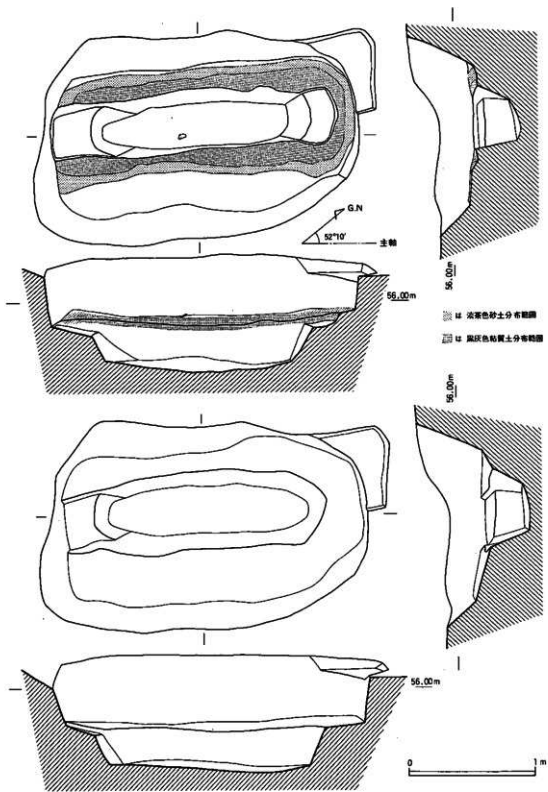


Fig.48 7SK210実測図 (1/30)

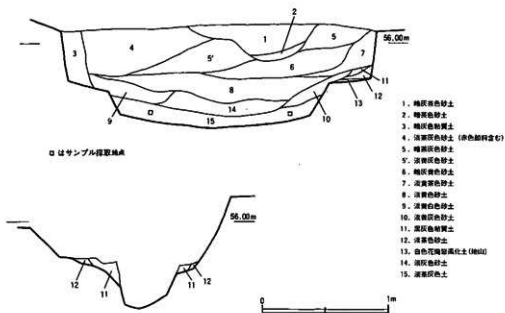


Fig. 49 7ST210土層図 (1/30)

側小口部分の幅約0.3m、棺検出面からの深さ約0.3mである。

棺の両小口に存在するテラス状の施設については、粘土層がこのテラス状の施設を囲むように存在すること、また西側のテラス部分は粘土層を取り除くと存在しないことなどから、粘土層の内側に木蓋が存在し、テラス状の施設は木蓋の両端を乗せるための施設であり、粘土層は木蓋の目張りのためのものと考えられる。以上のことから推測する木蓋の規模は、長さ約2.25m、幅約0.7m、木蓋の厚さ、約10mm程度のものであろう。

遺物は下段墓塚検出面付近より鉄鏝を1点検出したが、鏝による傷みが著しく取り上げ時に破砕してしまった。また上段墓塚埋土中(土層図4層)から赤色顔料を微量ながら検出した。赤色顔料は西側堆積土中に限定される。以上のことから頭位は西側と考えられる。

(7) 箱式石棺墓

7ST225

①遺構 (Fig. 50 Pla. 26・27)

14号墳と15号墳との間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された箱式石棺墓で、棺の主軸はG.N-82° 40' -Eにとる。

墓塚は二段に形成されており、その上段墓塚の平面形状は、北側の一部を削平されているが、やや不明瞭な隅丸長方形を呈している。上段墓塚の規模は長さ2.9m、幅1.9mである。上段墓塚内埋土は単一層で埋土中に微量ではあるが赤色顔料が含まれていた。

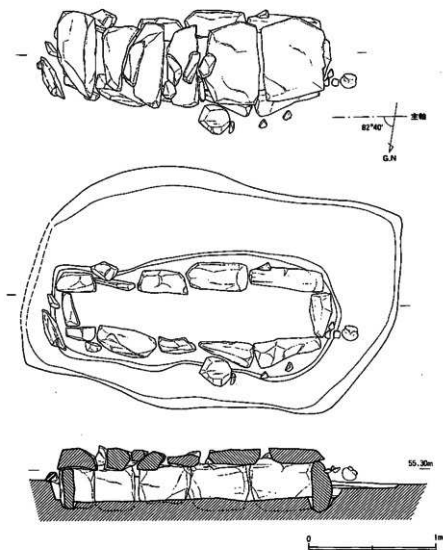


Fig.50 7ST225 実測図 (1/30)

棺の蓋石は、大きく分けると6枚で構成され、その蓋石の間を埋めるように拳程度の石が多く存在し、また蓋石を取り除くと蓋石の裏側には赤色顔料が塗布されていた。棺内の形状は南側小口部分の幅が最も広く、北側に向かうほど幅が狭くなる長方形を呈する。棺の規模は、長さ1.85m、幅は、北側小口で0.25m、南側小口で0.3m、棺内の深さ0.3mである。側石は両側とも5枚で構成され、小口構造は各々1枚の石で作られた小口部分を両側石で挟む構造である。

棺内の埋土は大きく2層に分けられ、上から淡茶色砂土、淡茶白色礫土で、棺内より赤色顔料は検出されなかった。

棺内埋土を除去する過程で遺物の出土はなかったが、上段墓塚埋土中より、南側小口石のす

く脇（蓋石検出面より下層であり、側石の高さの中位、地山直上）で供献品と思われる、土師器小型丸底壺、鉄製刀子を、また破片ではあるが、反対側の小口部分から土師器鉢を、両側石の中位から土師器鉢、長頸壺を検出した。頸位は棺の構造や供献品の位置から西向きと考えられる。

②出土遺物 (Fig. 51 Pla. 60)

土師器

長頸壺(1) 胴部最大径約15.7cm。胴部に刻み目を有する突帯が一条巡る、長頸壺の胴部小破片である。外面の一部に赤色顔料の付着がみられる。外面調整は胴部から中位にかけて、縦方向の密なハケ目調整を行い、横方向のヘラミガキを若干粗く施し、縦方向の暗文風ヘラミガキを入れる。また胴部下半は横方向のヘラミガキが施される。内面調整は外面とは異なる工具による横方向のハケ目調整を行う。色調は外面が黄茶褐色で内面は暗茶黄色を呈す。胎土は径1mm以下の白砂粒と微細な金雲母を微量含む非常に精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上げられる。

壺(2) 口径16.95cm、残存器高12.1cm、胴部最大径19.4cm。体部中位より下半を欠損する。肩部のはった胴部に若干外反気味の口縁部がつき、口縁端部で若干つまみ上げる。口縁部の外面調整は、まず縦方向のハケ目調整を行い、ヨコナデを施す。その後全面に粗い縦方向のヘラミガキを施す。口縁部内面調整は端部にヨコナデが存在するが、主に縦方向の粗いヘラミガキである。体部内面調整は上位に横方向のハケ目が存在するが、その下位はナデ消されている。また体部と口縁部の境部は外面は緩やかであるが、この部分にのみ横方向のヘラミガキを行い、内面は明確な調整の違いによる屈曲が存在する。

色調は内外面ともに淡茶黄色を呈す。胎土は径1mm前後の白色砂粒をわずかに含む土を使用している。焼成は若干軟質ながら良好である。

鉢(3・4) 3・4ともに小破片である。3は口径18.6cm、残存器高5.3cm。浅く広い体部から口縁部でさらに大きく外方に広がる。また体部と口縁部の境は内外面とも明確である。内外面に赤色顔料の付着が認められる。外面調整は口縁部から胴部上位にかけて縦方向のハケ目調整を行い、胴部中位からは横方向のハケ目調整を行う。内面は横方向の粗いヘラミガキを行う。色調は内外面とも黄灰色を呈す。胎土は径2mm以下の砂粒を多量に含む粗い土を使用している。焼成は若干軟質に仕上がる。

4は口径18.0cm、残存器高4.1cm。器形は3と類似する。調整は口縁部外面には縦方向のハケ目調整を行うが体部には斜方向のハケ目調整を行う。口縁部内面はヨコナデを施し、体部内面は横方向の粗いヘラミガキを施す。色調は内外面とも淡黄灰色を呈す。胎土は径2mm以下の砂粒と黒色粒子を多く含む粗い土を使用している。焼成は若干軟質ながら良好である。

小型丸底壺(5) 口径9.2cm、器高9.1cm、胴部最大径11.0cm。肩のはった胴部から直立する

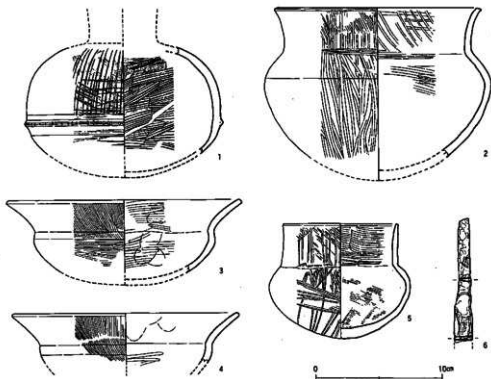


Fig.51 7ST225出土遺物実測図(1/3)

口縁部へと緩やかにつながる。また底部は若干尖り気味で、口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面調整は斜方向のハケ目調整の後、縦方向の暗文風のヘラミガキを施す。体部外面は肩部には縦方向のハケ目調整を行った後、縦方向にヘラミガキを行う。また体部下位はヘラケズリを行った後、粗い不定方向の暗文風ヘラミガキを施す。口縁部の内面調整は横方向のハケ目調整を行い、体部はハケ目調整の後、ナデ消される。

色調は内外面とも淡黄灰色を呈す。胎土は径1mm程度の白色砂粒と黒色粒子、金雲母を微量含む精製された土を使用している。焼成は若干軟質に仕上がる。

鉄製品

刀子(6) 残存全長9.8cm、最大幅1.5cm。刀子と考えられるが、握り部分を欠損する。棟部分はまっすぐに延び、切先部分はふくらのない造りで、かます切先の様相が強い。全体を錆に覆われているが、刃部の断面は片刃的であることなどから、狩猟(動物の解体など)、武器として使用されたものではなく、木工の工具的に使用されていたことが考えられる。

7ST260

①遺構 (Fig.52 Pla.28-29)

14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するよう構築された箱式石棺墓で、棺の主軸をG.N-35°-Wにとる。

墓壇は二段に形成され、その上段墓壇の平面形状は南側を7ST285に、西側を7ST042に切られているが、不整隅丸長方形を呈する。棺の規模は長さ2.3m、幅1.5mであり、また上段墓壇内埋土は淡茶色砂土の単一層である。

棺の蓋石は検出段階で東側の一枚を除いて存在しておらず、それ以外のものについては、もともと存在しなかったものなのか、取り除かれたものなのかは不明である。棺の形状は両小口の幅がほぼ均等な隅丸長方形であり、棺の規模は、長さ1.2m、幅は西側小口0.4m、東側小口0.3mで、棺内の深さ0.35mである。棺の両側石は併せて三枚で東側のみに存在し、また小口部分は一枚の石で作られ、側石により挟まれる構造である。また棺の西側では側石の抜き取り痕跡や側石の裏込めなどが確認できなかったことから、当初より側石や小口石は存在しない箱式石棺墓と石蓋土墳墓の折衷的な構造の墓壇であると判断した。

棺内の堆積土は土層図2～8層が該当する。この層を取り除くと赤色顔料を含む棺床層が現われる。9層は特に多くの赤色顔料を含む層で棺の中心よりやや西側に楕円形状に存在し10.11層を切る形で存在する。

遺物は、墓壇内埋土中より、供献品と考えられる土師器壺、土師器小型丸底甕を、蓋石東側の蓋石検出面とはほぼ同じ高さで検出した。その他に棺内埋土の西側の10層より副葬品としてガラス小玉を計29個検出した。圓化したガラス小玉は棺の北東部分に集中するが、北側小口部分全面にあった可能性も考えられる（出土状況から判断するとガラス小玉は紐に通して被葬者の首に掛けられていたと思われる。頭位はガラス小玉の検出位置から北側と判断した）。この墳墓に関しては、棺内のガラス小玉の分布状況から判断すると、被葬者の足下に供献土器を埋置したこととなる。

②出土遺物 (Fig. 53 Pla. 61)

土師器

甕(1) 口径12.2cm、残存器高15.0cm、胴部最大径15.6cm。尖り気味の底部から肩の張った体部を有し、肩部から口縁部の屈曲は緩やかである。口縁部は外方に立ち上がり、肩部は丸くおさめる。口縁部内外面から肩部にかけてはヨコナデによるナデ消しを行う。肩部から胴部中央は縦方向のハケ目を有し、これを切るように右上がり方向から横方向にヘラケズリが行われる。胴部内面は右上がり方向のハケ目調整を行い、底部のみナデが施される。

色調は内外面とも淡黄色を呈す。胎土は径1mm程度の小石を多量に含む土を使用する。焼成は良好である。

小型丸底甕(2)

口径8.4cm、器高9.4cm、胴部最大径10.3cm。器形は丸みをおびた体部に、若干尖り気味の底部

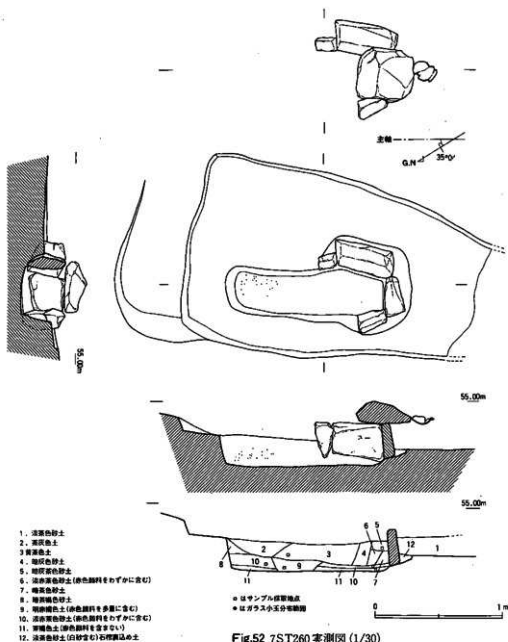


Fig.52 7ST260 実測図 (1/30)

と若干開き気味の口縁部を有す。口縁部と体部の境は外面は屈曲部形成のヨコナデにより若干鈍くなるが、内面屈曲は明確である。調整は口縁部内外面ともにヨコナデを行うが、外面には山形の暗文風のヘラミガキを施す。体部外面は右下がり方向のハケ目調整を行った後、上下に2分割のヘラミガキを施す。胴部外面下半は横方向のヘラケズリを行うが、わずかにヘラミガキ

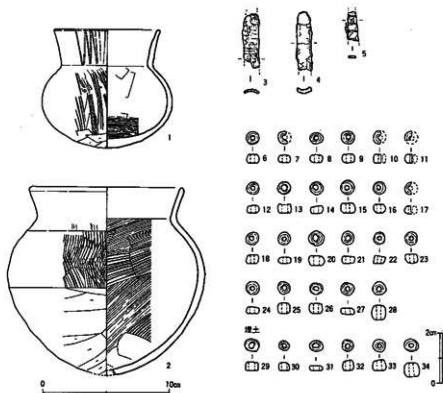


Fig.53 7ST260出土遺物実測図(1/3)

が確認されるが、最終調整として手持ちヘラミガキを消している可能性が考えられる。また内面調整は底部はハケ目調整を行うが、中位から肩部はヨコナデ調整を行い、一部に工具によるあたりが認められる。

色調は外面は赤褐色で内面は茶灰色を呈す。胎土は径1mm程度の透明粒子及び、白色の小石を極微量含む精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上がる。

鉄製品

錐(3~5) 断面形状や幅から同じ個体の破片であると考えられるが接合部分が見出せなかった。断面U字形の刃部をもつことから錐と考えられる。

ガラス製品

小玉(6~44) 径1.0~1.2cm、高さ0.4~1.1cm、穿孔径0.3~0.5cm。平面形状は円形であるが一部に欠損するものもある。色調は淡青白色のものと濃紺色のものが存在する。

7ST285

①遺構 (Fig.54 Pla.30)

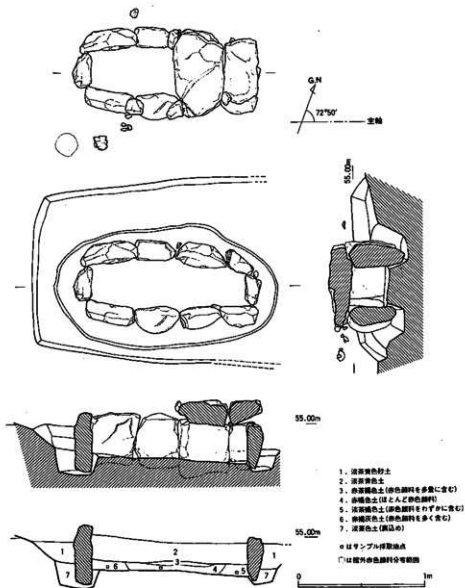


Fig.54 7ST285実測図(1/30)

14号墳と15号墳の間の尾根線上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された箱式石棺墓で、棺の主軸はG.N-72° 50' -Eにとる。

墓壇は二段に形成され、その平面形状は不整形ではあるが隅丸長方形を呈する。また墓壇の北側は7ST260により切られる。上段墓壇内埋土は淡茶黄色砂土の単一層であるが、西側より赤色顔料を検出している。

棺の蓋石は、検出段階です
でに蓋石のうち数枚が取り除
かれ、東側の二枚が残るのみ
であった。棺の側石は両側と
も4枚で構成され、各々1枚の
石で作られる小口部分を両側
石が挟む構造である。棺内の
形状は中心部分の幅が最も広
く小口に向かって狭くなり、
その規模は、長さ約1.2m、最
大幅約0.35m、両小口の幅約
0.3m、棺内の深さ約0.3mである。棺内堆積土は、淡茶黄色土が堆積し、それを取り除くと赤色
顔料を含む棺床層（土層図1～4層）を検出した。



Fig.55 7ST285遺物出土状況

棺内埋土を除去する過程で遺物の出土はなかったが、墓塚埋土中より、南側石の脇の蓋石検
出面とはほぼ同じ高さで、土師器小型丸底壺と鉄鎌3
点そして鉄鎌を検出した。

頭位は、供献品の検出状況から西向きとした。

②出土遺物 (Fig.56 Pla.61)

土師器

小型丸底壺(5) 口径9.9cm、器高9.45cm、胴部
最大径11.8cm。器形は丸みをおびた体部に、若干尖
り気味の底部と直立気味の口縁部を有し、口縁端部
は丸くおさめている。口縁部と体部の境は外面は
屈曲部形成のヨコナデを行うが、内外面とも屈曲は
明確である。また底部に径1.0cm程度の穿孔が存在す
る。

調整は口縁部内外面ともにヨコナデを行い、外面
には縦方向の暗文風のヘラミガキを施す。体部外面
は右下がり方向のハケ目調整を行った後、不定方
向のヘラミガキを施す。胴部外面下半は横方向の
ヘラケズリがヘラミガキを切るように行い、最終調
整としてヘラミガキを消している。また内面調整
は体部はハケ目調整を行う。全体的にヘラミガキ

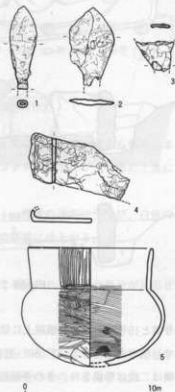


Fig.56 7ST285出土
遺物実測図 (1/3)

を丁寧に行っているため器面に光沢を持つ。色調は内外面とも淡黄橙色及び暗橙色を呈す。胎土は径1mm以下の白色粒子及び、金雲母を極微量含む非常に精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上がる。

鉄製品

鏃(1~3) 1は全長6.6cm、幅2.15cm、2は残存全長6.2cm、幅3.5cm、3は残存全長2.4cm、最大幅3.0cm。いずれも平造りの鉄鏃である。

鏃(4) 残存全長8.0cm、幅3.6cm。刃の先端部を欠損する。

(8) 石蓋土墳墓

7ST135

①遺構 (Fig.58 Pla.31)

13号墳と14号墳の間の北東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交する形で構築される石蓋土墳墓である。棺の主軸をG.N.-61° 30'-Wにとる。

墓壇は二段に形成されており、上段墓壇の平面形状は隅丸長方形を呈し、その中心に一つの石を標石として据えている。上段の墓壇の規模は、長さ1.5m、幅1.1mである。墓壇内埋土は淡茶色砂土の単一層で、この層を取り除くと棺の蓋石が現われる。

棺の蓋石は4枚で構成され、南から順に大きく北側が最も小さかった。棺の形状は、両小口の幅がほぼ均等な隅丸長方形である。棺の規模は、長さ1.1m、



Fig.57 7ST135土層観察

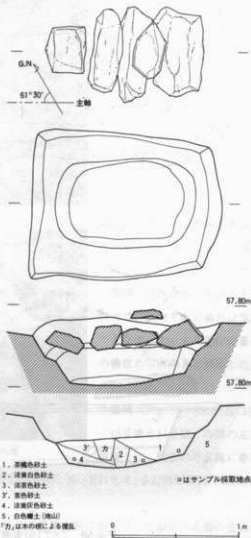


Fig.58 7ST135実測図(1/30)

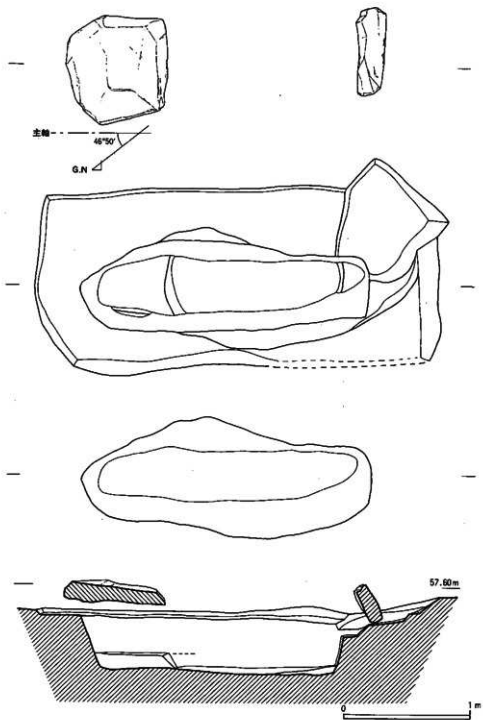


Fig.59 7 ST190実測図(1/30)

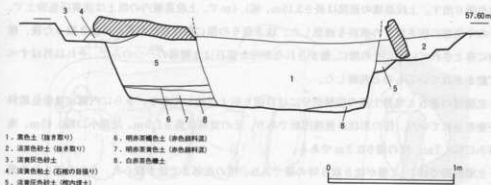


Fig.60 7ST190土層模式図 (1/30)



Fig. 61 7ST190赤色顔料検出状況



Fig. 62 7ST190赤色顔料検出状況



Fig.63 7ST190出土
遺物実測図 (1/2)

幅0.7mで、上段墓壇検出面から棺底までの深さ0.55m、棺内の深さ0.3mである。

墓壇、棺内堆積土を除去する過程で、遺物や赤色顔料は検出できなかった。また頭位は蓋石の構成から南向きと判断した。

7ST190

①遺構 (Fig.59・60 Pla.32)

13号墳と14号墳との間の北東尾根上に、尾根の等高線に並行するように構築された石蓋土壇墓で、棺の主軸をG.N-46° 50' -Eにとる。また西側を7ST185に切られ、14号墳周溝を切っている。

墓壇は二段に形成され、上段墓壇の平面形状は不整隅丸長方形を呈しており、北側の短辺が

やや張り出す。上段墓壙の規模は長さ3.15m、幅1.4mで、上段墓壙内の埋土は淡黄灰色砂土で、その中央部に抜き取りの痕跡を確認した。抜き取りの際に開けられた蓋石は抜き取った後、棺内に落とされている。その際に、動かされなかった蓋石は北側端の一つのみで、それ以外はすべて動かされているものと判断した。

北側端の蓋石と埋葬土壙の接触部分には目張り粘土が施してあり、さらに内側には赤色顔料が塗布されていた。棺の形状は長楕円形であり、その規模は長さ1.5m、北側小口幅0.45m、南側小口幅0.3m、棺の深さ0.3mである。

土層観察では1・2層が抜き取り時の層であり、棺の底部まで抜き取られ、それに切られる形で5～7層が存在する。5～7層は棺内の埋土で5層は棺内流入土である。この層を削除すると赤色顔料を散布した棺の床面が現われる。床面は現存部で判断すると、きめ細かな土を約10.0cmほど盛り上げ棺床をつくり、その上に赤色顔料を散布している。また5層は棺内の堆積土であるため、この層を抜き取り時のプランが切ることから、抜き取りは棺内に堆積土が流入した後の行為、つまり後世のものであることがと考えられる。

遺物は棺内堆積土中より鉄製品を1点検出した。頭位は蓋石の構成から北側と判断した。

②出土遺物 (Fig. 63)

鉄製品

1は、残存全長3.25cm、幅0.95cm。両端部分を欠損する。用途不明。

7ST275

①遺構 (Fig. 64 Pla. 33)

14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された石蓋土墳墓である。主軸はG.N-53° 45'Eにとる。また上段墓壙の北側は7ST042によって切られている。

墓壙は二段に形成されているが、平面形状は全体にやや不明瞭な隅丸長方形を呈する。上段墓壙の埋土は4層に分かれており、上から暗灰茶色砂土、茶灰色砂土、淡茶色砂土、淡黄灰色砂土である。

蓋石は6枚で構成され、南側がやや大きめである。また、蓋石を取り除くと蓋石の裏側には赤色顔料の塗布を確認した。棺の形状は不整隅丸長方形で、棺底部が上部に比べ狭くなっている。棺の規模は、長さ2.0m、幅0.7m、上段墓壙検出面から棺底までの深さ0.8m、棺の深さ0.3m、棺底部の長さ1.6m、幅0.2mである。棺内の埋土は大きく4層に分けられ、6～9層がそれに当たる。6・7層は棺内堆積土と考えられ、それを取り除くと赤色顔料を含む9層が現われる。赤色顔料は南側ほど赤みが濃く、北側端の8層には赤色顔料はまったく含まれていなかった。この赤色顔料を含む層から下層が棺床部と考えられ、約10cm程度ほど土を盛り上げて棺床を造っていることがわかる。

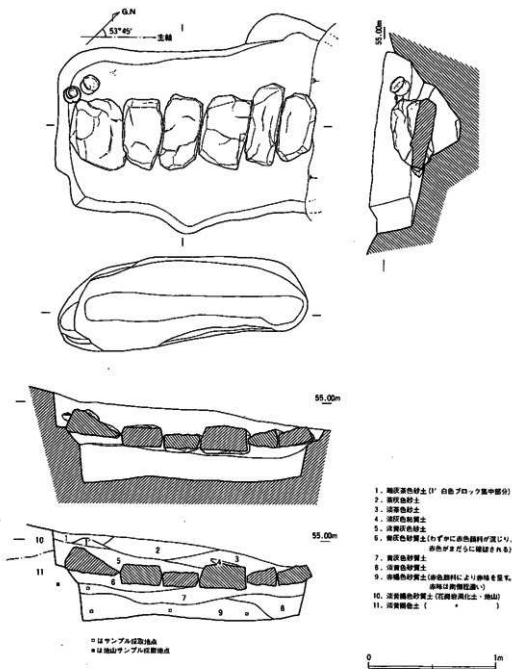


Fig.64 7ST275 実測図 (1/30)

上段墓壇埋土中で南端の蓋石端で供献品と思われる鉢2個体、小型九底蓋、鉄製刀子が検出された。頭位は蓋石の構成や赤色顔料の散布状況から西側と判断した。

②出土遺物 (Fig. 65 Pla. 61)

土師器

小型丸底壺(1) 口径6.8cm、器高6.85cm、胴部最大径7.9cm。器形は丸みをおびた体部に、若干尖り気味の底部と若干開き気味の口縁部を有す。口縁部と体部の境は内外面とも明確である。調整は口縁部内外面ともにヨコナデを行い、体部外面は不定方向のハケ目調整の後工具ナデが施される。内面はナデ調整を行う。色調は内外面とも淡黄橙色を呈す。胎土は径3mm程度の白色砂粒及び、微細な金雲母を若干多く含む土を使用している。焼成は良好ながら若干軟質に仕上がる。

鉢(2・3) 2は口径13.2cm、器高6.0cm。丸みをおびた半球状の体部に、若干内湾気味の口縁部を有す。また端部は丸くおさめられる。外面調整は手持ちのヘラケズリを行い、内面は指押さえにより形成する。底部は若干平底風につくる。全体に器壁が非常に薄くつくられているため、他の鉢に比べ重さが非常に軽い。色調は内外面ともに淡黄橙色を呈す。胎土は径3mm程度の白色砂粒と金雲母、黒色粒子を多量に含む土を使用する。焼成は若干軟質に仕上がる。

3は器形は2に類似するが器壁の厚さが大きく異なる。外面調整は体部中位はハケ目調整を行い、底部は手持ちのヘラケズリをハケ目調整を切るように行う。また口縁部もハケ目調整を切るようにヨコナデを施す。色調は外面が淡橙灰色で、内面が暗灰色を呈す。胎土は径4mm前後の白色砂粒を多量に含む土を使用する。焼成は良好ながら若干軟質に仕上がる。

鉄製品

4は、残存全長3.6cm、幅1.8cm。両端部分を欠損する。全体に木質が残存している。用途不明。

(9) 土坑

7SK039

①遺構 (Fig. 66 Pla. 34)

14号墳南西側斜面のテラス上に位置する遺構で主軸をG.N-45° 0' -Wにとる。遺構の平面形状は隅丸長方形を呈しているが谷側の壁面は存在せず、それが削平によるものか、本来存在しないものなのか不明である。平面形の規模は長軸1.9m、検出幅1.1mである。

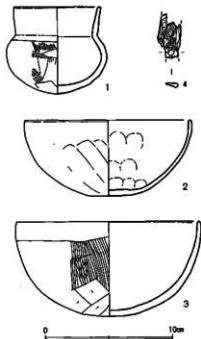


Fig. 65 7ST275出土遺物実測図(1/3)

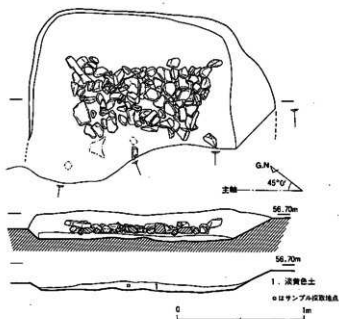


Fig.66 7SK039 実測図 (1/30)

遺構の埋土を掘り下げると拳程度の石をほぼ水平に敷き詰めた長方形の床が底面中央に検出された。この石敷きは四隅がやや突出する形状を呈している。その規模は長軸1.0m、突出部から突出部までの長軸1.2m、短軸0.5m、突出部から突出部までの短軸1.2m、検出面からの深さ0.2mである。また石敷きの部分を除去すると掘削面を

7SK145

①遺構

7SK150を切る形で検出した土壌で、東側を近世墓により切られる。遺構の平面形状は楕円形を呈す。その規模は、長軸約1.0mである。埋土中より小型丸底甕を一点検出した。

②出土遺物 (Fig. 67 Pla. 62)

土師器

小型丸底甕 (1) 7ST150を切る遺構からの出土遺物である。口径14.4cm、残存器高9.2cm、胴部最大径12.75cm。胴部最大径は胴部の中央付近で、そこから肩部にかけて内傾し、口縁部は若干内湾気味に大きく開くが端部は若干外反気味につまみ上げる。また口縁部と肩部の屈曲は明確である。外面調整は体部中位までは縦方向のハケ目調整を行った後、横方向のヘラミガキを非常に密に施す。底部は右下がり方向のヘラケズリ後、横方向のヘラケズリを行う。内面調整は体部中位までは横方向のヘラミガキ調整を施すが、

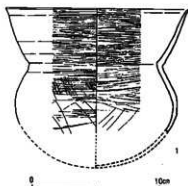


Fig.67 7SK145 出土土器
実測図 (1/3)

その下位はヨコナダを行った後、右下がり方向のヘラミガキ調整を施す。また肩部内面に縦方向のハケ目調整が若干存在する。全体に非常に丁寧にヘラミガキが行われているため器面に光沢をもつ。

色調は内外面ともに赤褐色を呈す。胎土は径1mm程度の透明粒子を極微量含むが非常に精製された土を使用している。焼成は良好で硬質に仕上がる。

7SK150

①遺構 (Fig. 68 Pla.35)

13号墳と14号墳の間の北東尾根上に構築され、7ST145の下層から検出された遺構で土壌内に大量の赤色顔料を含んでいる。

土壌の平面形状は遺構の東側を別遺構に切られているが不整形な半円形を呈す。またその規模は長軸が0.6m、深さ0.25mである。

遺構の性格として考えられることは、遺構内埋土の大半を赤色顔料が占め、検出位置が14号墳と15号墳の間の墳墓の集中する部分であることなどから、赤色顔料埋納遺構としての位置付けが推定できる。また遺構を掘り下げる過程で鉄製刀子を1点検出した。

②出土遺物 (Fig. 69)

鉄製品

刀子 (1) 残存全長13.65cm、最大幅1.85cm。掘り部分と切先部分先端を欠損する。形状から鋭く尖る先端部分を有するものと考えられる。

7SK140

①遺構 (Fig. 70)

13号墳と14号墳の間の北東尾根上に位置し7ST185を切る形で検出した土壌である。

遺構の平面形状は楕円形を呈しているがそこを掘り下げると、その西側が一段深く掘削され、断面形状は二段掘りとなる。また下段土壌底部には掘削によると思われる凹凸が多数存在する。土壌の規模は最大径約1.5m、遺構検出面からの最深部まで35cmである。

土壌内埋土は土層観察により、上層は淡茶色土の単一層でそれを除去すると、下段土壌が現れる。下段土壌は主に炭層からなる。さらに底部の凹凸面は人為的に整地されている可能性が考えられる。

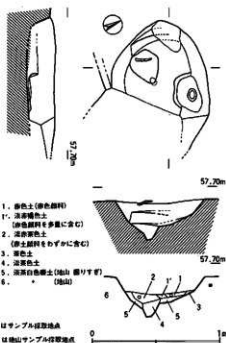


Fig.68 7SK150実測図(1/30)

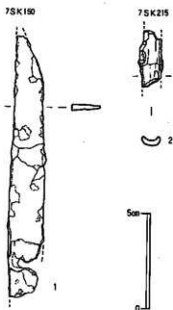


Fig.69 7SK150・215出土墳物実測図(1/2)

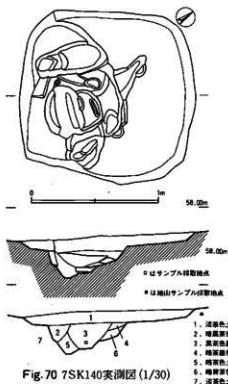


Fig.70 7SK140実測図(1/30)

土壌の埋土を除去する過程で遺物は出土していない。また炭層中に骨片などは含まれていなかった。土壌壁面の赤変部分などは確認していない。

7SK155

①遺構 (Fig.71 Pla.36)

14号墳の北西側斜面のテラス部分に位置し、平面形上は楕円形を呈する土壌である。土壌は二段に構築されており、上段土壌の西側は斜面地形に構築されているため、かなりの削平を受けている。土壌の規模は長さ1.1m、上段土壌の深さ0.2m、下段土壌の平面形状は不整形な楕円形で、その底部に掘削痕が多く存在する。規模は最大径0.6m、検出面から最深部までの深さ0.5mである。

土壌は検出面で土壌の中心に炭の集中部分を確認している。また土層観察の結果、下段土壌の凹凸面を整地している可能性が考えられる。

遺構の性格については推測ではあるが、炭層部分に何らの容器が存在し、それを人為的に丁寧に埋め戻した形跡が土層図の不整合部分から窺える。

土壌内の埋土を除去する過程で土師器壺片、小型丸底壺片を検出した。また炭層中には骨片などは含まれていなかった。土壌壁面に熱による赤変部分などは確認できなかった。

②出土遺物 (Fig.74 Pla.62)

土師器

壺(1) 残存口径14.8cm、残存器高10.9cm。口縁部と胴部を欠損する壺である。器形は大きくはった胴部に「く」字

状の頸部がつき外方に開き気味の口縁部を有す。また頸部に突帯が一条巡る。外面調整はきめ細かい横方向のヘラミガキを施す。また突帯周囲に貼りつけの際のヨコナゲ調整が施される。口縁部内面調整は風化のため不明である。口縁部と胴部の境は明確である。胴部内面調整は指押さえを行う。色調は内外面とも淡橙色であるが、外面は部分的に赤色顔料の塗布が認められる。胎土は径3mm前後の白色砂粒、微細な金雲母を多く含む土を使用している。焼成は良好ながら若干軟質に仕上がる。

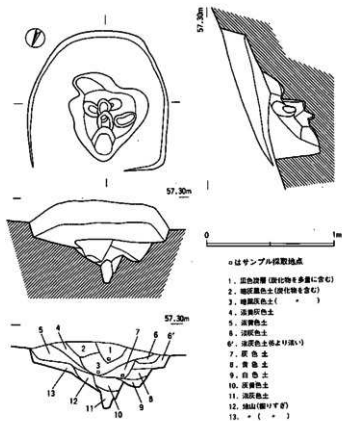


Fig.71 7SK155実測図(1/30)

小型丸底壺(2) 口径9.7cm、器高6.4cm。半楕円形の体部に外方に大きく開く口縁部を有す。口縁部は若干開き気味である。また体部と口縁部の境は明確につくられる。外面調整は、全体に横方向のやや粗めのヘラミガキを施すが、口縁部のみ縦方向のハケ目調整を行った後にヘラミガキを施す。内面の調整は口縁部はハケ目、体部内面はナデを施す。色調は内外面とも淡黄橙色を呈す。胎土は微細な白色砂粒と金雲母を若干含む精製された土を使用する。焼成は良好である。

7SK125

①遺構 (Fig.75 Pla.62)

13号墳と14号墳の間の尾根線上に尾根と平行するように構築された土壇で、遺構の南側を別の遺構に切られる。

遺構の平面形状は西側でやや屈曲した隅丸長方形を呈し、東側にテラス状の施設を伴っている。遺構の規模は、長軸が約2.8m、西側幅0.7m、東側幅0.6m、深さは0.5mである。

土壇の埋土は淡黄色砂土の単一層である。また土壇検出面で土壇の西側に拳大の石を一つ検

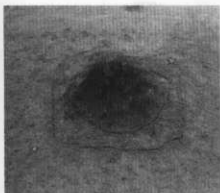


Fig. 72 7SK155遺構検出状況



Fig. 73 7SK155遺物出土状況

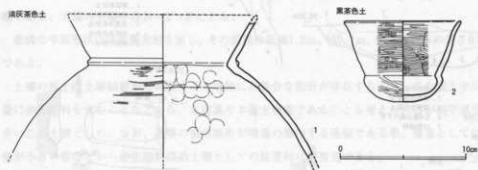


Fig. 74 7SK155出土土器実測図(1/3)

出している。土壌埋土中からは遺物などの出土はなかった。

7SK215

①遺構 (Fig. 75)

14号墳と15号墳との間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された土構である。主軸をG.N-76°-Eにとる。

遺構の平面形状は隅丸長方形を呈し、その規模は長軸2.1m、西側幅0.4m、東側幅0.35m、検出面からの深さ0.1mである。

土壌の埋土は、土層観察から判断すると堆積に不整合な部分が存在するため木棺墓や木蓋土塚墓であることも考えられるが、削平部分が多いため土塚として位置付けした。また遺構検出面で土壌の東隅で拳大程度の石を1個検出したが、遺構に伴うものなのか不明である。遺構を掘り下げる過程、鉄器の小片を検出した。赤色顔料などは検出できなかった。

②出土遺物

鉄製品 (Fig. 69)

2は、残存全長3.0cm、幅1.0cm。両端部分を欠損するが、鈍片と考えられる。

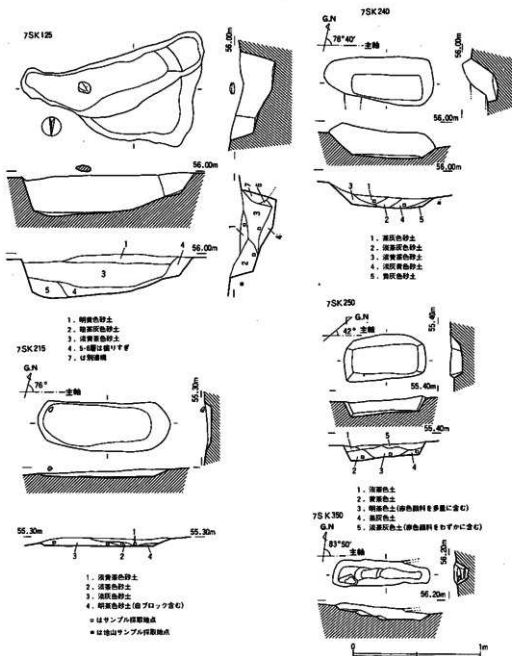


Fig.75 7SK125・215・240・250・350実測図(1/30)

7SK240

①遺構 (Fig.75)

14号墳と15号墳との間の南東尾根上に位置し、尾根に直交するように構築された土壌である。

土墳の主軸をG.N-78° 40'-Eにとる。

遺構の平面形状は隅丸長方形を呈す。また尾根上の斜面に構築されているため削平をうけており遺構の遺存度はあまりよくない。遺構の規模は長軸2.1m、西側幅0.4m、東側幅0.35m、検出面からの深さ0.1mである。

土墳の埋土は土層観察から判断すると、堆積に不整合な部分が存在するため木棺墓や木蓋土墳墓であることも考えられるが、削平部分が多いため土墳として位置付けした。遺構を掘り下げる過程で遺物や赤色顔料などは検出できなかった。

7SK250

①遺構 (Fig. 75)

14号墳と15号墳との間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交するように構築された土墳である。土墳の主軸をG.N-42°-Eにとる。

遺構の平面形状は隅丸長方形を呈し、その規模は長軸1.3m、幅0.7m、検出面からの深さ0.2mである。

土墳の埋土は土層観察から判断すると堆積に不整合な部分が存在すること、また埋土中に多量に赤色顔料を含むことなどから、木棺墓や木蓋土墳墓であることも考えられるが削平部分が多いため土墳とした。なお、遺構の検出場所が墳墓の集中する尾根である事、墳墓としては規模が小さい事などから赤色顔料埋納土墳としての位置付けも推定できる。

7SK350

①遺構 (Fig. 75)

14号墳と15号墳の間の南東尾根上に位置し、尾根の等高線に直交する形で構築された土墳である。遺構の主軸をG.N-83° 50'-Eにとる。

遺構の平面形状は隅丸長方形で、東側を7ST021により切られる。遺構の規模は長さ1.5m、幅は東側で0.2m、西側で0.45m、深さは検出面から最も遺存度の良好な部分で0.2mである。

埋土は単一層ながらその中に赤色顔料を多く含む。遺構の性格として、遺構の検出場所や赤色顔料を埋土中に多く含むこと、また墳墓としては遺構の規模が小さい事などから赤色顔料埋納土墳としての位置付けが推定できる。また土墳内より遺物などは検出されなかった。

(10) 土墳墓 (歴史時代)

7ST315

①遺構 (Fig. 76 Pla. 37)

主軸をG.N-17° 30'-Wにとる墳墓で、両尾根の間に広がる南東斜面で等高線に直交するように構築された墳墓である。墓塚は隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ2.35m、北側小口幅1.1m、南側小口幅1.3m、深さ0.8mを測る。また棺の北側にテラス状の施設が存在するが調査時

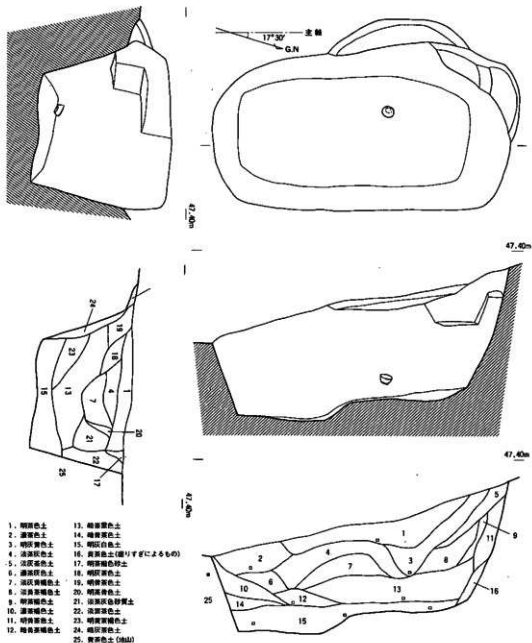


Fig.76 7ST315 実測図 (1/30)

点で棺に付随する施設が別遺構であるか判断できなかった。

遺構内の埋土は土層観察からは自然堆積であるとは考えにくく、また棺の最下層の埋土は土

質が堆積土とは異なるため、またこの埋土上から遺物を検出したことなどから人為的に整地された棺床であろう。以上のことからこの墳墓の形態は木蓋土壙墓の可能性を示唆するものと考えられる。

出土遺物は棺の中央部から供献品として須恵器坏c1点を床面上から、口縁部を上に向けた状態で検出した。

②出土遺物

(Fig.77 Pla.62)

須恵器

坏c(1) 口径9.8cm、器高3.9cm、底径7.4cm。底部より直線的に若干外方に開き気味に立ち上がり、口縁端部をわずかに外方へ積み端部を丸くおさめる。また底部と体部の境目は、高台接合位置及び高台接合のためのヨコナデ調整のため不明瞭であり、その際に生じる稜線が体部下部に残存する。高台の形状は外方に開き気味である。底部外面の処理は回転ヘラ切り後、軽くナデを施す。色調は外面は淡灰色で内面は灰色を呈す。胎土は径1mm程度の白色粒子をわずかに含む土を使用する。焼成、還元は良好で硬質に仕上がる。



Fig.77 7ST315出土
遺物実測図(1/3)

の境目は、高台接合位置及び高台接合のためのヨコナデ調整のため不明瞭であり、その際に生じる稜線が体部下部に残存する。高台の形状は外方に開き気味である。底部外面の処理は回転ヘラ切り後、軽くナデを施す。色調は外面は淡灰色で内面は灰色を呈す。胎土は径1mm程度の白色粒子をわずかに含む土を使用する。焼成、還元は良好で硬質に仕上がる。

7ST305

①遺構 (Fig.78 Pla.38・39)

主軸をG.N-43° 10'-Eにとる墳墓で、北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分に等高線に並行するように構築された墳墓である。また、7SB355掘立柱建物の柱穴i-jを切っている。墓壙の平面形状は長方形を呈し、その規模は、長さ2.4m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。また断面形状から判断するに、墳墓の上部は多くを削平されているものと考えられる。

棺の形態は土層観察からは自然堆積であるとは考えにくく、遺物の出土状況などからも木棺墓、あるいは木蓋土壙墓であることが考えられる。

出土遺物は土師器坏を4点と滑石製石鍋の破片、鉄釘1点である。土器の多くは棺の北側小口付近の東側壁に沿うように検出された。これらはすべて破片となって検出されたため棺内に副葬されたものではなく棺外に供献されたものが、木蓋、あるいは木棺の崩落にともなって内部に入り込んだのであろう。滑石製石鍋は、混入品の可能性も考えられるが、陶磁器などの破片を副葬する習慣もあり、検討を要する資料である。頭位は遺物が北側に集中することから北側であると判断した。

②出土遺物 (Fig.79 Pla.62・63)

土師器

坏a(1~3) 口径10.9~11.4cm、器高2.3~2.4cm、底径7.2~7.95cm。底部から体部への移行は境が明瞭で、底部から口縁部にかけて若干外反気味に立ち上がる形態を示す。底部の処理は

ヘラ切り後、板状圧痕をのこす。3は若干底径が他に比べ大きい。

滑石製品
石鍋

(4) 滑石製石鍋の底部下半の小破片である。小破片であるため全体の形状

は不明である。混入品であるか、破片供献であるのか不明である。

鉄製品

釘(5) 全長6.55cm。頭から2.2cm程度の部分で木目が直交することから棺材の厚さが窺える。

7ST340

①遺構 (Fig. 80 Pla. 40)

主軸をG.N-41° 10'-Eにとる墳墓で、北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分に等高線と並行するように構築された墳墓である。また墳墓の約半分を近世墓7ST091により切られている。

遺存する墓壕の平面形状は長方形を呈し、その規模は、長さ1.15m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。また断面形状から判断するに墳墓の上部は削平され遺存度はかなり悪い。そのため土層観察からの情報は得られなかった。

出土遺物は鉄釘が2点検出された。以上のことから、

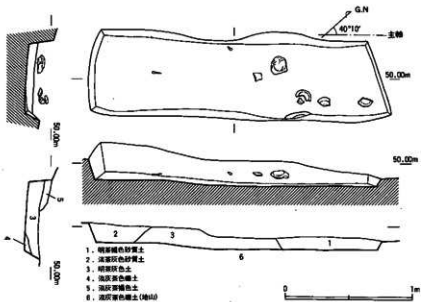


Fig.78 7ST305実測図(1/30)

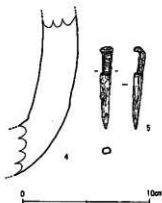
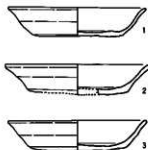


Fig.79 7ST305出土遺物実測図(1/3)

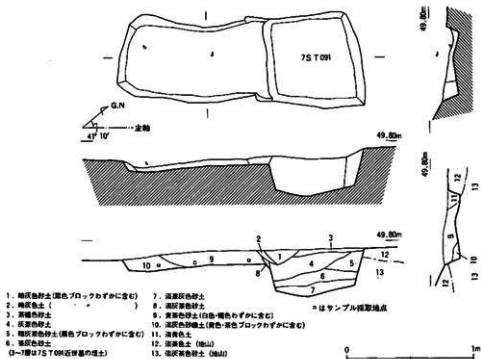


Fig.80 7ST340実測図 (1/30)

この墳墓が木棺墓、あるいは木蓋土墳墓であることが考えられる。

②出土遺物 (Fig. 81)

鉄製品

鉄釘 (1, 2) 基部幅0.7mm。頭部は「く」字形である。完形品はなく、いずれも欠損している。木質の付着は認められなかった。

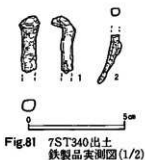


Fig.81 7ST340出土鉄製品実測図 (1/2)

(1) 木棺墓

7ST120

①遺構 (Fig.82 Pla.41)

主軸をG.N-22° 25'-Eにとり、13号墳東側斜面中位の緩斜面に、尾根の等高線に並行するように構築された木棺墓である。また遺構検出段階で平面観察によって木棺痕跡を確認できた遺構である。さらに墓墳の尾根側には溝が存在している。おそらくはこの墓墳を区画する溝が存在していたが、一部を残し削平されたものと考えられる。

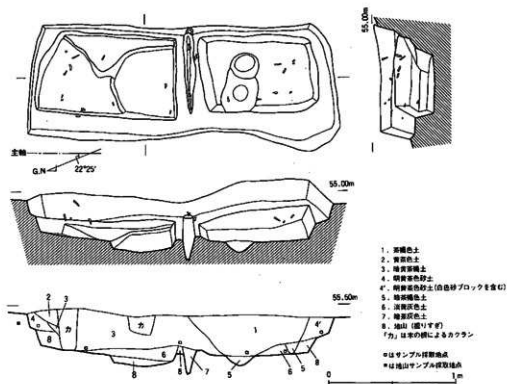


Fig.82 7ST120 実測図 (1/30)

墓壇は隅丸長方形を呈し、その規模は長さ2.4m、幅0.9mを測る。また内部は二段掘りされており、さらにその中心に下段墓壇を南北に区切るように溝状の遺構が存在している。下段墓壇の長さ2.2m、幅0.6m、遺構検出面から底部までの深さ0.3m、溝状遺構の長さ0.6m、溝状遺構検出面からの深さ0.2mである。

埋土は土層観察からも周囲に木棺の裏込めと考えられる層が存在するが、その内側で不整合な部分は見受けられなかったが、鉄釘や棺の裏込めの存在から木棺基と判断した。頭位については遺物の出土がなかったため不明である。

墓壇内から土器などの遺物の出土はなかったが、棺材に使用したであろう鉄釘を25本検出した。

②出土遺物 (Fig. 85)

鉄製品

鉄釘 (1~25) 完形品2点は、いずれも全長6.4cmであった。木質の残存部から棺材の厚みは2.5cm程度と推定できる。

7ST265

①遺構 (Fig. 86 Pla.42)



Fig.83 7ST120周溝検出状況



Fig.84 7ST120木棺痕跡状況

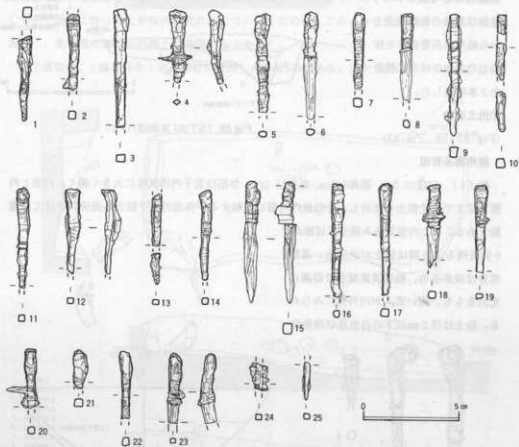


Fig.85 7ST120出土鉄釘実測図(1/2)

主軸をG.N-33° 40' -Eにとり、北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分と等高線に並行するように構築された木棺墓である。

墓壇の東側は隅丸方形を呈し、西側小口部分に楕円形の掘り込みをともっている。その規模は方形プランの長さ1.3m、楕円形プランの直径0.6m、方形プランの小口幅0.6mである。これらは土層観察の結果、同一遺構と考えられる。さらに土層図3層からは少量の炭を検出した。また土層図5層は棺の裏込めと考えられる。遺物は墓壇の最終埋没土から越州窯系青磁鉢を検出した。そのほかに鉄釘を2本検出した。

②出土遺物

(Fig. 87・88 Pla.63)

越州窯系青磁

鉢(1) 口径19.0cm、器高6.8cm、底径13.0cm。体部は若干内湾気味に大きく開く。内面と外面下位までは化粧土を使用し、その後内外面に施釉するが体部外面下位から底部にかけては露胎である。また内面見込み部分に目跡が6個所残る。色調は胎土が淡灰色、露胎部分は淡赤茶色、釉は淡黄緑色で器面に光沢をもち、細い貫入が内外面にみられる。胎土は径2mm以下の白色及び黑色砂

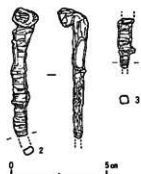


Fig.88 7ST265出土遺物実測図 (1/2)

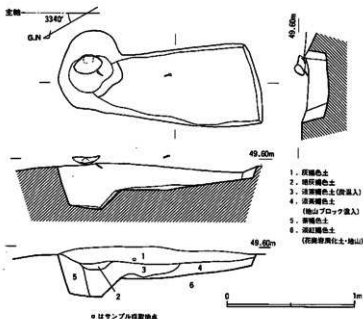


Fig.86 7ST265実測図 (1/30)

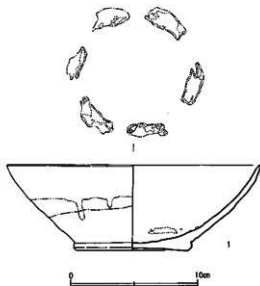


Fig.87 7ST265出土土器実測図 (1/3)

粒を多く含む。Ⅱ類。

鉄製品

釘(2・3) 木質が遺存するものでは、頭から2cm程度の部分で木目が直交することから棺材の厚さが窺える。

7ST270

①遺構 (Fig. 89 Pla. 43)

主軸をG.N-39° 30'-Eにとり、北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分に等高線に並行するように構築された木棺墓である。

墓壇は長方形を呈し、その規模は、長さ2.5m、幅1.0m、深さ0.5mを測る。また墓壇の南側小口部分にテラス状の施設が存在する。

埋土は自然堆積とは考えにくい不整合な堆積状況を示しており、おそらく木棺が徐々に崩壊していく過程に伴って土が棺内に流れ込んでいったために、このような堆積状況となったのであろう。また棺の裏込めの埋土は確認できなかった。

出土遺物は、土師器杯を5点と棺材に使用した鉄釘5本である。出土土器はすべて墓壇の西側

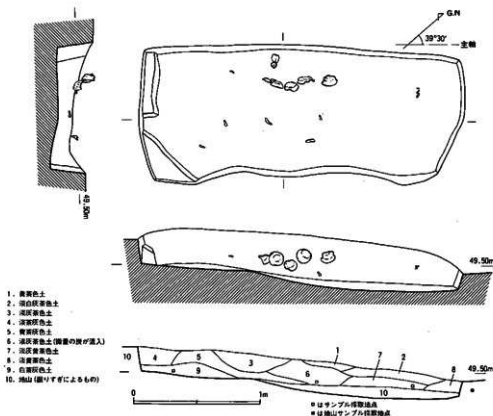


Fig.89 7ST270実測図(1/30)

から墓壙中央に向かって傾き、口縁部を墓壙内側に向けて出土した。以上のことから判断して、土器はすべて棺内の副葬品ではなく棺上の供献品と考えられ、本来、棺の西側面中央部に供献されていたものが、木棺崩壊とともに棺内に落ち込んだと考えられる。また墳墓の埋土中に須恵器の高坏片が混入していた。

②出土遺物 (Fig. 90-91 Pla. 63)

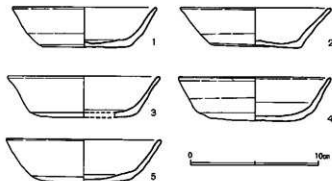


Fig.90 7ST270出土土器実測図(1/3)

土師器

坏a (1~5) 口径11.4~12.2cm、器高3.1~3.45cm。体部と底部の境が明瞭で直線的に立ち上がるもの(1・2)とやや鈍く屈曲しながら立ち上がるもの(3~5)とがある。底部の調整は全てヘラ切りで、2・3・5は板状圧痕がのこる。また1の体部外面に火を受けた様な痕跡が確認される。

鉄製品

鉄釘(6~10)長さは最も遺存のよいもので7cmである。すべて折れ曲がった状態で検出された。7~9は「コ」字状に折れ曲がり、6は「L」字状に折れ曲がる。また10は破片資料であるが、その形状から他と同様に折れ曲がるものと考えられる。このように折れ曲がった釘を検出した墳墓例に宮ノ本遺跡第2次調査6号墓¹⁷⁾がある。

7ST295

①遺構 (Fig. 92 Pla. 44・45)

主軸をG.N-40° 55'-Eにとり、北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分に等高線と並行するように構築された木棺墓である。

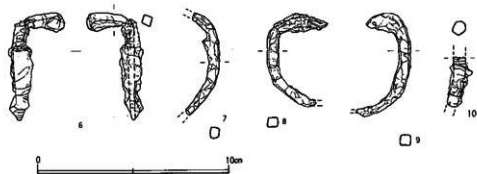


Fig.91 7ST270出土鉄釘実測図(1/2)

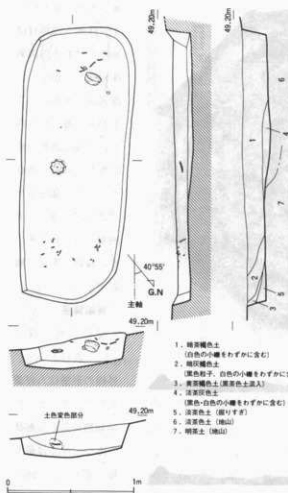


Fig.92 7ST295実測図(1/30)



Fig.93 7ST295鏡周辺土層観察

墓塚形状は隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ2.15m、北東小口幅0.75m、南西小口幅0.85m、検出面から深さ0.2mを測る。また断面形態から判断するに、墳墓の上部は多くを削平されているものと考えられる。

埋土は自然堆積状を示しているが墓塚の北東側の裏込めと考えられる層を確認している。また鉄釘を多く検出していることから木棺墓と考えた。

出土遺物は八稜鏡1面、鉄製紡錘車1点、土師器鉢1点、鉄釘22本である。鉄釘を除いたその他の遺物の出土状況は墓塚の西南側小口中央部より出土し、八稜鏡は鏡面を裏にして墓塚の中心から、土師器鉢は口縁部を小口部分に傾けて、いずれも墓塚の床面から浮いた形で検出した。おそらくこれらの遺物は棺上に供献された品で、それらが木棺崩落に伴い棺内に落ち込んだ状況が窺える。また鏡は漆塗りの小箱のようなものに入れられていたことが、鏡の周囲の土色に変色していること

と、漆の皮膜が鏡の裏面から確認されたことから推測できる。その他に黄白色の鉱物片(3mm程度のものであり、硫黄と思われるが成分分析していない為不明である。)を埋土中より検出している。頭位は遺物の出土状況から西南方向とした。

②出土遺物 (Fig.94~96 Pla.63)

土師器

鉢(1) 口径9.8cm、器高4.85cm、底径7.6cm。底部は平底を呈し、ヘラ切りの



Fig.94 7ST295出土八稜鏡実測図及び写真(1/1)

あるため、鋳型のずれからか文様が一部不鮮明である。文様構成は内区と外区に別れる。外区と内区の境には、圏線状のかい段をもつ。内区には一對の鳥文と花文をあしらい、外区は珠文によって草花文状のものが表現されている。また内区中央にある紐には綬が垂下して残存する。

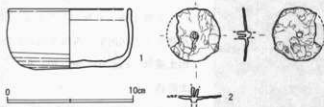


Fig.95 7ST295出土遺物実測図(1/3)

後、板状圧痕をのこす。体部への移行は緩やかで若干内湾気味に立ち上がり、口縁端部で垂直に立ち上がる。端部には内面には端部調整の際に生じた稜線が残存する。また体部下半には強めのヨコナデ調整が行われ、その際の稜線が明確に残存する。

青銅製品

瑞花双鳥八稜鏡(3) 直径9.5cm、外縁の形態は八弁菱花形を呈す。その断面形態は若干の起伏をもつ。厚さは最も厚い部分で3.7mm、薄い部分で1.8mmである。踏み返し鏡で

る。

鉄製品

釘(4-24) 完形品は一点のみで全長5.7cm。残りのものはすべて欠損する。木質の残存部分から判断して棺

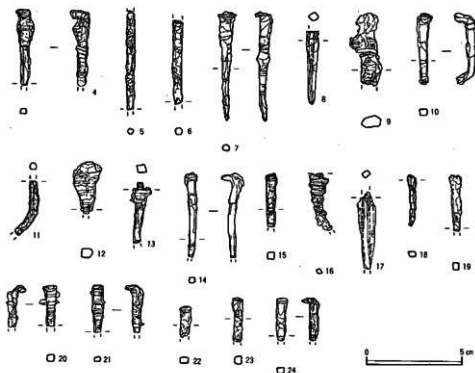


Fig.96 7ST295 出土鉄釘実測図(1/2)

材の厚さは2cm程度になるものと推測できる。

紡錘車(2) 鉄製の紡錘車で直径4.2cmを測る。形態は若干湾曲する。また中心に軸を差し込むための受部があり、表に7mm、裏に3mm突出する。表側の受部には十字形に軸を差し込む穴が存在するが、裏面まで貫通していない。受部の全長1.0cm、幅0.5mmである。

7ST300

①遺構 (Fig.97 Pla.46)

主軸をG.N-40° 55'-Eにとり、北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分に等高線に並行するように構築された木棺墓である。

墓坑形状は長方形を呈し、その規模は、長さ2.4m、幅1.1m、検出面から深さ0.4mを測る。また断面形態から判断するに墳墓の上部は多くを削平されているものと考えられる。

埋土は自然堆積を示しているが、鉄釘を多く検出していることから木棺墓と考えた。

出土遺物は方形鏡1面、鉄製品3点、黒色土器ミニチュア硯1点、不明木製品そして、鉄釘25本である。鉄釘を除いたその他の遺物の出土状況は墓坑の北側小口中央部の床面より、方形鏡と硯が出土し、鏡は鏡面を表にして、硯は鏡に隣接して正方位で検出された。また鏡を取り上げると、その下には漆の皮膜が残存し、その直下からすべて一箇所にまとまった形で鉄製品が

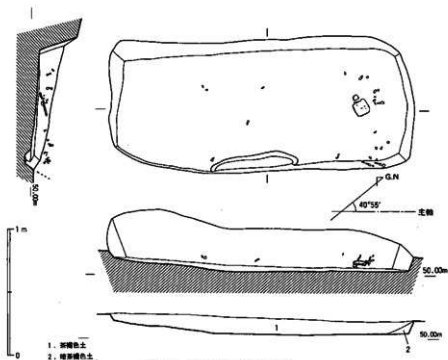


Fig.97 7ST300実測図 (1/30)

検出された。この鉄製品には検出段階での表側に木質が確認された。出土状況から木製品の一部が錆により保存されたものと考えたい。これらの遺物は、その構成や出土状況から、小箱のようなものに入れられた副葬品と考えられる。頭位は遺物の出土状況から北側とした。

②出土遺物 (Fig.98 Pla.64)

黒色土器

ミニチュア硯 (3) 長さ3.8cm、幅3.6cmの小型の硯である。実用品ではなく明らかに葬送に用いられた模造品である。色調は黒灰色で黒色土器の製作技法で作られたものと考えられる。実用品ではなく模造品を埋納するという行為は興味深い。

青銅製品

方形鏡 (2) 鏡は長軸10.8cm、短軸10.5cm。形状は隅丸の方形でその中心に非常に小さな紐が付く。その規模は直径約0.8mm、高さ約0.6mmである。色調は暗灰色を呈す。厚さは周辺部の最も厚い所で1.5mm、中央付近で0.8mmと非常に薄いつくりである。鏡背面に文様などはなく無文である。

鉄製品

毛抜き (1) 鉄製品3個体が錆により癒着していると考えられる。毛抜きは全長9.6cm、幅1.6cm。また毛抜きと重なりあって全長約6.5cmの製品が、さらにその側面に全長約4.9cmの製品

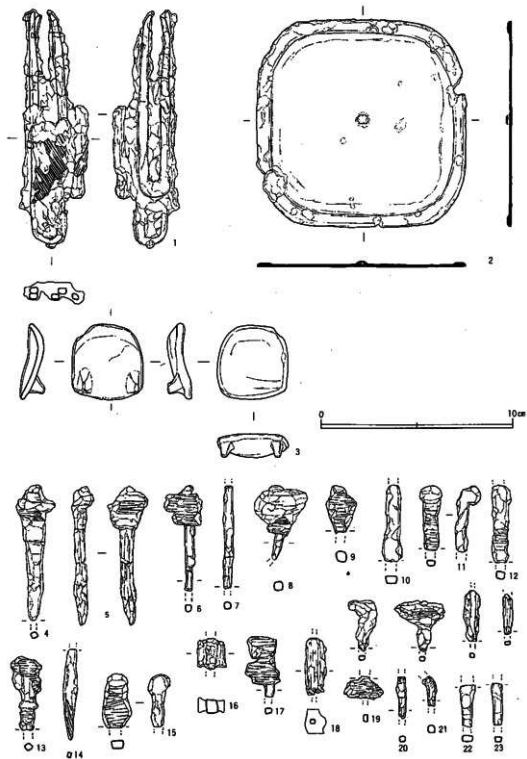


Fig. 98 7ST300出土物実測図(1/2)

が癒着している。毛抜き以外の製品については不明である。また毛抜きの錆にまかれるように何らかの木製品の木質が残存する。

釘(4~27) 完形品は1点のみで他はすべて欠損品である。全長は7.2cmである。また多くの資料に木質が残存している。木質は頭から2.2~2.6cm程度の部分で木目が直交することから棺材の厚さが窺える。

7ST310

①遺構 (Fig.99 Pla.47・48)

主軸をG.N-22°25'-Eにとる墳墓で、北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分に等高線と並行するように構築された木棺墓である。

この木棺墓は墓壇の中央部を近世墓によって掘削されているため、南北の小口部分が残るのみとなった。よって遺存する両小口部分からの推測となるが、墓壇の形状は長方形を呈し、その規模は、長さ2.0m、南側小口幅0.7m、北側小口幅0.8m、深さ0.3mを測る。また断面形態から判断するに墳墓の上部は多くを削平されているものと考えられる。

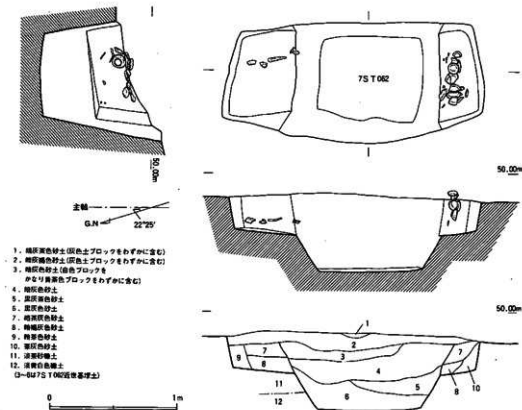


Fig.99 7ST310 実測図 (1/30)

棺の形態は遺存部分が少ないため不明な部分も多々あるが、小口部分を観ると木棺の裏込めと考えられる層（9・10層）が存在し、また墓壙内より鉄釘が出土していることから木棺墓と考えるのが妥当であろう。

出土遺物は土師器坏aを7点と碗c1点、そして鉄製刀子1点、鉄釘8点である。土器の多くは棺の南側小口付近から検出された。これらは完形品が多いものの墓壙埋土の中位に位置し、口縁部を墓壙の内側に向けるなど、棺外から堆積土とともに流れ込んだ状況を示しているため、恐らくは棺上の供献品が木棺の崩落と伴に入り込んだのであろう。また一部近世墓最終埋没土に遺物が含まれるが、これらは近世墓が埋没した際に周辺の堆積土も含み込んで崩落したため起こった現象と推測する。

頭位は遺物が西側に集中することから西側と判断した。

②出土遺物 (Fig.100・101 Pla.310)

土師器

坏a（1～7）口径10.6～11.4cm、器高1.8～2.4cm、底径6.6～7.6cm。底部から体部への移行が明確なもの（2～5）と境が不明瞭で器高に対し口径がやや大きいもの（1・6）がある。調整は外面は明確であるが内面は不明瞭なもの（1・2・4・6）が存在する。これらは日常的に使用したために磨滅したことが可能性として考えられる。

碗c（8）口径12.1cm、器高4.6cm、底径6.9cm。器形は底部より若干外方に開き気味に立ち上がり、口縁端部をわずかに外方へ傾み端部を丸くおさめる。高台の形状は短く直立気味で、端部が若干内傾するものを貼りつける。高台接合位置は底部から体部への移行の屈曲部より高台接合位置及び高台接合のためのヨコナデ調整部分が内側に存在する。そのため体部と底部の境の後縁が体部下位に残存する。底部は粗くナデを施した後、板状圧痕がのこる。色調は内外面ともに淡灰色を呈す。胎土は、径1mm程度の白色粒子をわずかに含む精製された土を使用する。また外面の調整に比べ内面の調整は不明瞭であるため日常的に使用した可能性が考えられる。

鉄製品

釘（9～17）完形品を4点含む。大半に木質が残存す

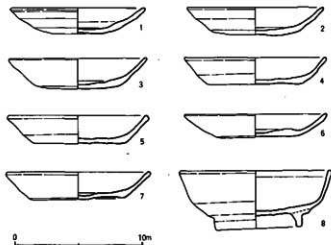


Fig.100 7ST310出土土器実測図 (1/3)

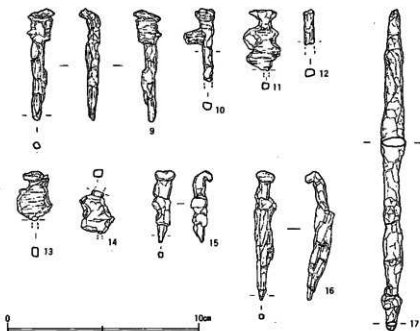


Fig.101 7ST310出土遺物実測図(1/2)

る。釘の頭から2cm程度の部分で木目が直交するため棺材の厚さが推測できる。

刀子(18) 全長16.9cm、厚さ1.3cm、幅0.6cm。全体が錆で覆われているが、断面形状から刀子と判断される。背部分は直線的で刃部分は若干傾きながら先端で大きく湾曲する。完成品と考えられるが、木質などは確認できなかった。

7ST330

①遺構 (Fig.102 Pla.49・50)

棺の主軸をG.N-8° 10'-Eにとる墳墓で両尾根の間に広がる斜面の調査区南東隅に等高線に並行するように構築された墳墓である。

墓域は隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ2.3m、北側小口幅0.9m、南側小口幅0.85m、深さ0.45mを測る。

棺の形態は土層観察からは自然堆積であるとは考えにくい不整合性を示しており、おそらく木棺の崩落ともない徐々に棺内に流れ込んだ土の堆積と考えられる。

出土遺物は土師器坏を1点と棺材に使用した鉄釘39点である。坏は口縁部を下に向けた状態で墓域内の堆積土中から検出した。出土状況から棺上に供献されたものが木棺崩落ともない棺内に落ち込んだのであろう。また鉄釘の出土状況から木棺の規模を推定すると、長さ約1.6m、幅約0.4mの大きさが推定できる。

②出土遺物 (Fig.103・104 Pla.65)

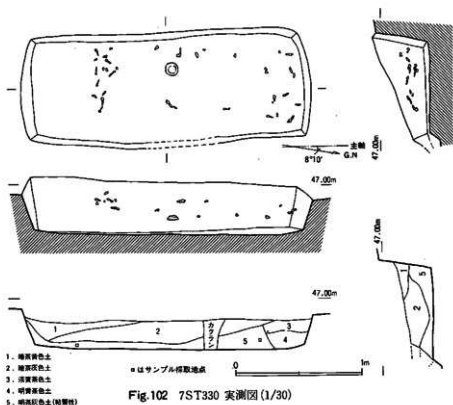


Fig.102 7ST330 実測図(1/30)

土師器

坏a(1) 最大口径11.2cm、最小口径10.5cm、器高3.5cm、底径7.3cm。口縁部に歪みがあり楕円形を呈す。体部は若干外反しながら外方に立ち上がり、体部上位で大きく内側に折り返す。体部内外面にはこの際にてきた稜線が明確に残る。全体に非常に粗い作りで、内面見込み部分は粗くナデを行っているが隆起が激しい。胎土についても経3mm以下の砂粒を多量に含む粗い土を使用する。

鉄製品

釘(3~41) 非常に多くの釘を検出したが、そのうち完形品は10点で、残りは欠損品である。大半に木質が残存する。釘の頭から2cm程度の部分で木目が直交するため棺材の厚さが推測できる。釘の頭部分だけで25本を検出しているため、少なくともこれだけの釘を棺材に使用していることが考えられる。

7ST345

①遺構 (Fig.105 Pla.51)

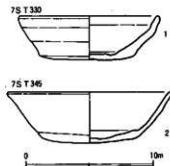


Fig.103 7ST330・345出土土器実測図(1/3)

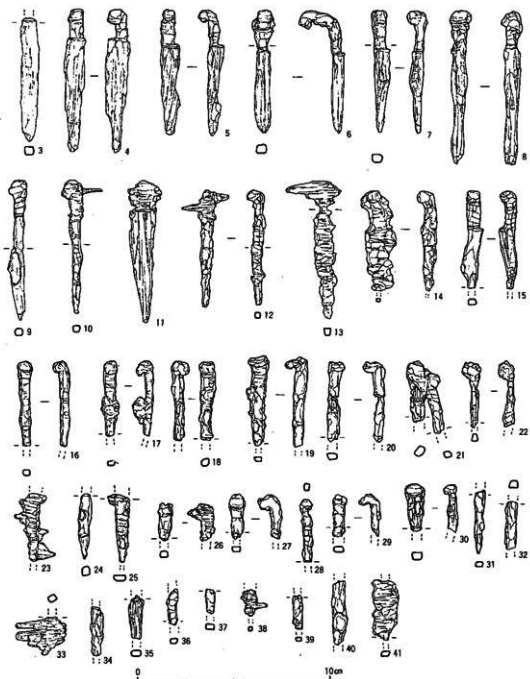


Fig.104 7 ST330出土鉄釘実測図 (1/2)

棺の主軸をG.N-15° 15'-Eにとる墳墓で、14号墳西側の斜面に等高線と並行するように構築された墳墓である。

墓塚の平面形状は長方形を呈し、その規模は、長さ2.1m、幅0.8m、深さは最も遺存のよい西側で0.7m、東側で0.15mを測る。また断面形状から判断するに墳墓の上部は斜面に沿って削平されているため、西側に比べ東側は大半を削平されている。

埋土は自然堆積とは考えられない不整合な堆積状況を示しており、また土層図5.6.7層は木棺の衰込めにあたると考えられる。また、墓塚内の堆積も木棺の崩落に伴う堆積とすれば、この墳墓は木棺墓と推定できる。鉄釘等は検出していないため、おそらく木釘を使用したと考えられる。固化出来なかったが遺構掘り下げ段階で土師器坏aが1点出土している。頭位は不明である。

②出土遺物 (Fig. 103 Pla. 65)

土師器

坏a (2) 口径13.1cm、器高4.1cm、底径7.8cm。底部から体部へは緩やかに移行し、体部は直線的に外方へ立ち上がるが体部上位から若干外反する。内外面ともに表面が剥離しており調整

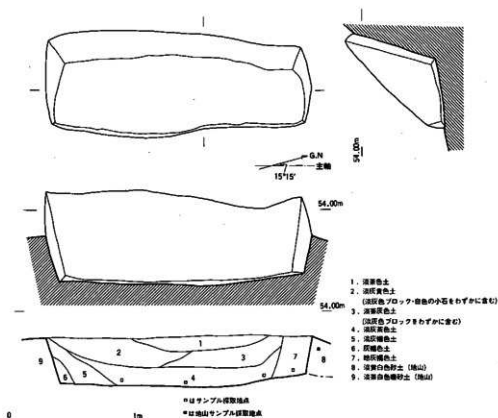


Fig.105 7ST345実測図 (1/30)

は不明瞭である。底部外面に板状圧痕をのこす。

(12) 掘立柱建物

7SB290

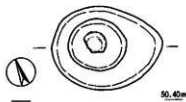


Fig.106 7SB290d 実測図 (1/20)



Fig.107 7SB290 出土土器実測図

Fig.107 7SB290 出土土器実測図 坏a(1) 口径13.4cm、器高3.6cm、底径7.8cm。器形は底部から体部へ緩やかに移行し、体部は外方に開き上位で外反する。その際の稜線が体部内外面にのこる。

7SB355

①遺構 (Fig.108 Pla.53)

7SB290の北東側に位置し、7SB290と方向軸を同じくするように構築された3間×2間の掘立柱建物で、柱間2.7×1.9mを測る。南北方向軸はG.N.-58°15'-Eであり、柱穴のうち7SB355iと7SB355jを7ST305に切られ。また7ST270は7SB355の内部に構築されているため墳墓構築の時期が掘立柱建物と前後すると考えられる。柱間は南北方向の間が中央間隔がやや短く約0.9mで、その両側は1.1mである。また東西間は約0.9~1.1mである。柱穴はいずれも円形で、直径20~30cmである。7SB290a・cと7SB355d・jの距離は約1.8~2.0mである。

(13) 近世墓

7ST019

①遺構

7ST310を切る形で検出した近世墓である。長さ1.25m、幅0.95m、深さ0.6mを測り、隅丸長

①遺構 (Fig.106・108 Pla.52)

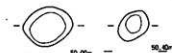
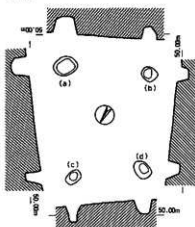
北東尾根東側の裾部に広がる緩やかなテラス部分に構築された1間×1間の掘立柱建物で、柱間2.7×1.9mを測り7SB355と並行し方向軸を同じくする。南北方向軸はG.N.-58°40'-Eである。また柱穴の一つを7ST295により切られる。柱間は南北が約1.2m、東西間が約1.5mを測るが、柱穴aがやや張り出す。柱穴はいずれも円形で直径25~40cmであり、その断面形状は土層観察から、いくつかの柱穴には柱根抜き取り痕跡と考えられる層を確認した。また柱穴aには埋土中より多量の炭を検出、7SB290dからは柱抜き取り後、柱痕の埋土中に土師器の坏を1枚埋置している。

②出土遺物 (Fig.107 Pla.65)

土師器

坏a(1) 口径13.4cm、器高3.6cm、底径7.8cm。器形は

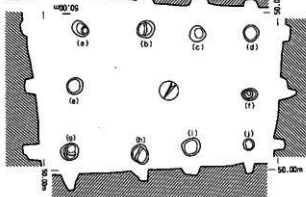
75B290



- | | |
|------------|----------|
| (a) | (b) |
| 1. 暗黄褐色土 | 1. 黄灰色土 |
| 2. 暗黄灰色土 | 2. 淡灰黄色土 |
| 3. 暗黄褐色土 | 3. 淡灰黄色土 |
| 4. 暗灰黄色土 | 4. 淡黄色土 |
| 5. 暗可字土 | 5. 淡黄色土 |
| 6. 明黄褐色土 | 6. 黄褐色土 |
| 7. 明黄褐色土 | |
| (c) | (d) |
| 1. 黄褐色粘质土 | 1. 暗黄色土 |
| 2. 暗黄褐色土 | 2. 黄褐色土 |
| 3. 黄褐色土 | 3. 淡黄褐色土 |
| 4. 黄灰色粘质土 | 4. 黄灰色土 |
| 5. 淡黄褐色粘质土 | 5. 黄褐色土 |

0 2m (1/120)

75B355



- | | | |
|----------|------------|------------|
| (a) | (b) | (c) |
| 1. 淡黄白色土 | 1. 明黄褐色土 | 1. 淡黄褐色粘质土 |
| 2. 暗黄褐色土 | 2. 暗黄褐色粘质土 | 2. 暗黄褐色粘质土 |
| 3. 暗黄色土 | 3. 淡黄褐色土 | 3. 暗黄色土 |
| | 4. 黄褐色土 | 4. 淡黄色土 |
| | 5. 白灰色土 | 5. 白灰色土 |

- | | | |
|------------|------------|------------|
| (d) | (e) | (f) |
| 1. 暗黄褐色粘质土 | 1. 淡灰黄色粘质土 | 1. 淡黄褐色粘质土 |
| 2. 暗灰黄色粘质土 | 2. 暗黄褐色粘质土 | 2. 淡黄褐色粘质土 |
| 3. 暗黄色土 | 3. 黄褐色土 | 3. 淡黄褐色土 |
| 4. 白灰色粘质土 | 4. 淡黄色粘质土 | |
| | 5. 黄褐色粘质土 | |
| | 6. 白灰色土 | |

- | | | |
|------------|----------|------------|
| (g) | (h) | (i) |
| 1. 淡黄褐色粘质土 | 1. 淡黄褐色土 | 1. 白灰色土 |
| 2. 淡黄色粘质土 | 2. 淡灰黄色土 | 2. 明黄褐色粘质土 |
| 3. 淡黄褐色粘质土 | 3. 明黄褐色土 | 3. 暗黄褐色粘质土 |
| 4. 黄褐色粘质土 | 4. 白灰色土 | 4. 白灰色土 |
| 5. 淡灰黄色粘质土 | | |
| 6. 白灰色土 | | |

- | |
|------------|
| (j) |
| 1. 暗黄褐色粘质土 |
| 2. 淡黄褐色土 |
| 3. 暗黄褐色粘质土 |
| 4. 白灰色土 |

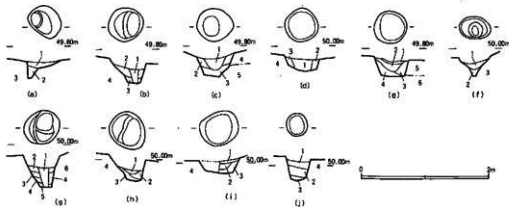


Fig.108 75B290·355 夹测图

方形を呈す。棺内より遺物などの出土はなかった。

7ST091

①遺構

7ST340を南西側で切る形で検出した近世墓である。長さ7.0m、深さ0.3mを測り、方形を呈す。棺内より遺物などの出土はなかった。

7ST200

①遺構 (Pla.54)

13号墳と14号墳の間の南東尾根線上に位置する近世墓である。長さ1.6m、幅1.0m、深さ1.0mを測り、隅丸長方形を呈す。棺内より副葬品と考えられる近世土師器皿を一点検出した。

7ST235

①遺構

14号墳と15号墳の間の尾根線上に位置し、7ST165・255を切る形で検出した近世墓である。平面形状は隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ1.45m、幅1.0m、深さ0.8mを測る。また棺内より副葬品と考えられる近世土師器杯を1点(Pla.65-a)検出、その他に鉄釘61本、木鐸(Pla.66-6)、寛永通宝5点(Pla.66-1~5)を検出した。鉄釘を検出したことから本棺墓であったと考えられる。また埋土中より人骨をわずかながら検出した。

(14) その他の遺構と遺物

7SK325

①遺構 (Fig.110 Pla.54)

主軸をG.N-87°-Wにとる土壌で両尾根の間に広がる斜面に位置し、等高線に直交するように構築される。

遺構の平面形状は隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ2.1m、西側小口幅1.1m、東側小口幅1.0m、深さ0.5mを測る。

遺構の埋土は土層観察からは自然堆積であるとは考えにくく、木棺、あるいは木蓋土壟墓の可能性も考えられる。棺内の堆積土を除去する過程で遺物の出土はなかった。

7SK335

①遺構 (Fig.110 Pla.54)

主軸をG.N-0°にとる土壌で両尾根の間に広がる斜面の調査区北東隅に等高線に並行するように構築される。

遺構の平面形状は隅丸長方形を呈し、その規模は、長さ1.85m、西側小口幅0.7m、南側小口幅0.9m、深さ0.15mを測る。墳墓の可能性も考えられるが遺構の遺存度も悪く、遺物、土層観察からも墳墓であるという確信は得られなかったため土壌とした。また遺構の埋土は淡茶色土

の単一層である。埋土中から遺物の出土はなかった。

7SX180

①遺構

(Fig.110 Pla.180)

14号墳と15号墳との間の南東尾根の南側斜面に位置する不定形の溜まり状遺構である。遺構として扱ったが、自然作用によってできた溜まりである可能性が高い。黒色土器の小型壺、砥石、鉄製刀子などが出土した。

②出土遺物

(Fig.109 Pla.65)

黒色土器

壺(3) 口径3.8cm、器高5.7cm、底径4.6cm、胴部最大径6.0cm。ミニチュアの壺である。器形は、体部は外方に若干開き気味に立ち上がり、胴部最大径が肩部分にくる。肩部から頸部にかけて大きく内傾し、さらに口縁部から外反する。外面と口縁部内面にミガキcを施す。

鉄製品

刀子(2) 前後を欠損する。残存全長12.8cm、幅2.5cm。全体を銅が覆うが、握り部分に木質が残存する。

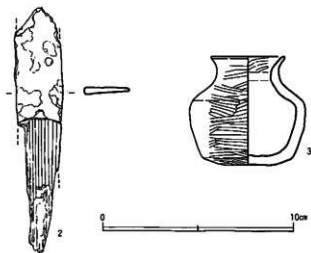
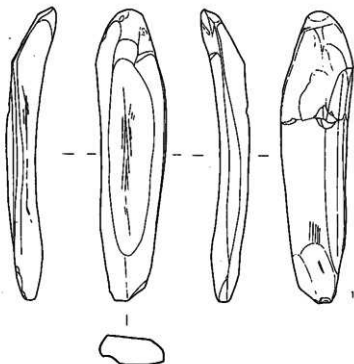


Fig.109 7SX180出土遺物実測図(1/2)

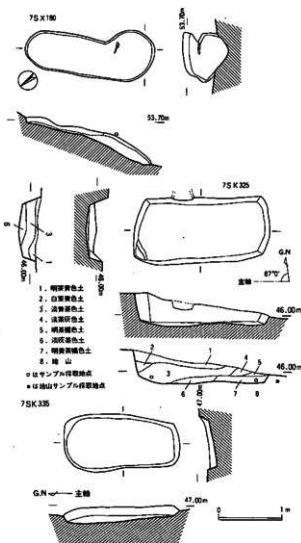


Fig.110 75X180・75K325・335実測図(1/60)

(Fig.111・112 Pla.66~68)

石器

砥石(1~3) 1・2は13号墳黄茶色土からの出土で、すべて砂岩製の砥石である。1は長軸19cm、幅15cm、厚さ5cm。長方形を呈す。両面を使用する。側面に使用の痕跡は認められない。2は長軸15mm、幅13cm、厚さ5cm。長方形を呈す。両面ともに使用されているが、側面は使用されていない。3は表土中からの出土である。全長15.5cm、幅4cm、厚さ3cm。二面を使用している。欠損品ではないと思われる。

磨製石斧(4) 先端部のみの小破片で安山岩製の磨製石斧である。表土中からの出土である。

石製品

砥石(1) 全長15.25cm、最大幅3.5cm、厚さ1.5cm。全面を使用する。また体部に溝状をなす部分があるが、その部分も研磨のために使用されている。

75X043

①遺構 (Fig.113)

14号墳と15号墳の間の南東尾根上に存在する巨大な石で、この石はおそらく何れか時代に人々の手によってか運び揚げられたことが推測できる。しかし造成により本来存在していた場所より尾根の窪地に移された模様である。この石の持つ役割は、おそらく14号墳と15号墳の間の尾根線上に位置する墳墓群の標石的役割であったと考えられる。石の存在する窪地内の遺物として埋土中より近世陶器片、土師器坏a片などを検出した。

(15) その他の遺物

①出土遺物

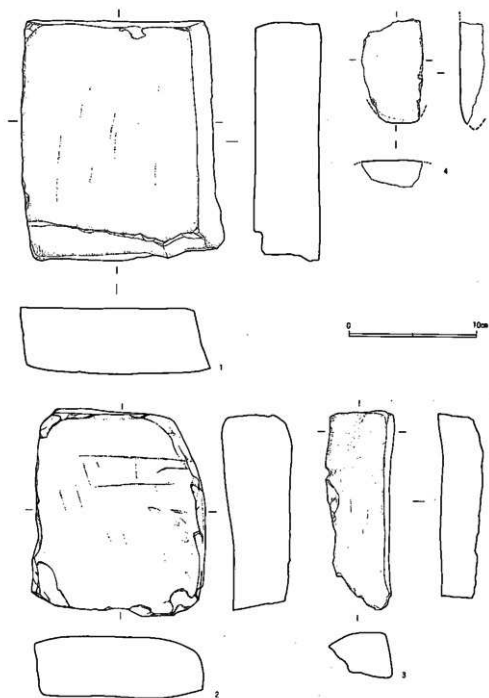


Fig.111 表土・その他出土石器実測図 その1 (1/3)

磨製打具 (5) 全長18.8cm、幅6.8cm。砂岩製の打具である。両先端部に使用の痕跡が認められる。表土中からの出土である。両先端部ともに使用による剥離面が存在しているが、欠損

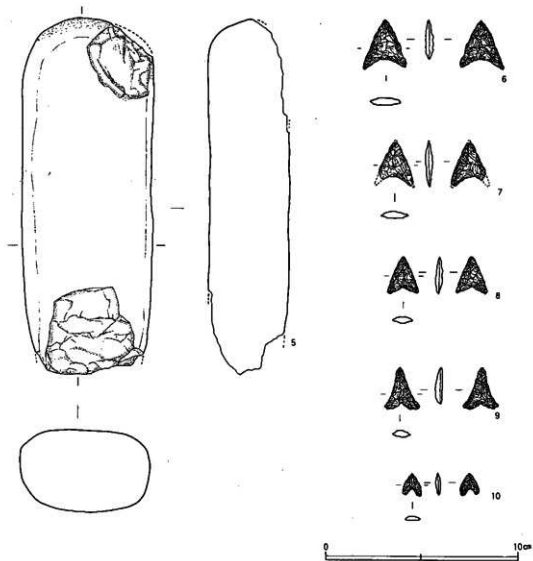


Fig.112 表土他出土石器実測図その2 (1/2)

後も使用されていたことが剥離面にも使用痕跡が残存することからわかる。また表土中より同一の石材製品の剥片が2点検出されたが、この打具との接合関係は見出せなかった。そのためこの場所で同様の製品を使用して作業を行った可能性が考えられる。

打製石鏃（6～10） 黒曜石製のもの3・6と古銅輝石安山岩製のものの二種類がある。すべてのものがえぐりが深く透れる。先端部から側面にかけて直線的に開くもの（1～3）と外反気味のもの、（4）内湾気味のもの（5）の三種類に分類される。

その他（表採など）

その他に近世墓に関係すると思われる遺物として図示はしていないが以下のようなものを表土から採取している。

近世墓周辺から多数の陶器などを採集している。また、その他に近世墓のものと思われる墓石を採集した。これらの中に銘の入った墓石が存在しており、次のような銘文を読みとることができた。「寛政元年酉年 釈妙意信女 十二月十四日」「文化九年 釈道喜信士 中四月廿一日」「釈圓山信士 八月廿四日」。寛政元年は1789年。文化九年は1812年である。

墓石はこれらの他にも多数存在し、その中には最も新しいものでは昭和のものまでが存在していた。

また14号墳墳頂部には、御神体はすでに他所に移されていたがセメント製の祠が存在していた。この祠の周辺部の表土から、「南無阿弥陀佛」と墨書された拳大程度の川原石を多数採取している。この遺物の年代については不明であるが、おそらくは近現代のものであろう。



Fig.113 7SX043検出状況

IV. 小 結

古墳

以下、各古墳の造営時期について述べる。年代観は柳田（1982）・（1991）による。

13号墳

墳丘裾部から出土した土師器甕は、Ⅱb期（布留式古段階併行期）にあたり、絶対年代は4世紀前半と考えられている。また、主体部掘り方をⅡb期土器棺が壊していることから古墳の造営時期がⅡb期であることがわかる。この古墳の埋葬主体は、吉留氏の言う小型の方墳に採用される割竹形木棺に位置づけられる³¹。

14号墳

埋葬主体は2基検出されたが一部掘り方を重複し、ほぼ平行に埋葬されている。出土した遺物は鉄製刀子、鉄斧、平根系鉄鏃、ならびに外来系複合口縁壺、坏、高坏、器台、鉢である。これらの遺物の時期はⅡc期（布留式中段階～新段階併行期）にあたり³²、絶対年代は4世紀中頃と考えられている。

15号墳

このような構築例は近くに筑紫野市剣塚古墳³³が挙げられるが、遺物が出土していないため、時期は確定できない。

16号墳

地山削り出しと盛土による墳丘をもつ古墳で15号墳に重複する。遺物が出土していないため時期は確定できない。

墳丘下層遺構

7ST360・365・370

いずれも15号墳墳丘の下層から検出されたものであるが、個々の遺構から遺物の出土がないこと、15号墳自体の時期も確定できていないため、これらの遺構の時期を確定することはできなかった。

土器棺墓

7ST115

棺本体に使用されている複合口縁壺は、肩部が張っていること、また複合口縁壺を使用する土器棺がⅡb期（柳田1982のⅡa期に相当）に出現することを踏まえると、この遺構の時期はⅡb期（布留式古段階併行期）に構築されたと推定できる。絶対年代は4世紀前半と考えられている。

また、この土器棺墓（7ST115）は宮ノ本6号墳³⁴や立野遺跡³⁵などの状況から、宮ノ本遺跡7-1次調査出土の7ST100³⁶同じように、古墳の埋葬主体と考えられる³⁷。

宮ノ本遺跡6号墳は同古墳群で唯一、泥板岩製の一枚石を使用した箱式石棺を埋葬主体にもつ方墳である。墓墳の掘り方は2時期確認され、新規の掘り方は旧期に設定した石棺の中心に掘り込み、蓋石の若干下の面に達した段階で終わっている。この石棺には2体の人骨が残存し、上下に重なって検出された。これらのことから、2時期の掘り込みは追葬に関連するものと考えられる。さらに、人骨の出土状況から最初に埋葬された遺体がまだ完全に白骨化する以前に追葬が行われた可能性が高い。この事象は、この場所に古墳があることを知っている集団が行ったということを示していると考えられる。また、立野遺跡では埋葬主体に箱式石棺を使用する方形周溝墓は11基検出された。複数の埋葬主体をもつ2基のうち、重複関係がある10号墳の第1主体が台状部の中心に造られていないということから、第2主体が構築されることを予定されていたと考えられる。周溝も隣接する墳墓の周溝と平行に造られ、さらに一部で共有するなどしている。これらのことは墳墓群が計画的に構築されたことを示していると考えられる。

以上のことから、これらの古墳群の形成は造墓活動を行う同一の集団（特定集団）が行ったと推測され、土器棺を埋葬した集団と同一集団の首長、あるいは有力者の棺を壊して造墓活動をするということは想定し難いこと、さらに墓墳を重複して墳墓を構築する方法が弥生時代の墳墓群のなかに認められることから、これらの土器棺を古墳の埋葬主体の一つと考えたい。

7ST042

出土した供獻土器は脚付碗、赤色顔料をいれた甕、鉢であり、在地系の土器が大半を占めている。脚付碗は筑紫野市日境遺跡1号住居跡出土遺物に類似が認められ、伴発遺物から時期はⅡa期（布留式最古段階併行期）に比定されている¹⁹。このことから、7ST042土器棺墓の時期はⅡa期（布留式最古段階併行期）にあたり、絶対年代は3世紀末と考えられる。

7ST165

棺に使用された甕の底部は尖り底を呈し、刻み目のない突帯を貼付している。さらに胴部外面にタタキの痕跡を残していることから、7ST165の時期はⅡb期（布留式古段階併行期）にあたる。絶対年代は4世紀前半と考えられる。

7SX170

主体部の形状は不明ながら、検出された甕は頸部下位に幅広の刻み目突帯を貼付する。7SX170の時期はこの甕よりⅡa～Ⅱb期に該当すると思われる。これは布留式最古段階～古段階併行期にあたり、絶対年代は3世紀末～4世紀前半と考えられる。

7ST255

棺に使用された甕の底部は尖り底を呈し、幅広の刻み目突帯を貼付している。さらに胴部外面にタタキの痕跡を残している。供獻された長頸甕は胴部最大径よりやや下位に刻み目突帯を貼付する。この遺構の時期はこれらの出土土器よりⅡa期（布留式最古段階併行期）に該当すると思われる。Ⅱa期は絶対年代3世紀末と考えられている。

木棺墓

7ST185

時期は遺物が出土していないため確定できないがⅡc期の範囲で考えている。

7ST205

時期は遺物が出土していないため確定できない。

7ST245

頭位を西向きにとる木棺墓である。棺底には赤色顔料が塗布されている。出土遺物は鉄斧と外来系の小型丸底甕、御付鉢および在地系の長頸壺、高台付椀であり、すべて棺外の供獻品と考えられる。この遺構の時期はⅡa期（布留式最古段階併行期）にあたり、絶対年代は3世紀末と考える。ここで注目されるのは高台付椀である。出土状況から混入品とは考えがたい。畿内系の暗文土器と比較した場合、この高台付椀は施文原体が小刀ではなく、磨きを施す原体を使用し、暗文の施し方も正放射ではなく、斜放射である。また、器形と調整の組み合わせも飛鳥の編年観では考えられないという¹³⁾。また、甘木市立野遺跡16号方形周溝基出土遺物中に類例が認められる。器形は類似しているが底部穿孔を行っているため高台の有無は不明瞭ではある。以上のことから、この椀も墳墓に伴う遺物と判断した¹⁴⁾。供獻土器よりこの遺構の時期はⅡa期（布留式最古段階併行期）にあたり、絶対年代は3世紀末と考える。

木蓋土墳墓

7ST210

鉄製刀子を供獻するが、時期は出土土器がなく確定できない。

箱式石棺墓

7ST225

出土した遺物よりこの遺構の時期はⅡa期（布留式最古段階併行期）にあたり、絶対年代は3世紀末と考えられる。

7ST260

遺物は棺外から外来系の甕、棺内からはガラス玉が出土した。7ST260の時期は出土土器と墳墓の重複関係からⅡa期・布留式最古段階期にあたり、絶対年代は3世紀末と考えられる。また、この墳墓は他の墳墓と隣接して造られているが、掘り方が重複するのみで棺には及んでいない。このような墓制は佐賀県二塚山遺跡29号土墳墓¹⁵⁾に類例が認められることから弥生時代から存在する墓制として考えられる。この土墳墓には板石を立て側壁を造っている方に熟年男性の頭蓋骨が残存し、板石と蓋石の目張り粘土内から鏡片が出土している。この例から考えると7ST260の頭位は南向きといえる。

7ST285

重複して造られた墳墓群の中で切り合い関係上、最も古いものである。出土遺物は外来系の

小型丸底壺と弥生時代からの技法を受け継いだ平根系鉄壺¹¹⁾、そして鉄製鎌である。これらはすべて棺外の供献品と考えられる。

この遺構の時期は出土遺物よりⅡa期・布留式最古段階併行期にあたり、絶対年代は3世紀末と考えられる。

石蓋土墳墓

7ST135

時期は出土土器がなく確定できない。

7ST190

時期は出土土器がなく確定できない。

7ST275

この遺構の時期は出土遺物よりⅡa期（布留式最古段階併行期）にあたり、絶対年代は3世紀末と考えられている。

赤色顔料埋納土壺

7SK150

赤色顔料埋納土壺と考えられ、この土壺の上層遺構7SK145土壺から外来系の小型丸底壺が出土している。この遺構の時期はⅡb期（布留式古段階併行期）にあたり、絶対年代は4世紀前半と考えられている。7ST150は切り合い関係上「古」にあたり、4世紀前半以前と考えられる。

古墳時代の埋葬形態について

この宮ノ本丘陵には短期間で造墓活動が行われ、古墳をはじめとして、さまざまな埋葬施設が構築された。このことは古墳時代前期における北部九州の特徴をそのまま現していると考えられる。宮ノ本遺跡第7-1次調査と7-2次調査の調査結果から、古墳群が造営されるのとはほぼ同じ時期に、その隣接地にさまざまな埋葬形態の墳墓群も構築されていることが解明された。この墳墓群は立地や頭位そして供献形態などの点から分類ができると判断した。このことについて以下に述べる。

タイプ1

タイプ1と考えられるのが7ST100¹²⁾と7ST115土器棺墓である。これらは先述したように古墳の主体部と考えられる一群である。両者ともⅡa期（布留式最古段階併行期）にあたり、12号墳¹³⁾および13号墳の造営時期を示す。

タイプ2

次にタイプ2として位置付けしたものが古墳の裾部に造られた墳墓群である。7ST010土器棺墓¹⁴⁾、7ST135石蓋土壺墓、7ST210木蓋土壺墓、7ST360箱式石棺墓、7ST365・370石蓋土壺墓などがこれにあたる。特に7ST360箱式石棺墓、7ST365・370石蓋土壺墓（15号墳下層遺構）は16号

墳の裾部に造られた墳墓群と考えられる。これらは古墳の主体部の主軸にはほぼ平行または直行して造られている。これらの遺構群の供献品は、わずかに鉄製品を埋納する墳墓が一部にある程度である。しかし墓壕の規模が他の墳墓に比べ大きく、粘土を使用し棺を丁寧に埋置している墳墓が多い。時期は古墳よりやや遅れて造られている状況が窺える。

タイプ3

最後にタイプ3として位置付けしたものが、7ST255箱式石棺墓や7ST245木棺墓などの群集して造られた一群である。これらは14号墳周溝に壊されている7ST205木棺墓を除いて時期差はないもののいくつかの墳墓の掘り方とわずかに重複して構築されており、意図的に墓壕を重複させている可能性が高い。これらには棺外に供献品が埋置され、尾根筋に直行して造られた墳墓の頭位はすべて西向きをとる。

以上のことからⅡa期(布留式最古段階併行期)には古墳(タイプ1)と墳墓(タイプ3)が存在し、その出土品の優位性と墳丘規模から古墳に埋葬された被葬者と群集して造られる墳墓群の被葬者との格差は明確である。また、古墳群に供献された土器群がすべて外来系のものであるのに対して、墳墓群に供献された土器群には外来系のもので大半を占めるものの、その中に在地系ものが含まれているという供献形態の差異も認められた¹³⁾。これは、階層差によって埋葬形態が異なり、それが供献形態にまでも規制が及んでいることを示していると考えられる。宮田浩之氏は福岡県小郡市と筑紫野市の市境付近の古墳と墳墓を検討し、階層序列と出土遺物の比較を行った¹⁴⁾。埋葬形態によって階層差が示され、それが供献遺物の組成にも及んでいるというもので今回の調査所見と合致するものである。さらに宮ノ本遺跡の場合、古墳をはじめとするこれらの墳墓群は同一集団が構築したのものであると考えられ、集団内にも宮田氏が示す階層差による規制が及んでいることを示す例と言える。残された問題としては、タイプ2の位置付けであるが、古墳の被葬者との関係がタイプ3の被葬者より強いと考えられる一方で古墳の周溝や墳丘自体の下層に埋まってしまうものもあり、今後の検討が必要と考える。

奈良・平安時代の墳墓

以下、各墳墓の造営時期について述べる。年代観は山本(1990)による。

土墳墓

7ST315

時期は棺内の供献品須恵器環cより8世紀前半と考えられる。

7ST305

棺上の供献土器よりⅧ期と考えられる。

7ST340

遺物は鉄釘のみで時期は確定できないが、9世紀後半を前後する時期に考えておく。

木棺墓

7ST120

宮ノ本9号墓¹³⁾と同じように、多量の鉄釘が出土している。9世紀後半を前後する時期を考えている。

7ST265

越州窟系青磁椀は棺上の供献土器と考えられ、9世紀後半を前後する時期を想定している。

7ST270

北東尾根南側斜面直下の段造成地に位置し、7SB355掘立柱建物跡が廃絶した後に構築された木棺墓である。棺上の供献土器よりⅣ期と考えられる。供献土器はすべて土師器環aで構成される。

7ST295

棺上の供献遺物より9世紀後半を前後する時期を考えている。供献遺物は八稜鏡1面、土師器鉢1点、鉄製紡錘車1点であり、鏡は漆塗りの小箱のようなものに入れてあったと推定される。この八稜鏡の鈕孔には紐が残存し、宮ノ本7ST015出土鏡とは大きさや文様構成が異なる。八稜鏡の出土例は福岡県内では太宰府市宮ノ本遺跡¹⁴⁾の他、小郡市津古内畑遺跡¹⁵⁾、春日市門田遺跡¹⁶⁾があり、鉄製紡錘車の例も春日市門田遺跡、太宰府市前田遺跡¹⁷⁾などが挙げられる。

7ST300

出土遺物から構築年代は9世紀後半を前後する時期と考えている。

ここで注目されるのは方形鏡とミニチュアの硯である。方形鏡は鏡面を表にして出土した。このような例は漆塗りの木箱を出土した博多遺跡群築港線第2次調査683号土塚¹⁸⁾に認められ、他の遺物の出土状況もこれにうまく当てはまる。この例から7ST300の副葬品の埋納状況を復原すると、2段に仕切られた木箱の上段には鏡と硯が置かれ、その下(下段)に木製櫛と鉄製毛抜きを置いたと想定される。また、方形鏡は唐式鏡の中に類例を求められる。河南洛陽出土のもので、7ST300出土鏡より大きく、厚手である。この鏡は平脱方底鏡と呼ばれるもので、本来は鏡背面に金銀の薄板を漆膜に貼りそれを研き出した文様がつけられた鏡で、これはその鑄造したままの底鏡であるらしい¹⁹⁾。また、ミニチュアの硯については類例を見つけることが出来なかったが、硯を墳墓から出土した例としては、終末期古墳である奈良県御坊山3号墳出土の緑釉三彩の円面硯²⁰⁾や7世紀中頃に比定されている横穴墓である小郡市三沢京江ヶ浦遺跡5号横穴墓の墓道掘土出土の円面硯²¹⁾などが挙げられる。さらに先述した博多遺跡群築港線第2次調査683号土塚出土の木箱の中に、筆と黒色顔料が残存する褐釉小壺が置かれている。これが、ミニチュア硯の出土の意味を考える一つの参考事例となろう。

7ST310

棺上の供献土器よりⅣ期と考えられる。

7ST330

供献遺物は土師器坏a1点のみであり、大宰府出土の典型的な器形ではないため時期は確定できないがⅧ期である可能性が高い。

7ST345

供献遺物よりⅥb期と考えられる。

平安時代の墳墓にみられる選地について

ここでは前回の調査で指摘した平安時代の墳墓における選地と墓制について今回の調査結果に基づいて考察したい⁴⁾。今回の調査地点は宮ノ本第7-1次調査南尾根の西側にあたり、残存状況が悪く、墓制が確定出来なかった2基の他はすべて木棺墓と判断した。その中においても7ST002や7ST003が造られている斜面の西側に展開する墳墓群には供献品に優位性が認められ、丘陵の裾部周辺に造られた墳墓とはやはり格差があると言える。10世紀を前後する時期の墳墓から確認された鏡と初期陶磁器の数は宮ノ本遺跡では破片を含めると鏡4面と完形の陶磁器2点である。さらに、宮ノ本丘陵南側斜面の裾部にあたる前田遺跡⁵⁾からも鏡片や陶磁器片、そして青銅製丸柄が出土しており、これらを含めると、その保有数は県内最大と言える。まさにこの地が大宰府の奥津城であることを、この事象が示していると言っても過言ではなからう。北尾根の墳墓出土例が少ないことから尾根による墓制の違いはまだ確定出来ないが、階層による選地が行われていた可能性はより高くなったと考えられる。

掘立柱建物

7SB290

7SB355掘立柱建物の関連施設と考えられる。この建物跡には柱根抜き取り後に、埋め戻された土の中に炭化物が多量に含まれることや、土師器坏aを抜き取り後に埋置するなどの、祭祀的行為が確認されている。埋置された土器よりⅥb期と考えられる。

7SB355

出土遺物が無いため、時期は確定できないが、7SB290との関係やア期に比定される木棺墓7ST270との重複関係よりⅥb期と考えられる。この時期は宮ノ本丘陵において新たに造墓活動が開始される時期である。

なお、この掘立柱建物と同時期の墳墓は、隣接する地点に7ST345が造られるが、その他は、かなり離れた地点に2号墓があるのみであり、直接的な関係は認めがたい。

以上に報告した土器の年代観は山本(1990)によると、Ⅵa期は9世紀前半～中頃、Ⅶ期は9世紀中頃～後半、Ⅷ期は9世紀後半～10世紀初頭、Ⅸ期は10世紀前半～中頃と考えられている。

その他の遺構

7SK155

出土した遺物は破片であるため供獻品とは考え難いが、これらはⅡc期（布留式新段階併行期）にあたるものである。

7SX180

黒色土器小型壺と鉄製刀子、砥石が一ヶ所より固まって出土した。黒色土器の小型壺はA類で類例が認められ、その共伴遺物よりⅡ期にあたり、絶対年代は11世紀後半～12世紀初頭と考えられている。7SX180の時期もⅡ期の範疇で考えたい。

墳墓の頭位について

宮ノ本丘陵における古墳時代の墳墓の埋葬形態について、特筆すべきことは、その墳墓の個々が様々な供獻品を持つことである。ここでは供獻品の供獻場所と頭位決定条件の関係について述べる。

今回の調査では古墳時代の墳墓を多く検出したが、これらの墳墓は棺内の遺存状態が悪く人骨などの出土はなかった。そのため墳墓の頭位については推測の域を出ないものであるが、幸運にも頭位を推測する様々な条件に恵まれた。前段ではそれらの条件に基づいて頭位の決定をするに至った。以下、墳墓の頭位を推定したものについて、その決定条件として以下の事例に着目した。

- 1、棺内の副葬品、着装品の位置 …… 副葬品の埋置されている方向を基本的に頭位と考え、着装品については、その種類等により頭位を推測。
- 2、棺内の赤色顔料の散布状況 …… 棺内の赤色顔料の散布位置に偏りがあった場合、赤色顔料の散布された側を頭位と考えた。
- 3、棺の構造 …… 小口幅は広い側を頭位とし、石棺については石蓋の大きい側を頭位とした。さらに石蓋の重なる順番は頭位側が最後ではないかと考えた。また土器棺は上棺を頭位側とした。
- 4、棺底及び土器棺の傾斜角度 …… 棺底及び、土器棺の傾斜は傾斜の高い方向を頭位側と考えた。
- 5、棺外の供獻品の位置 …… 棺外の供獻品が埋置されている方向を基本的に頭位とした。

以上の条件全てが各墳墓に当てはまることはないにしても、条件が重なることにより頭位方向の決定条件を補強することにはなるものと考え、頭位を推測した。

しかし今回の調査結果の中で、これらの条件が重なることにより、新たな疑問点として残っ

たものに棺外の供献品の位置と蓋石の重ねる順序がある（棺内の副葬品及び、棺底の傾斜については良好な資料に恵まれなかったため今後の資料の増加に期待したい）。頭位を決定付ける条件として、供献品の位置が被葬者の頭位とし、石棺の蓋石の重ねる順序については（重ねる順序が知られた石棺は7ST135石蓋土壙の一基のみであった）被葬者の頭位側が最後ではないかと考えていたが必ずしもそうとは言えないという結果が得られた。以下にそれらの墳墓について詳しく記す。

7ST225

棺の小口幅、蓋石の規模から被葬者の頭位と考える方向に、小型丸底壺と刀子を供献する他、棺の両側面中位と、反対側の小口部分から、完形品ではないが長頸壺、鉢、甕を検出している。棺外供献品の位置は4個所に存在する。

7ST260

棺内のガラス小玉の検出状況と同方向に集中して赤色顔料が散布してあるため頭位はこちら側と判断したが、反対の小口方向の棺外に小型丸底壺と甕を検出。この墳墓の棺外供献品は被葬者の頭位とは反対の方向に存在することとなる。

7ST285

頭位は棺外供献品が一方の小口方向に片寄っていることと、小口の幅、棺外の赤色顔料の散布位置といった条件が重なる方向を頭位としたが、棺外供献品は小型丸底壺と鉄鏃、鉄鏃、壺（小破片であるため固化していない）などが棺の両側面に存在する。

7ST255

棺外に供献品を持つ大型の土器棺である。棺の被せる順序から頭位を推測したが供献品は下棺の脇（被葬者の足下）に埋置される。また、この土器棺は下棺に比べ上棺に大型の甕を使用している。

7ST135

棺の蓋石の規模が大きく違っていたため、大きい蓋石の方向を頭位と考えたが、この墳墓の蓋石の重ねる順序は、大きい蓋石の方向から、つまり頭位と推測した方向とは逆の方向（蓋石の規模の大きい方）から蓋石を重ねていったこととなる。

今回の発掘調査の結果から言えば、棺外供献品の位置、石棺の蓋石の重ねる順番は、こと宮ノ本遺跡においては、頭位を決定する条件にはなり得ないという事となった。つまりこの条件のみで頭位を決定するという行為は多分に危険性ははらんでいるといえる。

また、先述した頭位の決定条件も、あくまで現代人の推測の領域でしかなく、古来の墓制には我々が考えも及ばないような、さらに複雑な規則や条件が存在していた、あるいは規則や条

件に縛られた現代人の考え過ぎでしかなく、規則などによって決定付けられるものではなかったものなのかもしれない。今後、同時期の遺跡などの発掘調査により多くの資料が集まること、そして多くの方々が高位の推測を試みること等による今後の研究に期待したい。

そこで、今回の調査では、頭位を決定するより科学的な方法として、残留脂肪酸分析用のサンプルを各墳墓の棺内埋土中より採取している。この分析結果のいかんによって新たな例外性や頭位決定条件の補強材料が生まれることとなるであろう。墳墓の調査方法として多く採用されることが望まれる。

※頭位については現地では検出した結果をそのまま記載したが、編集終了後に再検討した結果、問題のある部分も生じたので最後に頭位についてのみ別に検討を加えた。混乱が生じているがご意図願いたい。

(参考文献)

- 柳田康雄 1982 「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』下巻
柳田康雄 1991 「土師器の編年 九州」『古墳時代の研究』6
山本信夫 1990 「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」『乙益重隆先生古希記念九州上代文化論集』

(註)

- 1) 沢田康夫「妙法寺古墳群発見の割竹形木棺について」『井河古墳群』1983 那珂川町教育委員会 に同様の遺存例が報告されている。
- 2) 小林義彦「山ノ鼻1号墳」1992 福岡市教育委員会 墳丘下の調査で検出された土壌裏SR-2にはこのような小溝が3条確認され、木蓋をする際に渡した木材の痕跡の可能性を指摘している。
- 3) 山野洋一・奥村俊久「阿志岐古墳群」1982 筑紫野市教育委員会 B26号墳の割竹形木棺の埋置方法と類似すると考えている。
- 4) 狭川真一・塩地潤一「太宰府・佐野地区遺跡群」1993 太宰府市教育委員会
- 5) 吉留秀敏「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』144 1990 考古学研究会
- 6) 蒲原宏行「北部九州出土の畿内系二重口縁壺-その編年と系譜をめぐって-」『古文化談叢』第20集中 1989
- 7) 石山勲「剣塚1号墳」『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書XXIV』1987 福岡県教育委員会
- 8) 山本信夫「官ノ本遺跡」1980 太宰府町教育委員会
- 9) 児玉真一「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」5 1984 福岡県教育委員会
- 10) 奥村俊久「日焼遺跡」1989 筑紫野市教育委員会および柳田康雄「土師器の編年九州」『古墳時代の研究』6 1991
- 11) 奈良国立文化財研究所西口壽生氏の御教示による

- 12) 奈良国立文化財研究所川越俊一氏、奈良県立橿原考古学研究所寺沢薫氏の御教示によると、中国製の金属器模倣品の可能性も考える必要があるらしい。
- 13) 高島忠平・七田忠昭「二塚山」 1979佐賀県教育委員会
- 14) 大村直「弥生時代における鉄族の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号 1983
- 15) 川村浩司「筑前の小規模墳墓出土土器の検討」『九州考古学』第60号 1986九州考古学会
- 16) 宮田浩之「筑紫平野北部の古墳出現期の一様相」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 1992
- 17) 狭川真一「宮ノ本遺跡Ⅱ」 1987太宰府市教育委員会
- 18) 宮小路賀宏「津古内畑第3次（遺構編）」 1972福岡県教育委員会
- 19) 井上祐弘「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第3集 1977 福岡県教育委員会
- 20) 「太宰府市史」考古資料編 1992
- 21) 力武卓治・大庭康時「博多」都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告2 1988 福岡市教育委員会
- 22) 梁上椿「巖窟藏鏡」 同朋社
- 23) 泉森敏「竜田御坊山古墳」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県立橿原考古学研究所 1977
- 24) 宮田浩之「三沢京江ヶ浦遺跡」みくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告 -12- 1989 小郡市教育委員会



Fig.114 作業風景

別 表

土師器の量量

A. 番号 B. 挿図番号 C. 内底のナアの有無

○×

○×

D. 板状圧痕の有無

単位: cm

75T270

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
Hc (ヘラ)	1	1	11.4	3.2	7.4	○	?
	2	2	11.8	3.1	7.4	○	○
	3	3	12.0	3.5	9.0	○	○
	4	4	12.0	3.3	8.5	?	?
	5	5	12.2	3.5	8.0	?	○

75T205

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
Hc (ヘラ)	1	1	10.5	2.4	4.8	○	○
	2	2	10.9	2.3	7.2	○	○
	3	3	11.4	2.4	8.0	○	?

75K290a

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
Hc (ヘラ)	1	1	13.4	3.6	7.8	○	×

75T230

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
Hc (ヘラ)	1	1	11.2	3.5	7.3	○	○

75T295

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
Hc (ヘラ)	1	1	9.8	4.9	7.6	○	○

75T345

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
Hc (ヘラ)	1	2	13.1	4.1	7.8	○	○

75T310

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
Hc	1	8	12.1	4.6	6.9	×	○
Hc (ヘラ)	1	1	10.6	2.1	7.0	○	○
	2	2	10.8	2.2	7.3	○	○
	3	3	11.0	2.4	6.6	×	?
	4	4	11.2	2.1	7.6	?	○
	5	5	11.2	2.3	7.2	×	?
	6	6	11.3	1.8	6.8	?	?
	7	7	11.4	2.2	7.6	○	?

鉄製釘計測表

75T120

器物番号	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 1-1	4.5+	0.5	0.5		
	5.0+	0.45	0.4		
2	6.2+	0.4	0.5		
3	3.85+	0.3	0.7	2.7	1.35+
4	5.2+	0.3	0.4		
5	5.65+	0.35	0.4	2.3	3.35+
6	4.0+	0.5	0.45		
7	4.7+	0.4	0.35	2.1	2.6+
8	5.05+	0.3	0.5		
9	5.25+	0.35	0.3		
10	4.65+	0.3	0.3		
11	4.3+	0.35	0.3		
12	4.75+	0.35	0.3	2.4	2.35+
13	6.4	0.6	0.5	2.2	4.2
14	5.95+	0.35	0.3		
15	5.9+	0.4	0.4		
16	4.4+	0.4	0.4	2.3	2.1+
17	4.6+	0.4	0.3	2.3	2.3+
18	3.15+	0.4	0.3		
19	2.05+	0.4	0.45		
20	3.6+	0.45	0.4		
21	3.7+	0.35	0.3	2.6	1.3+
22	1.5+	0.3	0.3		
23	2.0+	0.3	0.3		

A; 木質変化点・上部からの計測値

B; 木質変化点・下部からの計測値

() は欠損試料

> は釘本体の残存長がサビ等で不明なもの

75T270

器物番号	長さ	幅1	幅2	A	B	
Fig. 91-4	5.63	0.5	0.53		4.65	
	7	3.4+	0.6	0.5		
	8	4.95	0.5	0.6	2.7	
	9	5.2	0.55	0.55		
	10	2.6+	0.6	0.5		

75T265

器物番号	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 88-2	6.75+	0.25	0.35		
	7	2.6+	0.5	0.45	

75T295

混合物番号	成分	概1	概2	A	B
Fig. 96-4	4.6+	0.3	0.3	2.1	1.9+
	5.2+	0.25	0.3		
	4.4+	0.4	0.35		
	5.7	0.3	0.35		
	3.85+	0.45	0.4	6.5+	3.35
	3.8+				
	3.8+	0.3	0.35		
	2.9+	0.5	0.45		
	2.7+	0.45	0.55		
	3.2+	0.5	0.45		
	4.45+	0.3	0.3		
	2.8+	0.35	0.4		
	3.0+	0.3	0.2		
	4.0+	0.35	0.35		4.0+
	2.7+	0.2	0.2		
	3.0+	0.4	0.3		
	2.15+	0.35	0.4		
	2.5+	0.25	0.3	0.25+	
	1.65+	0.3	0.4		
	2.3+	0.45	0.45		
2.35+	0.35	0.35			

75T300

混合物番号	成分	概1	概2	A	B
Fig. 98-4	7.15	0.4	0.35	1.8	2.3
	7.3			2.3	4
	5.5+	0.35	0.3	2.1	2.4+
	5.4+	0.4	0.4		
	3.9+	0.5	0.45	2.6	1.3+
	2.5+	0.6	0.65		
	4.0+	0.5	0.6		
	3.45+	0.35	0.35		
	4.0+	0.4	0.45		
	3.9+	0.4	0.5		
	4.8+	0.3	0.3		
	2.8+	0.3	0.6		
	0.65+	0.35	0.3		
	3.3+	0.3	0.3	2.4	0.8+
	3.0+	0.2	0.2		
	2.65+	0.35	0.25		
	2.7+			1.6	1.1+
	2.1+				
	1.6+	0.4	0.4		
	1.2+	0.4	0.35		
	2.2+	0.35	0.3		
	2.3+	0.4	0.3		
2.15+	0.35	0.35			

75T305

混合物番号	成分	概1	概2	A	B
Fig. 70-5	6.65>	0.5	0.55	2.2	4.45

75T310

混合物番号	成分	概1	概2	A	B
Fig. 101-4	5.9	0.4	0.35	1.8	4.1
	3.8+	0.4	0.45		
	3.2+	0.35	0.35		
	1.8+	0.45	0.5		
	2.6+	0.5	0.35	2.6+	
	2.5+	0.4	0.5		
	3.75	0.3	0.2		
	6.7	0.2	0.2	2.1	4.6

75T330

混合物番号	成分	概1	概2	A	B
Fig. 104-3	6.45>	0.45	0.3		
	7.55>			1.7	5.8
	6.6			1.9	4.2
	6.45+	0.5	0.5		
	6.4>	0.45	0.5	2.1	4.3
	8.1>			1.9	6
	7.35	0.35	0.35		
	7.1	0.4	0.3	2.1	5
	7.5			1.6	4.9
	6.1	0.3	0.25	1.8	4.9
	7.2>	0.4	0.3	1.6	3.6
	5.5+	0.2	0.2		
	5.1+	0.3	0.4	2.1	3.0+
	6.45+	0.2	0.25		
	3.9+	0.3	0.35		
	4.15+	0.4	0.5		
	4.7+	0.35	0.25	2.1	2.6+
	4.25+	0.35	0.4		
	3.2+	0.35	0.35		
	3.1+	0.35	0.45		
	3.45+	0.45	0.35		
	3.35+	0.3	0.35		
	3.4+	0.55	0.4		
	3.5+	0.3	0.35		
1.95+	0.3	0.35			
2.35+	0.35	0.35			
3.25+	0.4	0.3			
2.2+	0.3	0.4			
2.45+	0.5	0.5			
3.5+	0.25	0.3			
2.5+	0.4	0.35			
1.95+	0.25	0.3			
2.55+	0.25	0.3			
2.3+	0.3	0.4			
1.9+	0.3	0.3			
1.3+	0.25	0.4			
1.4+	0.2	0.2			
1.8+	0.25	0.3			
3.35+	0.4	0.35			
3.15+	0.3	4.3			

75T340

混合物番号	成分	概1	概2	A	B
Fig. 81-1	3.6+	0.6	0.55		
	2.55+	0.45	0.35		

写 真 图 版

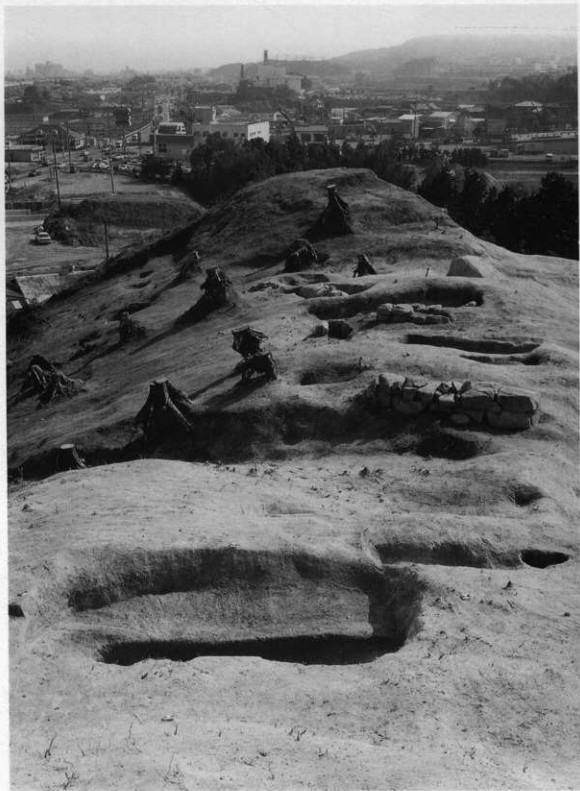


宮ノ本遺跡第7-2次調査全景（上が北東）

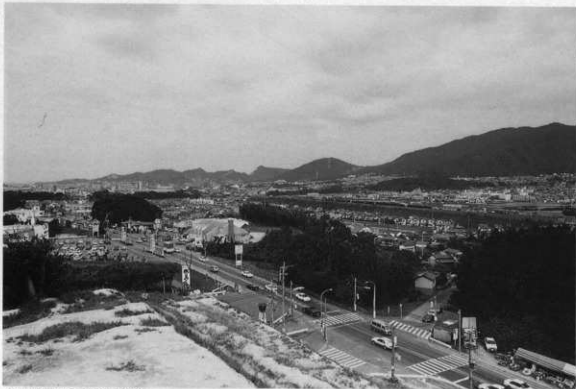
Pla. 2



宮ノ本遺跡第7-2次調査全景（上が北西）



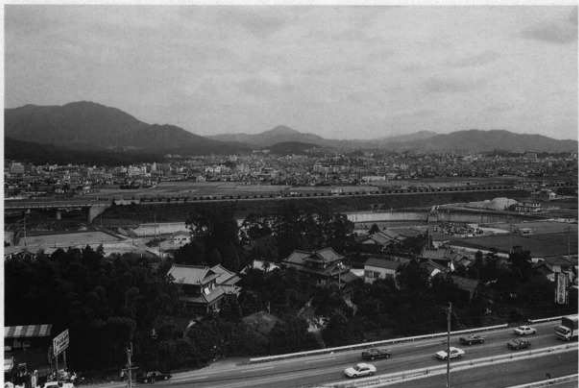
南東尾根全景（西から）



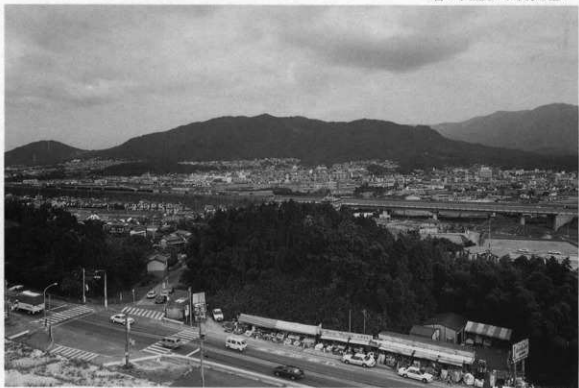
宮ノ本丘陵より北方を望む



宮ノ本丘陵より南東方を望む



宮ノ本丘陵より東方を望む



宮ノ本丘陵より四王寺山城を望む

Pl. 6



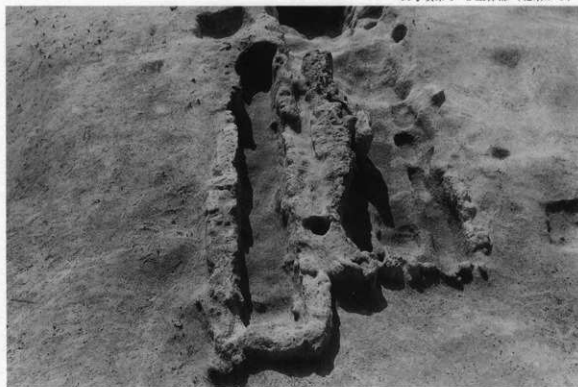
13号墳主体部（南から）



13号墳主体部完掘状況（東から）



14号墳第1・2主体部（北東から）



14号墳第1・2主体部（北東から）

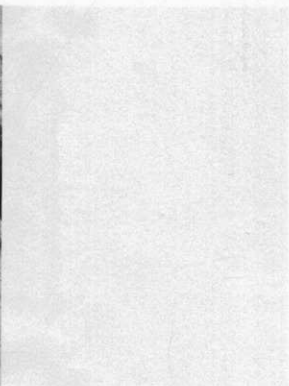
Pl. 8

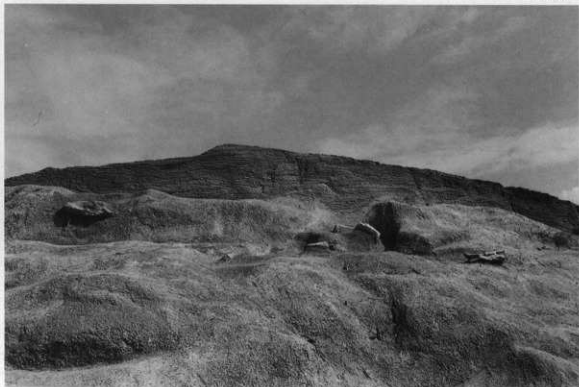


14号墳主体部完掘状況（北東から）

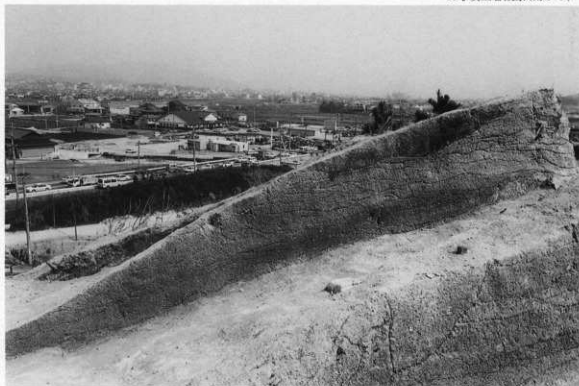


14号墳第2主体部完掘状況（北東から）





15号墳土層観察(南から)



15号墳土層観察(西から)

Pla.10



15・16号墳土層観察(南から)



15号墳下層遺構検出状況(南から)



7ST360粘土目張り状況（北から）



7ST360石蓋検出状況（北から）

Pla. 12



7ST360石蓋除去状況 (北から)



7ST360粘土枕検出状況 (南から)



7ST365検出状況 (西から)

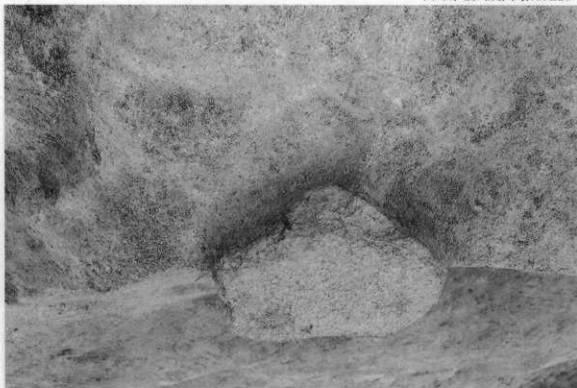


7ST365完掘状況 (南から)

7ST370完掘状況 (北東から)



7ST370掘出状況 (北東から)

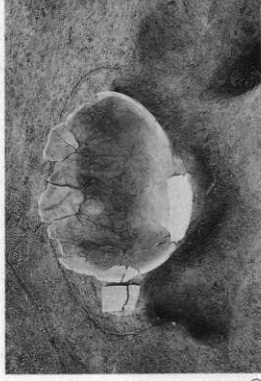




7ST115検出状況（東から）



7ST115土層観察（東から）



7ST115完結状況（東から）



7ST042抜き取り部土層観察（北から）



7ST042遺物検出状況（北から）



7ST042遺物検出状況（東から）



7ST165棺内埋土除去状況7ST042遺物検出状況（東から）



7ST165下層施設及び石検出状況7ST042遺物検出状況（南から）

Pla. 18



7ST165土層観察(北から)



7ST165完掘状況(東から)



7ST255土器棺検出状況（西から）



7ST255土器棺検出状況（北から）



7ST255供献土器検出状況（南から）



7ST255棺内赤色顔料検出状況（北から）



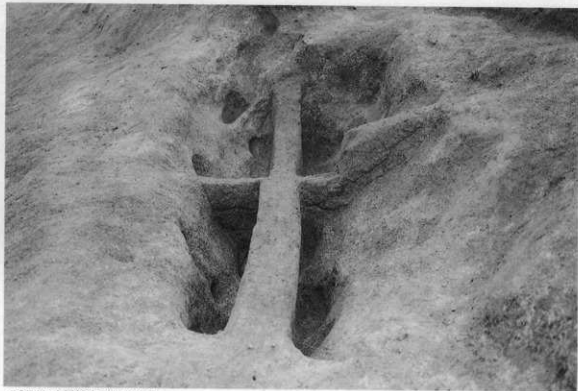
7ST255土層観察（北から）



7ST185完廬状況（北西から）



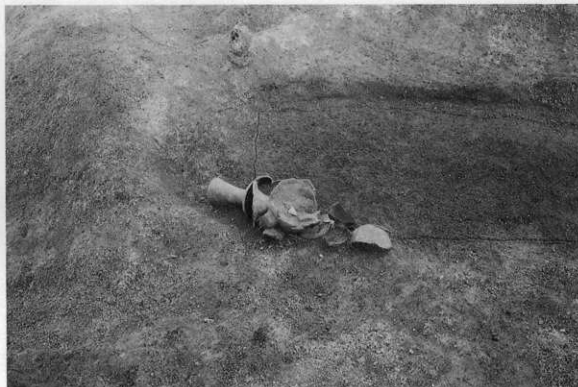
7ST205土層観察（南東から）



7ST205土層観察（北東から）



7ST205完掘状況（北西から）



7ST245遺物検出状況（南から）



7ST245遺物検出状況（西から）

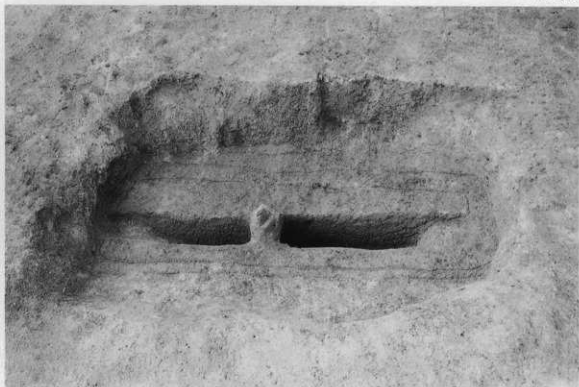
Pl. 24



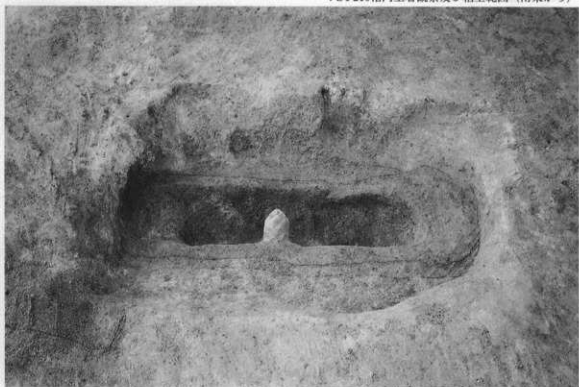
7ST245赤色顔料範囲状況 (南から)



7ST245完掘状況 (北から)



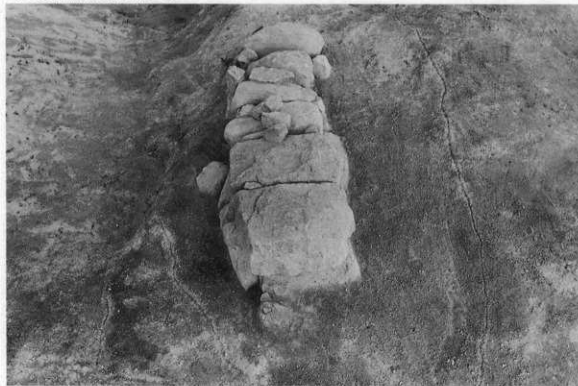
7ST210棺内土層観察及び粘土範囲（南東から）



7ST210棺内埋土除去状況（南東から）



7ST225石蓋検出状況（南から）



7ST225石蓋検出状況（西から）



7ST225遺物検出状況(西から)



7ST225石蓋除去状況(南から)



7ST260石蓋及び供献土器検出状況（東から）



7ST260石蓋除去状況（北東から）



7ST260棺内土層観察（北西から）



7ST260棺内埋土除去状況（南東から）



7ST285石蓋及び供献土器検出状況（南西から）



7ST285棺内埋土除去状況（南西から）



7ST135石蓋検出状況（南西から）



7ST135完掘状況（南西から）



7ST190石蓋検出状況（北西から）



7ST190完掘状況（南東から）



7ST275石蓋検出状況（南東から）

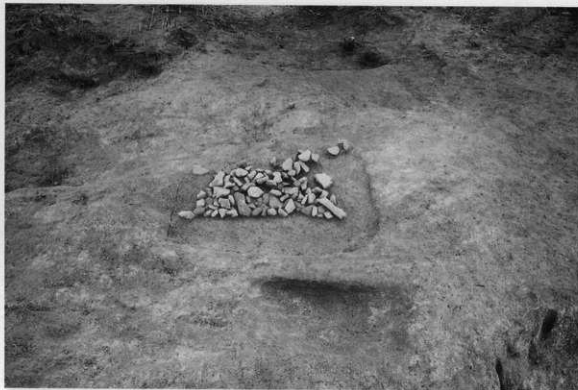


7ST275供献土器検出状況（北から）



7ST275完掘状況（南東から）





7SK039検出状況（北東から）



7SK039検出状況（南西から）



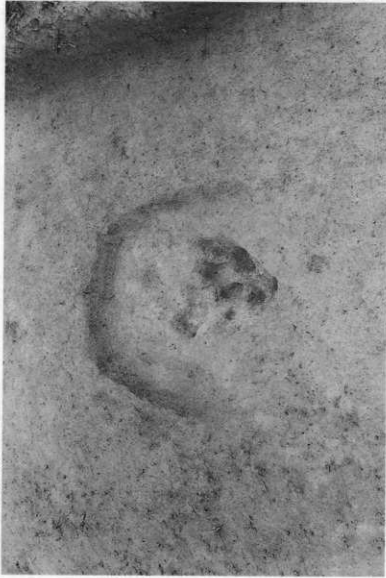
7SK150遺物出土状況（南西から）



7SK150土層観察（南から）



7SK155上層観察（北から）



7SK155完備状況（北から）

7ST315土層観察（北西から）



7ST315土層観察（北東から）



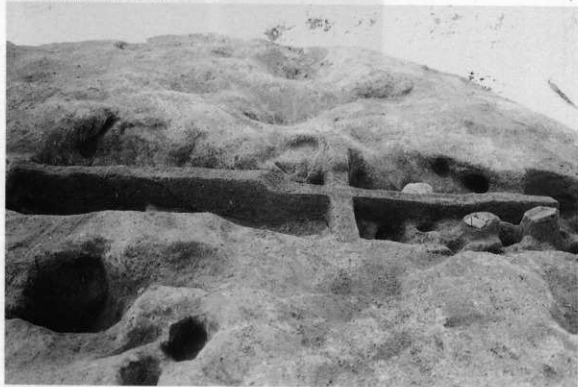
7ST315遺物検出状況（北から）



Pl. 38



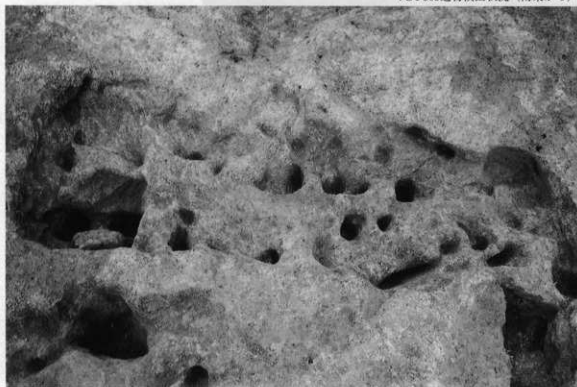
7ST305土層観察（北東から）



同上（南東から）



7ST305遺物検出状況（南東から）



7ST305完掘状況（南東から）



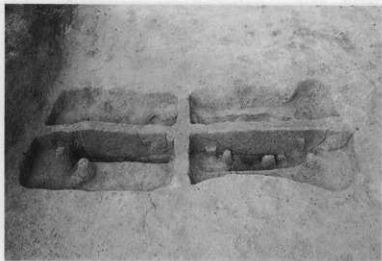
7ST340(091)土層観察(南東から)



7ST340(091)遺物検出状況(南東から)



7ST340(091)完掘状況(北西から)



7ST120土層観察 (北西から)



7ST120遺物検出状況 (北西から)



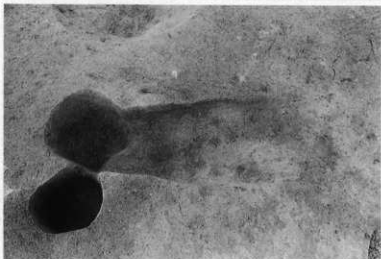
7ST120完掘状況 (北西から)



7ST265遺物検出状況（北西から）



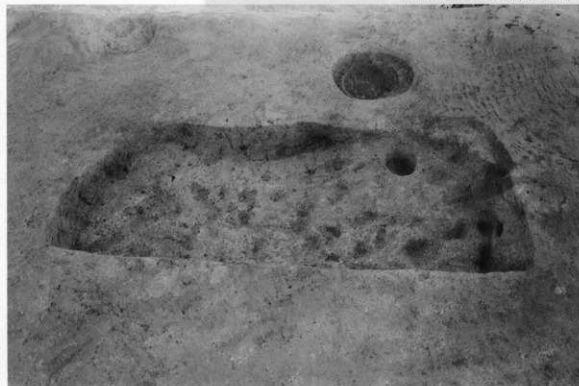
7ST265土層観察（北西から）



7ST265完掘状況（北西から）



7ST270遺物検出状況（北西から）



7ST270完掘状況（北西から）



7ST295土層観察（南西から）



同上（北西から）



7ST295完堀状況（北西から）



7ST295鏡検出状況 (南東から)



7ST295遺物検出状況 (南東から)

Pla.46



7ST300鏡検出状況（南西から）



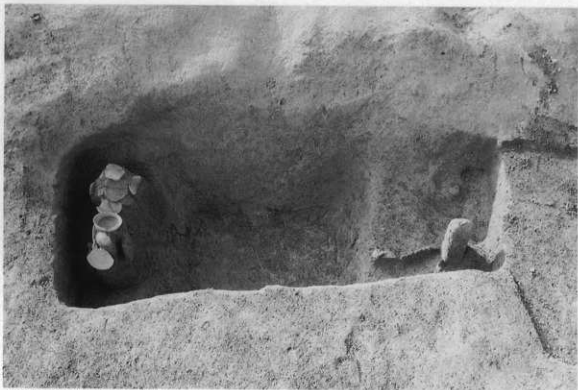
7ST300遺物検出状況（南東から）



7ST310南側小口部遺物検出状況（南から）



7ST310北側小口部遺物検出状況（南東から）



7ST310遺物検出状況（南東から）



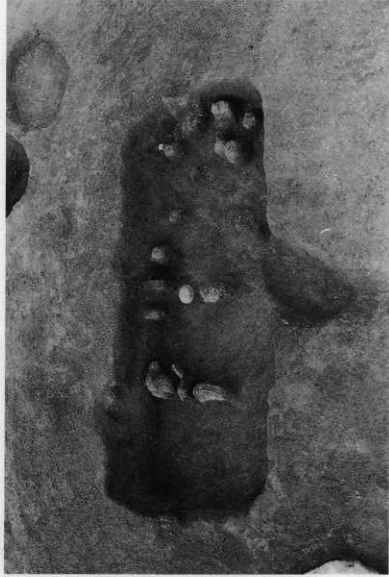
7ST310完掘状況（南東から）



7ST330土層観察（北から）



同上（西から）

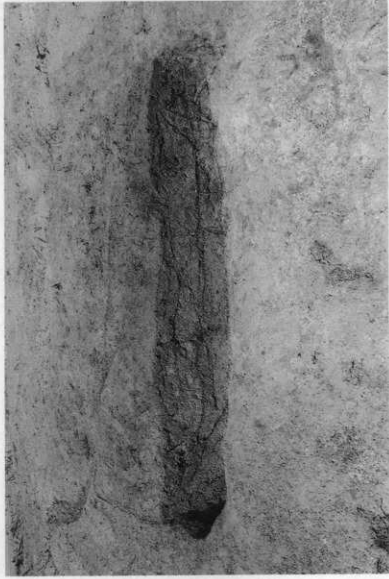


7ST330遺物検出状況（西から）



7ST330完掘状況（西から）

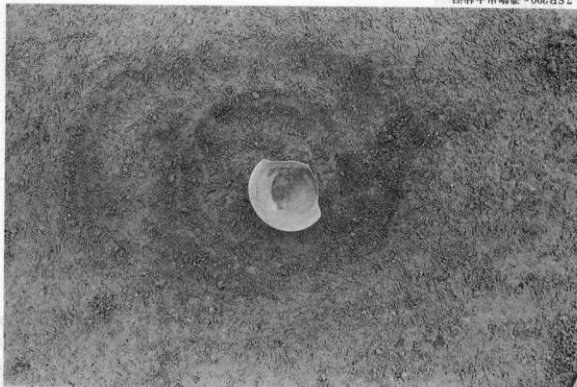
Plat. 51



7ST345土層観察 (西から)



7ST345完掘状況 (西から)





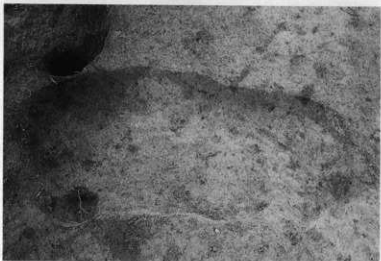
7SB355 (北東から)



7SX180 (北から)



7SK325 (南から)



7SK335 (西から)



7ST200 (北から)

13号墳



9-1



14号墳



18-1



18-2



18-3



18-6



18-7

Pla. 56

14号墳



18-4



18-5

7ST115



28-1

7ST042



40-5



40-4



40-2



40-1

7ST042



35-6

7ST165



36-10

7ST042



40-3

7ST165



36-9

7ST165



40-8

7ST255



40-11

Plat. 58

7ST255



38-13

7ST255



39-14

7ST255



40-12

7SX170



41-1

7ST255, 7SX170出土遺物



46-4



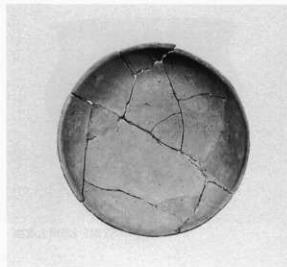
46-3



46-2



46-5



Pla. 60

7ST245



46-6

7ST225



51-5



51-1



51-3



51-2



51-4

7ST245・225出土遺物

7ST260



53-1

7ST260



53-2

7ST285



56-5

7ST285



56-4



56-2



56-1

7ST275



65-2



65-1



65-3

7ST260・275・285出土遺物

Pla. 62

7SK145



67-1

7SK155

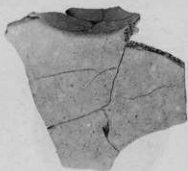


74-2

7ST155



74-1



7ST315



77-1

7ST305



79-3

7ST305



79-4



7ST305



79-1

7ST270



90-1



79-2



90-2

7ST265



87-1



90-3

7ST295



95-1



90-4

7ST295



94-3



90-5

7ST 305・265・270・295出土遺物

Pl. 64

7ST300



98-2



98-1



98-3



7ST310



100-3



100-2

7ST300-310出土遺物

7ST310



100-1

7SB290 a



107-1



100-4

7SX180



109-3



100-5



100-8



109-1

7ST330



103-1

7ST235



a

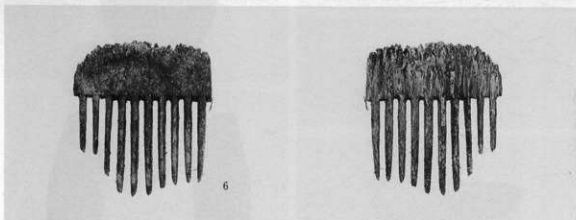
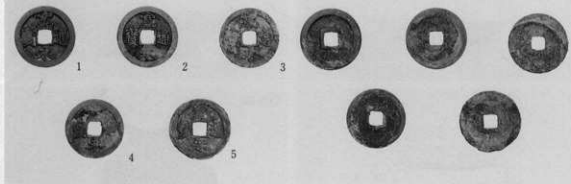
7ST345



103-2

Pla.66

7ST235



13号填黄茶色土



7ST235、13号填黄茶色土出土遺物

13号填黄茶色土



111-2



表土



111-4



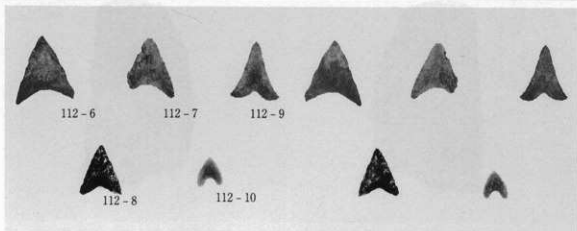
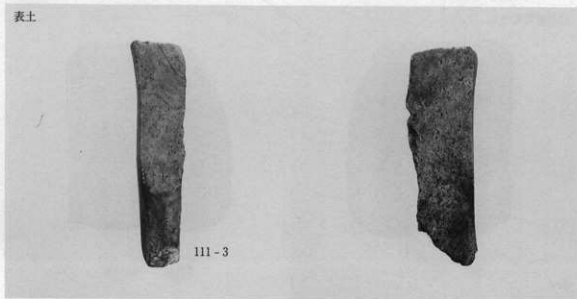
13号填黄茶色土



112-5



表土



表土ほか出土遺物

太宰府市の文化財 第27集
太宰府・佐野地区遺跡群Ⅴ
— 宮ノ本遺跡第7-2次調査 —

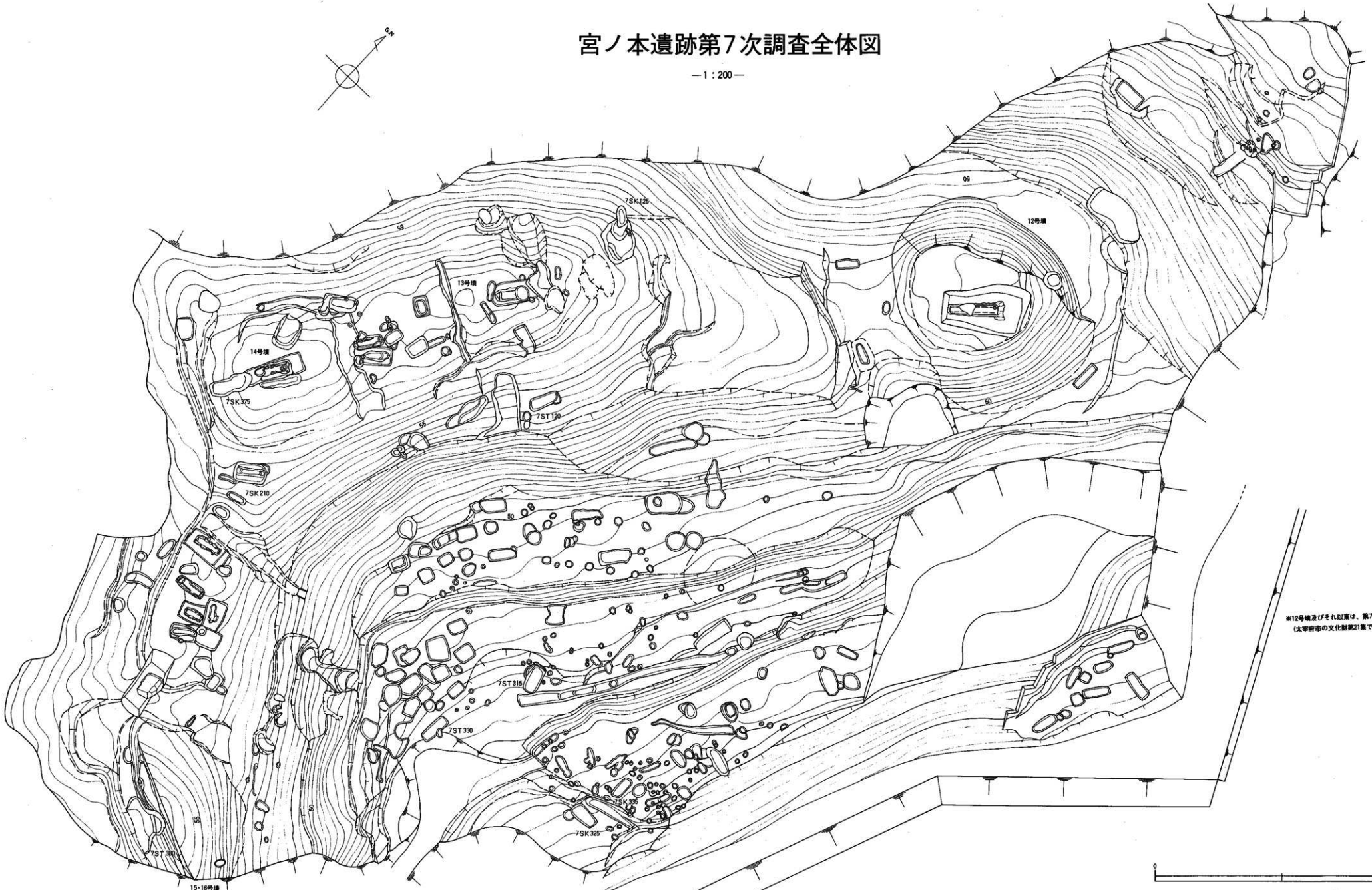
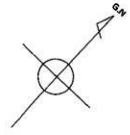
平成7年3月

発行 太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺1-1-1

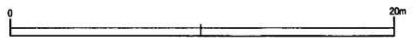
印刷 大道印刷株式会社
春日市日の出町6-23

宮ノ本遺跡第7次調査全体図

- 1 : 200 -



※12号棟及びそれ以後は、第7-1次調査
〔太宰府市の文化財第21号で指定済〕



「太宰府・佐野地区遺跡群V」付図